

川柳塔

平成十四年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九〇七号



日川協加盟

No. 907

十二月号

寒中見舞募集

○ 本誌平成十五年（二〇〇三年）二月号掲載
○ 締切 十二月二十三日

川柳塔社事務所宛

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時半。会場はいずれもアウィーナ大阪です。

平成十四年（二〇〇二年）

十二月六日（金） 四階 金剛

平成十五年（二〇〇三年）

一月七日（火） 四階 金剛

二月七日（金） 四階 金剛

三月六日（木） 四階 金剛

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741代 FAX 06-6652-2928

「一つの世界」

河内 天笑

昭和三十三年二月三日夕刻、高校で一年先輩の友人が突然やつてきた。

その日私は、卒業を目前にして単位不足の独逸語の試験を翌日に控え、ねじり鉢巻であった。客人の名は通称イトン。高校時代、彼はバスケット部でスラリとして色白でハンサム、おまけに裕福と、体操部の私と正反対だが、毎朝一緒に自転車通学をするほど親しかった。そんな彼と大学は違ったが、何かあるたびによく私を誘ってくれたお陰で、彼の大学にも沢山の友人ができた。来てくれた彼には悪いが、翌日の独逸語の試験の事情を話した。ところが無視して「琥珀へ行こや」と彼。そこは行きつけの喫茶店で、断るのが何故か悪い気がしてつき合うことにした。特別な話題があった記憶はなく、太宰治はいいが、西田幾多郎は難しいなど四方山話をしたようだった。

その夜の彼はとても陽気で、私の三畳間へ戻ったあとも「飲もか」「よっしゃ飲も」となった。もう独逸語はそっちのけで、兄の棚からとっておきのバレンタインをかつ攫いすぐ空に。五右衛門風呂をぬくめてゆつくり裸のおつき合ひ。歌つたりわめいたりしていたところ「今何時や思ってるんや」と怒ったことのない父に怒鳴られた。

彼は帰りぎわ、本棚の上のヒットソング集（ジュームス・ディーン）の表紙）を手にとって見ていたが、「これくれや」と言った。私は即座に「ええよ」と答えると「何か書いてくれ」とのこと。暫く考え「歌えや歌え踊れや踊れこの世はたのし」と、その時の心境をそのまま本で大きく書いて渡した。彼が帰ったのは午前二時過ぎであった。翌朝七時頃、彼の兄が血相変えて彼の死を伝えに来た。睡眠薬による自死ということであった。今でいう躁鬱病だろうか、親しかった私にもその死は理解できなかった。ついさつきまで騒いでいた顔に手を当てた冷たさを、今も忘れられないでいる。

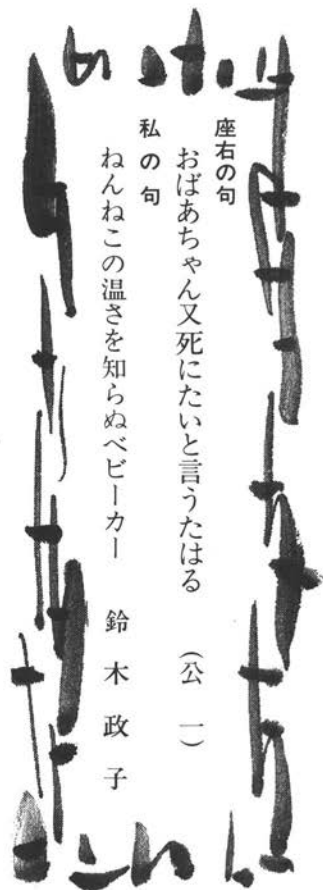
勿論独逸語はまた落ち、卒業式終了後再テストを許され、七日遅れでひっそり無事

に卒業することができた。

彼の葬儀には友人が沢山参列した。そのあと、南海本線湊駅へ皆さんを見送りに行ったが、途中徐々に淋しさがつのつてきた。彼を通じて知り合った皆さんと疎遠となるには忍びなく、私は会の結成を提案した。「野郎会」はこうして結成された。会は十二名で六年ほど年一度交流したが、結婚や転勤のため自然消滅となった。

そのうちの四、五人は今も個人的な付き合いが続いている。デザイナーの鳥山昭彦氏は、東大阪エイス教室を訪ねてくれた。岡本益弘氏の二人の子供は、私が名付親になった。西内朋一氏は長い間会っていないが、四年前の高校の同窓会で中野健吾氏（番傘同人）から私のことを聞き、川柳教室に来てくれた。五年前に妻を亡くした彼には、川柳は無聊を慰める渡りに舟であった。昔、岡晴夫とアチャコの物真似が得意だった私に「豆アチャ」と仇名をつけたお返しとして「朋月」の雅号をつけた。

早速したイトンだが、こうして川柳に拘る友達を沢山プレゼントしてくれた。今存命なら川柳をしていてくれただろうか。



座右の句

おばあちゃん又死にたいと言いたはる

(公二)

私の句

ねんねこの温さを知らぬベーカー

鈴木政子

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 一つの世界

初歩教室を辞めるに当り

川柳塔(同人吟)

自選集

水煙抄

麻生路郎物語(12)

俳風柳多留二四篇研究 48

愛染帖

同人特集 お金百句

国民文化祭夢フェスタととり2002

茴香の花

河内天笑……(1)

吐田公一……(2)

河内天笑選……(4)

奥田みつ子選……(58)

東野大八……(81)

波多野五楽庵選……(86)

波多野五楽庵選……(84)

波多野五楽庵選……(86)

波多野五楽庵選……(84)

波多野五楽庵選……(86)

波多野五楽庵選……(84)

政岡日枝子選……(90)

初歩教室を

辞めるに当り

吐田公一

平成八年六月から担当して六年七か月、その間多くの柳友(勿論初歩の方を含めて)に支えられて、この大任を果すことができたことは、私にとって生涯忘れることができないいい思い出になったと共に、大いに自分自身の勉強になったこともまた事実であり、感謝に耐えません。

思い起せば平成八年の春、川柳塔社主幹であられた橋高薫風先生から、私の勤め先へ突然のお電話があり「公一っあん、急なことで申し訳ないが川柳塔の六月号からの初歩教室を担当してもらえんか」というお話。私は咄嗟に「そのような大それた任にはつけない」旨申し述べお断りしたのですが、いろいろと先生に口説かれて、止むなくお引き受けしたのが受難(?)の始まりと申しましようか。川柳について何も知らなかっただけに、付け焼き刃のように本を買ひ漁り勉強を始めた次第です。いま思えば本当に汗顔ものでした。

昔から「怖いもの知らず」と言われますが、実際に初歩教室を担当してみても始めてこの言葉が痛感されました。自らの語彙の不足や着

「 駅 」

一路集「午後」

「反 省」

初歩教室「ほどほど」

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

十一月本社句会

天国の小林一夫さんへ

各地柳壇（佳句地十選／宗 水笑）

柳界展望

十二月各地句会案内

■編集後記

小糸昭子選 …… (92)

蘭田 猊 啓選 …… (92)

塔 寛子選 …… (93)

吐 田 公一 …… (94)

藤 田 泰子 …… (96)

相 馬 一花 …… (101)

奥田みつ子 …… (106)

奥田みつ子 …… (106)

奥田みつ子 …… (107)

奥田みつ子 …… (122)

奥田みつ子 …… (124)

奥田みつ子 …… (126)

楓 葉・朱 夏

座右の句

走ってごらん運はあとからついてくる

私の句

四方八方丸くおさめている無学

（美代子）

太 田 扶美代

想の乏しさが目立ち、果してこれでこの大任が果せるのかと反省の日々でありました。

だが、これを支えて下さったのは川柳塔社事務局の鍛原千里さんや編集部の方々、別けても奥田みつ子さん、西出楓葉さん達の励ましであり、また初歩教室の方々の温かいお礼状の数々でした。手許にありますこのお礼状の束は私の畢生の宝物として黄泉までも持参する所存で居ります。

ただ自負する訳ではありませんが、この教室を足掛りにして川柳塔社の同人となられた方々や、各柳会で大活躍をなさっておられる方々が育たれましたことは、勿論ご本人の天分とはいえ、私の唯一の欣快とするところであります。

此の度ご担当になられる三宅保州先生は、川柳塔社第一級の川柳家であり、初心者のご指導には最適任の方だと思っておりますので、この先生のご指導の下、益々のご研鑽を積まれますようお願いする次第です。

何事もそうですが、川柳の道はたった十七音字の中に人間を詠み込むという難儀な作業なのですが、川柳にご縁を持たれた限り麻生路郎祖師が言われた、自らの生涯に自分しかできない一句を残されるための努力を最後にお願ひして筆を擱きます。

本当に長い間ありがとうございました。教える自分が初歩を抜け切れず



河内天笑選

東大阪市 谷口 義

一人ずつ外に出て見る秋の月
お月様に聞いて頂く外はない
見ていないようで見ている昼の月
どこから見やすいように月は出る
おばあさんの服は石切さんに売っている
水分がたりなくなつて旅に出る

鳥取県 新家 完司

道端にしゃがむと人が寄ってくる
金欲しい欲しいと祈る人ばかり
つなぐのは言葉 離れるのも言葉
戦車など乗りたくはなし見たくなし
カサブタが取れ赤ちゃんの肌になる
赤ちゃんが咥えてる指おいしそう

河内長野市 加島 由一

降りる駅乗る駅通り過ぎた駅
電卓を持って集まる遺産分け
目でいくら好きと言っても通じない

集まつて飲んで歌つただけのこと

泣くときは母さんの膝父の胸

十二月終りよければ全てよし

豊中市 安藤 寿美子

お彼岸の朝だけここに日が当る

詩人にはとうていなれぬ炊飯器

車椅子ぶつとばそうぜ回復期

別れ際母の涙を見たという

いささかの冷酒をふくみ秋の夜

控え目の生き方今もこれから

倉敷市 小野 克枝

結び目をときにゆるめてまわり道

女から女に戻るまでの修羅

心割る素直さ親の目にまぶし

考えて正直者は向きを変え

沈黙の励まし貰う父の墓

残照へ静かに燃える命抱く

岡山県 富坂志重

晩学に何時も眠気がじゃまをする
この土にかえる日思い草を引く
幕おろすまでは笑顔をとやすまい
私は詩人月がバナナに見えて来た
歳を取ってもお金がすきで困ります
詰まってるはずの記憶が出て来ない

出雲市 佐藤治代

異常なし大きく息を吐く命
命ある限りの今を踊らねば
喧嘩して仲直りして年拾う
強情な自分に愛想尽かしてる
わたくしの足に潜んでいる阿修羅
高望みしては転んでばかりいる

和歌山市 木本朱夏

戦争が好きで難儀な男たち
落ちるだけ落ちたら浮かぶしかないさ
缶蹴って行くあてのない秋の天
哀しみが透き通るまで硝子拭く
物干に妻の思想が落ちている
不揃いの皿と小鉢で響き合う

和歌山市 松原寿子

溝ひとつ越え生きざまに味が増す
北風に激しく髪がうねり出す
掌をすべる砂に命の音がある

開封の指へ流れてくる電波

笹舟の進路が重い株下落

点数が辛くて波に乗り切れず

和歌山市 川上大輪

生命線がボックリ寺へ続いている
ネクタイを締めて笑顔を消しておく
ひと言を飲んで動かぬ喉仏
モンタージュ人の記憶はいい加減
仏壇と向かう祖母には隙が無い
遠回しに言うから余計分からない

唐津市 久保正剣

お見合の引立役に誘われる
下駄の音絶えて幾年雪の朝
焼芋も庶民の味でない値段
遠からず大蔵省も自己破産
年ごとに雑煮が怖い喉仏
会う度に歳を訊かれる顔の皺

唐津市 樋口輝夫

片棒を担ぐ日本どこへ行く
老々介護今日も空しく陽が落ちる
ジャイアンツ負けてる今日の旨い酒
捜し物妻は手品のように出し
ふつつかな嫁にわが家に乗つ取られ
尻尾振るところ息子にや見せられぬ

高知県 赤川菊野

二人して選んだ船が出る港
ぐちつても泣いても何も生れない

細はそと老舗を守る帆前掛

保育器で歴史始まるこぶし上げ

ブライドを持てと鏡におだてられ

飯の世の舞台一人で舞いつづけ

松山市 古手川 光

性善説の肩身が狭くなるばかり

鶏も産み甲斐のない卵の値

沈黙の臓器がある日しゃべり出し

太陽のリズムで生きている野性

人間に嘘はつかないなす胡瓜

山から里へだんだん秋が下りてくる

広島県 藤解静風

古時計の唄をしみじみ聴く喫茶

情念を形にすればまんじゅしゃげ

握り飯の芯にはいつも母がいた

舌足らず損な性だと知っている

人さまの足らぬところはよく見える

浪が退くような弱気を叱る海

竹原市 石原淑子

ダイヤモンドヘッドの怒り火の踊り

空と海かけるワイキキダブル虹

包まずに話して敵をまた作る

錯覚のまんまこの世を踊り切る
お浄土の母を肴に一周忌
寒椿パッチワークに愛をこめ

出雲市 園山多賀子

夕顔の白が夕陽を浪費する

追憶の頁を手繰って長い夜

蟪蛄に似た生きざまで枯れ急ぐ

川柳をリアルに盛ろう白い皿

俯いて溺れてならぬ水中花

炎を孕む命有めて黄昏れる

松江市 津川紫晃

何もかもゆるして波は夕日抱く

こぜり合う国の空にも丸い月

相槌は打たず話を裏返す

産地どうあれ松茸をひとつ買う

虫の音をガラスの底にためている

迷いから覚め一本の木に登る

松江市 三島淞丘

白無垢もやがて個性の色で染め

友情が支えてくれる倦怠期

放心の一日明日のエネルギ―

深呼吸して慰める腹の虫

これ以上説得は無駄酒にする

真相を明かさぬままに幕が下り

鳥取市 武田帆雀

止める気のない人ばかり喫煙所
誰様と知つての上で食い付く蚊
正座して新聞を読む怖い女房
大物の蟹の鉢に目があるぞ
物を干す隣の奥さんの背中
酔いたんぼう集めて配る下戸の役

鳥取県 土橋はるお

田の畔ではるかな女に逢っている
死ぬるまで重荷を背負わされている
人の世話すると信頼されそうだ
首になる時に貰つた茶道具だ
砂糖には塩のサボート欠かせない
年金のおかげおめおめ生きられる

鳥取市 岩原喬水

風化した夫婦接着剤が要る
ジェラシーが隣のゴミを覗き込み
隙あれば妻のへそくり探して
肝冷やす内緒話を子は喋り
女湯の窓は月さえ立ち止る
けちんばと言われてたんと貯めている

鳥取市 植田一京

それぞれに行くとこのあり日曜日
まだ夢が一ぱいあつて超元氣
青春に一とき戻るラブソング

スケジュール一ぱい抱いたままに冬
足跡を残す力をためている
すっかり喋り寂しくなつた影法師

鳥取市 中村金祥

核の鍵しつかり掛けたはずですね
乾杯の音頭右手がだるくなる
破格値に嘘がいっぱい詰まつて
大破した日本丸にしがみつく
リストラのように母校が消えていく
秋祭り迎え今年も安堵する

京都府 稲葉冬葉

介護保険に期待などしていいない
ごめんなさい見て見ぬ振りも罪だろう
顔色をほめてやさしさごっこだなく
無駄骨と知ってくせ毛も個性にし
鼻低い分だけ神の恵み受け
パンチの利いた文章にまたほだされる

西宮市 西口いわゑ

しあわせはつかんだ砂に似たるなり
ながながと挨拶されて乗りおくれ
二人では諍うひとりでは淋し
人間も芥も杭を信じきる
問題はばらのあやしい笑顔です
どん帳が下りて浮世へもどされる

西宮市 亀岡哲子

遠い日の愛のかけらの法善寺
手土産はコロツケほどの頼みごと
あの時の星座探しにプラネタリウム
暗号を解きつつ地下街を抜ける
庭の花尽きて花屋の仏花
買い置ききのビール余って子は遠く

宝塚市 嵯峨根保子

騎馬戦の帽子かき取る少女かな
青みかん子には親ほど胸に來ぬ
自立とはキーホルダーが重くなる
酒二合齒止めの杭がまたゆるむ
ふとん太鼓と何処なら逢える秋の天
スーパ―も負けてはおれぬ感謝祭

三田市 北野哲男

福の神養錢箱の奥らしい
赤提灯ドンキホーテもビノキオも
よそ行きの挨拶すんで元の友
孫這うて仏頂面の膝に乗る
命さえあれば年金選挙権
善人を画けば細い目丸い鼻

芦屋市 黒田能子

子を育て子供に学ぶことばかり
ひんやりと清涼剤になる皮膚
過去形の苦勞樂しそうに話す

幸せな顔だ大福食べている
まあいいか自分にいつも甘くなる
好きな本抱え二階を上り下り

弘前市 高瀬霜石

福耳を毎朝映す洗面器
年金もわたしも枯れる十年後
みんなから頼りにされる聞き上手
ロボットに変身すれば楽になる
握り飯こんなうまいまだ青春
ジャンケンにでも上手下手あるらしい

青森県 西谷太吾

痩せ土に性懲りもなく種を蒔く
台風がそれで林檎に手を合わす
じょんがらを唄って紅い林檎挽ぐ
赤い羽根つけて仮面を取り替える
岩木御山が溜め息ついて冬が来る
よされよされと雪に津軽の村消える

富山市 舟渡杏花

見ぬ振りをする義姉さんのカップボー着
ジャンケンに賭けられているボク之首
貧乏神がくれた小ちやな花火です
秋霖や男ひとりを巻き戻す
多国籍の油で揚がるエビフライ
ひっそりと余命も入れる貸し金庫

愛知県 早川盛夫

年末なのに忙しくないのです
井でないと力が湧いて来ぬ
でこぼこに水溜りまである老後
半熟のくせに主役になりたがり
どのように生きたにしても紙おむつ
ゴツツンというまでオーライオーライ

横浜市 小野 句多留

山小屋の鳥の巢立ちに秋の私語
人恋し紅葉も山をかけ下りる
タレントのゲラゲラ笑い疲れます
したたかさあって当然古稀近し
釘一本打てぬ夫を見離せぬ
喪服着た美人に群が道をあけ

高槻市 左右田 泰雄

呟けば空ろにひびく独り言
コスモスが待ちくたびれた赤とんぼ
シャッターを切ればあなたはチーズのズ
台風で延着怒るに怒れない
森に来て何と不思議な孤独感
振り向いて何だお前かとは何だ

吹田市 山本 希久子

いまさらに競う気はなし十二月
秋の天ゆっくりのち裏返す
大笑いして約束を忘れさる

ひっそりと明日を抱いている枕
秋の真ん中でおいしにぎりめし
シルバライフ カラフルにするパスポート

茨木市 藤井正雄

小刻みにくる年金が命綱
課長との距離を縮める屋台酒
職人が命を仕舞う道具箱
音立てて扇子を閉じる思いつき
素晴らしい着想事後に出る無念
呱呱の声廊下で神と待つ祈り

枚方市 海老池 洋

自分史に書く牛歩の日脱兎の日
神は辛口はとけ甘口だと思ふ
人生もかくやと終わる観覧車
ワクチンを打つていよいよ冬の陣
他人には涼しい声を出して妻
洪柿の台木と知らぬ甘い柿

四条畷市 吉岡 修

まだ先を聞いてないから笑うてる
今日は飴あしたは多分鞭だろう
幕あけたばかりの恋に野次がとぶ
練り直すたび骨抜きになる法案
まだ鬼になれず出世に遠くいる
だまされたつもり賽銭倍にする

大阪市 西出楓楽

人許すたびにくしゃみがひどくなる
飛び跳ねてふと見失う現住所

生き下手のちぐはぐに打つ句読点
ラブゲーム参加資格は問いません
私かてノーベル賞が欲しくなる
越路吹雪聴くとワインを飲みすぎる

大阪市 神夏磯典子

人生も八割来たねおとうさん
カガシさん胸上げしたい豊作よ
渋柿も私も少し熟れ過ぎた
じいちゃんのホストで猫が甘えない
包容量餃子の皮の程度なり
カラオケに酔える若さは持っている

大阪市 板東倫子

老人は金持ちやけどうちは別
諦めか悟りか父が怒らない
愚妻から愚かな姑になって幕
痴呆かな脳が浮いたり沈んだり
赤ん坊のくせにヒジキが好きな孫
最初はグー次もグー出そその次も

大阪市 榎本日の出

楽しみのひとつ郵便受けの中
収まらない子のケイタイが忙しい
大丈夫でもなさそうな千鳥足

毒少しまぜて心を強く持ち
阪神が勝つかも知れぬテレビ見る
喋るのが苦手でも輪の中が好き

大阪市 小糸昭子

鸚鵡にもスランブあつてしゃべらない
真夜中のリズム正しい鳩時計
終電のベルで別れの駅となる
信じると頑固な傷もすぐ直る
それぞれのドラマかかえてターミナル
一人旅幸福駅で降りてみる

堺市 山本半銭

じゃがいもの何事もなく白い花
門限はないゆつくりと独り旅
行く先は決めず夕陽が燃えている
女から美人にとかく辛い点
遅刻した言い訳誰も聞いてない
闘病日記詮ない文字を書き列ね

堺市 志田千代

わが鏡白内障でございます
夫婦善哉あんたは葱も刻めない
これからは涼しい恋をしてみよう
涼しい顔で婦人科の男先生
何もかも甘辛く煮る味音痴
新米がひかるサンマの背が光る

高石市 浅野 房子

親の手の届かぬ先に運不運
逃げ道はいつも一箇所あけてある
にこやかな笑顔の裏の般若面
修羅の場をいくつ抜けたか深いしわ
松茸は昔いやほど食べました
猫の恋邪魔はしないがお静かに

八尾市 生 嶋 ますみ

たこ焼きに口ふさがれたまま会釈
介護してくれてる嫁がほんとの子
何食べても味がなじまぬ総入歯
無器用に生きてケイタイ持つてない
愛情のかけすぎ菊が病んでいる
人を恋う形に揺れるコスモスよ

藤井寺市 太 田 扶美代

六十にしては多い目好奇心
まちがいをしでかしそうな空模様
いいニュースだから少うしだけ焦らす
お人好しを時々騙す秋の空
還暦の坂のあたりで躓いた
故郷に帰るとフルーツ責めにあう

羽曳野市 酒 井 一 壺

携帯を母のお腹で聞かされる
留守電に期待の声が来いてない
携帯も車もないが困らない

このままじゃ地球もだめとお月さん

産み月へ安産祈る外はなし

お月さまメルヘン消えて淋しから

松原市 小 池 しげお

洗剤をつけて老眼鏡洗う

奥の院裏から登る道もある

刈り終えた田に挨拶をして戻る

ジャガイモに生ごみが効く輪廻だな

オフィスのお面が外れなくなつた

二重あご酒も男も恐くない

富田林市 藤 田 泰 子

蝶の死が三面記事の隅っこに

私を乗せて地球は自転する

おばあさんだけどセクハラ許さない

母さんの小言綴ると愛になる

酔った振りするのは辛いウーロン茶

恙なく梅もラッキョも漬けてある

富田林市 中 井 ア キ

狙ってる大むらさきに未だ逢えぬ

待ち兼ねた晴天脳を丸洗い

勝ち負けを言うから礫飛んでくる

真夜中に互いの息を確かめる

やんわりと核心だけは突いてくる

胸底に温めている花ことば

奈良市 天正千梢

大和郡山市 坊農柳弘

点滴やいのちをつなぐひとしづく

寝返りをうってあしたを考える

立板に水聞いてる方が疲れきり

私の八十年に乾杯し

嫁 息子手足となつてささえくれ

奈良市 米田恭昌

ふた回り若いワイフに生かされる

ラッシユアワー美女に囲まれ手が困る

鈍行の急くことはない老いの旅(旅3句)

白鷺城鳥城も凜と山陽道

路面電車と純喫茶に出逢う城下町

橿原市 居谷真理子

四苦の世のああそれでもの美しさ

3ナンバー買つてポロシャツまで変る

土色の顔続々と朝の駅

一疊の天下を取つて昼の酔い

不整脈以外本日もなし

奈良県 渡辺富子

唇を盗むに明るすぎる月

ざぶざぶと地球丸ごと洗いたい

人間のエゴが地球を食い荒らす

札束を積んで閻魔と手を結ぶ

カラス鳴くボクはこれから塾へ行く

鶴飛来里はゆつくり雪もよい

すずらんを褒めてメロンをモノにする

せかせかと年賀ハガキの発売日

香を焚く山茶花匂うにじり口

ひと理屈捏ねて初冬のワンカップ

生駒市 飛永ふりこ

石仏に微笑み返す彼岸花

回り道すると掴める風の向き

七人の小人法被で秋祭り

機内食飽きてぶぶ漬け欲しくなり

お腹から笑える友と湯のけむり

香芝市 大内朝子

夕茜人生総て美しい

雨の日はタンゴの曲で血を煽る

振り出しに戻ると見えてくる未来

萎えていた五感を揺する秋の風

遺伝子の頑固この頃はばきかす

京都府 丹後屋肇

ヘルパーがスプーンで運ぶデイケアー

骨折の痕が張るボディビル

ライトアップ アベック組が泡を食う

厚化粧落とせば鏡そつぽ向く

のりものにパバくたくたの遊園地

京都市 高 島 啓 子

初雪へ白く浮き出る大文字
親の意に反し医者の子芸能人
はやらない医者を常連心配す
三条へ今から遊ぶ顔で降り
焼跡を月は二度見た法善寺

京都市 都 倉 求 芽

笑つてゐる敵には用心しておこう
都合よいように分析するグラフ
冷凍庫の奥に想い出かんかちこ
有りそうで無さそで時間が経つてゆく
空いた日もなにかが埋める十二月

滋賀県 中 宗 明

ニアピンのマークをつけて顔ゆるむ
うぬぼれを生かし出世の運掴む
桐箆筒妻の想い出詰まつてゐる
古希来てもダンス ゴルフといそがしい
失敗をプラス思考で生きてゆく

和歌山市 福 本 英 子

ダブル受賞明るいこともある日本
作業着のままが嬉しいノーベル賞
もう痩せる心配はない骨密度
定刻に來ないバスでも僕の足
熟年の交際距離は縮まらず

和歌山市 桜 井 千 秀

心経百巻まだ煩惱が付き纏う
脱ぎ捨てた殻に躡く旅半ば
住基数字秋の夜長に覚えよう
犬も猫も大好き人は中ぐらい
陽溜まりの中で孤独を意識する

和歌山市 牛 尾 緑 良

青切りのミカンと届く淡い恋
音階は冬へと向かう雨の音
春までは眠らず恋も失恋も
ノーベル賞目差してみよう五七五
絵の具皿残し飛び立つ子供たち

和歌山市 西 山 幸

おどおどいつも鍵束持ち歩き
影法師に今日も捕われそうになる
綱の上のこの世を渡る難しさ
煌いてみたいとおもう肖像画
絆を縫い続けてくれた母だった

和歌山市 福 井 桂 香

絵手紙に枯葉の色を封じ込め
幼児バスで帰ってくる星の王子たち
アリバイを残そう羊羹へ菌型
縁うすい眉の寒さは亡母ゆずり
地球儀へ魂ゆるする詩降らす

和歌山市 古久保 和子

射手座B型自己診断は甘くする
地球と言う星に住んでる悪魔たち
土曜日の靴はスキップして困る
京ことば耳がこそばい焦れたい
免許証の写真は他人に見せられぬ

和歌山市 田中 みね

自分が一番そんな姉上立てておく
気を遣い金を使って孫の守り
隔世遺伝孫のお口もまた達者
私語の席へ注意するほど偉くない
松茸の前で財布が袖を引く

和歌山市 青枝 鉄治

蹴つてみて期待で拾う革財布
我流だが母の煮物はプロの味
ぬるいなど文句は言えぬ貰い風呂
堅物のB面を見た宿浴衣
遊びではないと互いが言う遊び

和歌山市 武本 碧

茶柱を信じて朝の靴を履く
生きている証か今日も血が騒ぐ
エンジンのかからぬ右脳持て余す
ときどきは鼻も出番のハーモニカ
美味しいと言うから洗う日々の皿

和歌山市 細川 稚代

ケイタイの無気味な笑い夜の道
修復のきかぬ身体へ外科内科
納得のいかないままにのし袋
百円で買ったコップが手になじみ
外は闇テレビばかりが馬鹿さわぎ

和歌山市 楠見 章子

押し入力で遊んでいます探し物
さっちゃんに会いたくなったきのこ飯
乗り換えるたんび駅員さんに問い
出来上がった差し歯キラキラ面映ゆい
秋の雨けとばす赤い傘買いに

和歌山市 山根 めぐみ

叱るより褒めてあげやな松の芯
心もすっぴんすっきりとさす湯の力
高級ファンデー肌が感激して荒れる
いわし雲神が描いたクレヨン画
揉めんとこ月がこんな丸いのに

和歌山市 上地 登美代

昔はなあ月に兎がいたんだよ
人生の秋を迎えている静寂
消しゴムのすぐちびてゆく迷い癖
愛すれば濁った川も澄んでくる
盲導犬の努力が光る介護ぶり

和歌山市 吉村 さち子

うなずいてくれて余分な事話す

土付きの野菜輸入でない証

立ち話で夜の献立出来上り

栗飯を盛って仏に秋告げる

知るほどにますます疑問解けぬ拉致

海南市 三宅 保州

大戦や討入りよりもクリスマス

本物にしてはキンキラキンすぎる

雅号宛に來た手紙からまず開く

ともすれば舐めて貼りたくなる手紙

生臭い和尚と言われ人氣者

海南市 谷口 義男

合議するまでに決つていた決議

結果論だけを並べる評論家

何気なく吐いた一言命取り

埋め草に川柳一句添えて置く

行き届き過ぎてうるさい妻と言う

和歌山県 中後 清史

向かい風吹いてもポーズ崩せない

退くすべを悟つてからの円い風

キッチンに分担表を妻が練る

ゼロからの出発でしたマイホーム

身の程を弁えてない減らず口

鳥取市 山宮 愛恵

感受性豊かで胸が震えだす

月兎老いた少女は夢をみる

助け合い瓶の小銭がふくらんだ

合点の合図で今日が満ち足りる

アロマテラピー レモングラスにして眠る

鳥取市 岸本 宏章

ど演歌のリズムで僕の血は流れ

私から演歌を取れば干涸びる

握手には都合が悪い左利き

隠したらそのままになる忘れ性

笑えない喜劇同居が難しい

鳥取市 岸本 孝子

波風が立たぬも味気ない夫婦

ワンチャンス神を味方につけている

雑魚なりに生きた証の友の数

ふるさとの誇れるものに大砂丘

昭和史が核の怖さを学ばせる

鳥取市 夏目 一粹

人はみなジェラシー抱いて生きている

父母からの教え守れば越えられる

盲目の恋へ静かに水を撒く

人情にすぎる心を戒める

少々の毒にすがって世を渡る

鳥取市 近藤佳子

肩ぐるまから見えた景色は忘れない

閻魔さんの招待状をつき返し

フルーツのナイフ私を向いている

蓮華菜の花ままごとの頃をふと

腸閉じた糸抜け一つ落着いた

鳥取市 倉益一瑠

家族病む家にボコボコ穴があく

未完の窓をいくつも描いて老いてゆく

心を鬼にしなきゃしなきゃと不眠症

義理を欠く図太さ欲しい時もある

花愛でる余裕が欲しい冬の陣

鳥取市 加藤茶人

金かけて食い 金かけてダイエツト

足跡がほこれるものに子が二人

妃殿下の笑みより妻の笑みが良い

形勢が不利な証拠についどもり

目がさめて生きてた証手をさすり

鳥取市 福田登美

秋冷に濃い目のお茶がほしくなる

木枯らしに揺れるおでんの灯が誘う

年金でそれなりの花咲かせてる

国文祭の襷にも風もらう

再会の握手慕情が揺れて秋

鳥取市 徳田ひろこ

恋はまだ序曲よ電話ロククする

少しだけ解毒になった長電話

日本の母を愉快にやっている

十五夜を母を祈りながら見る

ひとりではないよと祈っている今日も

鳥取市 有沢せつ子

弱い子がまた鬼になる鬼ごっこ

繁盛な店の植木は手入れされ

自販機の釣りは陽気な音で出る

過労だと叱った医師が癌で逝く

公園にゲートボールの花が咲く

鳥取市 杉本孝男

女々しいがそう簡単に死ぬるかい

半分は聞こえて欲しいひとり言

句碑の径 郡家が薫る句も光る

手をあげぬ孫じれつたい参観日

荒波を乗り切る答え辞書にない

鳥取市 美田旋風

地図にない家もカーナビなら行ける

屋上で夜のパノラマひとり占め

独身貴族 神も頭を抱え込む

書き替える積りで遺言書を書く

喉元を過ぎれば戦する話

鳥取市 春木圭一郎

ありがとう元気に言えば元気出る
前向きに受け止めケガも起爆剤
大好きなことを仕事にする勇氣
メッセージ心開けばよく聞こえ
寿命だと思えば死ぬのこわくない

鳥取市 西村 黙光

ペン肝臓へ未来の夢をテンコ盛り
健康に感謝毎晩飲んでいる
人並みになろうと漫画読み耽ける
団欒の主役務めるワンカップ
タバコ止め男を上げた呑んだくれ

鳥取市 富山 檳榔樹

木枯しが鬼の霍乱風邪運ぶ
まだ熱れぬ青いリングが焦れたい
懐かしいふろふき食べて亡母偲ぶ
雨雲にやがて消される砂の紋
いつだって旬の顔したマスカット

鳥取市 福島 庸二

さわやかな風でふれ合う万国旗
流行の先端歩む子のセンス
ときめきを感じる心しほみ出す
ひとことにふたことすぐにはね返る
着信のベルが視線を浴びている

鳥取市 録沢 風花

北鮮に散った涙か月おぼろ
ご近所の不安も乗せた救急車
病室の握手別れを予感する
距離おくといいとこばかり見えてくる
少子化というに就職先がない

鳥取市 田中 瞳子

マネキンの足の長さも偽装罪
筆談と笑顔で心届けます
病名がつかぬ不調を持て余す
求め過ぎ命をおとすダイエット
きつと没と言いつつロバの耳で待つ

鳥取市 山本 益子

居酒屋ヘリストラの風撒き散らす
人生の破れ穴から愚痴こぼす
職退いて肌の守りもゆるみがち
コンニャクは腸の掃除をするらしい
山歩き熊の予防に鈴鳴らす

倉吉市 山本 玲子

わたしにも奈良の大仏にもほくら
暗闇でミミズが内緒話する
バラの精切らないでねと棘みせる
激安セール嬉しいじゃない行つて見る
神だのみ篤と養錢考える

倉吉市 猪 川 由美子

涙を武器に渡り切れたら苦勞せん
ああ真紀子持て余されてお荷物に
愛子さまのファッション真似るママが増え
拉致家族のお顔すっかり覚えちゃう
紀宮の目出度いニユース待ち焦がれ

倉吉市 淡 路 ゆり子

四季の花手向けて亡父母に逢いに行く
匙投げた子におんぶする倅の日日
わたくしを見尽くして来た優しい鏡
占いの見立てたほくら嘘ばかり
しなやかに旧家へなごむこぼれ萩

倉吉市 松 本 よしえ

たった一つの欠点隙の無いお方
久し振り逢えばいいとこばかり見せ
賑やかな食卓今日は七回忌
腐植土の温さミミズのマイホーム
ふる里の自慢蝶の一夜干し

倉吉市 山 中 康 子

秋の空つるべ落しにだまされる
叱れない親で未来に役立たぬ
真つ当な貴方あやつる古きつね
屁理屈も四十代のご愛嬌
朝冷えのくりやに手動きこちない

倉吉市 牧 野 芳 光

砂を噛むような自問を繰り返す
天に地に人に学んでまだ読めぬ
よく聞けばわかる気がする鳥の声
いいことは幾つあっても困らない
嫁入りの路地がそわそわ待っている

倉吉市 最 上 和 枝

臓器移植揺らぐ命がチャンス待つ
父さんのほくら貰った十五歳
三代のほくらが同じ血の絆
スランプのトンネルじつと我慢の子
稲の波風と契つて秋さ中

倉吉市 野 口 節 子

顔の艶血の半分は酒らしい
愛の手をください私半端者
外見は世話女房でございます
職探し靴の底からあせり出す
晩秋の五感に霧が忍びよる

倉吉市 米 田 幸 子

しなやかに時にきびしい愛の鞭
どうしてかこれから先がつながらぬ
灰色は極めて黒に近かった
残業があると言つては映画館
とりあえずすつたもんだにけりがつき

米子市 門脇晶子

三年五年戸惑つて買う日記帳
コスモスの海でストレス流してる
冗談を言い合っているいい仲間
疲れすぎ私を叱る肝機能
子を残し若い命の弥勒仏

米子市 本吉宗光

曲流れ思い出します唄います
曲線の誇示には俺の歳がシャク
バッテリー八千余円替えました
十月にまだ冷房機役に立て
ゴミ出し日庭の掃除の十二坪

米子市 青戸田鶴

道草をしておだやかな風の中
柿熟れるこの柿の木と同年
長い足孫のふとんを縫い直す
口下手がぶつてるように思われる
人べらし寒い時代になつてきた

米子市 木村春枝

低い鼻に眼鏡はお世話かけ続け
バス旅行期待と不安同居する
叱られてポッケの中も濡れていた
手術待つ友は悟った顔を見せ
年重ね水の流れに逆らわぬ

米子市 白根ふみ

減反の飯の世蕎麦が美しい
解禁の蟹の本場にかにまばら
明け方の月下美人は余香なし
裁かれそうな名月に鏡を伏せる
一行は最後の答え空けておく

米子市 澤田千春

バーゲンの列に並んだ女神様
ひよつとこの面も大事な面のうち
善人になりきれなくて尻尾出す
野の花を飾り仏と話し合う
雑草は誰はばからず天に伸び

米子市 中井ゆき

叱られたこと思ひだす秋日ぐれ
水なすのおいしさやはりほんまもの
しみ透る水に似ている母の愛
この鼻でよかつた父母に礼を言う
嘆きこめビエロは鼻を赤くぬる

米子市 光井玲子

苦い水飲んでようやく人となる
時々私自身を叱っている
つながれて番犬ストレス溜るだろう
水中花いい事があるだろう
悔いのこし日めくりうすくなつてゆく

米子市 野坂 なみ

大国は目上の瘤を消す算段

秋のめぐみリスも頬つべを膨らます

堅いつながりチームプレーを輝やかす

熱血の教師白線こえそうだ

老いの絵に桑の実柘榴よみがえる

米子市 林 瑞枝

コバルトブルーの宝石の飛ぶ溪谷美

贅沢に稲穂の笑う世に生きる

やまなみの秋たけなわのバスの旅

まだ喜寿と亀の歩幅で生きている

出迎えるボチの尾っぽにある笑顔

米子市 鷺見 正子

スーパーのカートを押して王になる

決算書触ると火傷しちゃうぞ

助手席は夫のために空けてある

勘定書私の前に来て停まる

啄木のように自分に花を買う

鳥取県 鳥羽 玲子

計画をゆっくり立ててから動く

寝転ぶと脳の発想芽えてくる

どこか古い忍びよってる夫の背な

被写体となつて笑顔で立つてみる

今日もまた時間足らない二十四時

鳥取県 鳥羽 直市

贈りもののひとこと添えて実らせる

人生の余白を趣味で締めくくる

楽な道歩めば男名がすたる

パソコンが家の暮らしも変えさせる

老いふたり許容範囲を守つてる

鳥取県 さえき やえ

アマクリナムが咲いてうれしい夢を見る

みず色に流れてほしい故郷の川

騒音に育った鳩が唄わない

秋の風仕事がほしい木の梯子

亡母の教えつなぎに入れてソバを打つ

鳥取県 土橋 睦子

散策としやれを言いつつ栗拾い

どことなく憂いを秘めた曼珠沙華

忘れられ土に寝転ぶ秋なすび

合掌の手からこぼれる愚痴ひとつ

柚子たわわ眺めて棘のにくきこと

鳥取県 岩崎 みさ江

一群の葱に人住む庭になる

葱刻む手も浮いてくる祭笛

三猿に徹して輪には遠くいる

大砂丘と遊んだ風は芸術家

ふるさとを出てふるさとの良さを知る

鳥取県 林 露 杖

秋彼岸挟み身内の葬二つ

秋彼岸吾が行く墓を急がねば

独り臥の夜半津々と虫の声

銀河澄むとけぬ一つの蟬り

ブロンズの裸婦の乳房に秋落暉

鳥取県 西 川 和 子

合い鍵を持つて家族が揃わない

鍵っ子にしてはならぬと祖母の知恵

賑わいに疲れた顔を見せられぬ

昔はむかし今は流れの中で生き

御上から番号札が配られる

鳥取県 小 谷 孝 美

泣くたびに心も脱皮繰り返す

弱点を晒すと味方増えてくる

裏表晒し秘密を持たぬ主義

ゆび切りの重荷小指へのしかかる

土埃たつ風景が消えている

鳥取県 上 田 俊 路

長生きをして逝く友をまた悼む

泳ぎ下手でも彼岸にはいつか着く

出る釘は先ず味方から叩かれる

夢フェスタとつとり見事幕開ける

コンビニの灯が起きていて街眠る

鳥取県 黒 田 くに子

父の座にやっぱり父がいて平和

祖母の座は仏の前がいらしい

座禪くむようにヤングのあぐらかき

同権をうたつても妻米をとぐ

あたたかい明りもついて同居する

鳥取県 石 尾 かつ乃

じつとして務め果して居る案山子

お隣の鍵あずかつている重荷

新生児母の名札がつけてある

少年の登校拒否に泣く名札

ふるさとの風の匂いのする便り

鳥取県 羽 津 川 公 乃

天高しまたダイエツト死語にする

彼岸花褪せて末路を重ね見る

背の湿布貼って剥がしてくる人

物忘れ似た者夫婦勝負なし

弟妹が三人も居る姉冥利

鳥取県 下 田 茂 登 子

許す気になれば別れることもない

親と同じ道を歩いた茨みち

思い切り泣けばあきらめつくだらか

捨てる神拾う神あり生きてきた

古希過ぎて欲の皮だけ強くなり

鳥取県 西原 艶子

山陰の海鈍色になつて冬

生涯の伴侶にしよう犬と猫

旅鳥だった昔をなつかしむ

ローヒールになじみ大地を踏みしめる

しあわせはメールの届く部屋がある

鳥取県 山本 正光

どんづまりでも空だけは開いている

夫婦ならあんなべたべたなどしない

酒たばこ止められませんか死ぬまでは

診察券一枚増えて夏終る

不審船宣戦布告して沈む

鳥取県 西沖 彰雄

真実が怖くて問えぬ事もある

的少し外しやんわり問うてみる

あるがまま暮し背伸びも卑下もせぬ

肩書がとれ人情の機微に触れ

腕組みの中に死のこと金の事

鳥取県 石谷 美恵子

じつとして居ります今日はさんりんぼう

名札などつけても傘はもどらない

一気呑みあの愚かしさ賑やかさ

ラブレター好きと一字も書いてない

スランプを口ぐせにしてよく稼ぎ

鳥取県 平井 栄翁

父の日へとどく玉露と京の菓子

東京の雑魚より棚田主で居る

冷えきった体に注射居酒屋で

たばこ毒知って吸うてる憩いの場

おでん屋の大根が待つ冬の客

鳥取県 谷口 次男

天高く国がだんだん痩せる秋

メルヘンの目で見える月にウサギ棲み

能面に隠れた素顔はかりかね

パソコンもケータイもなく優雅なり

このごろは柿のとり方知らぬ子ら

鳥取県 田村 きみ子

モナリザの服は黒くて淋しそう

スランプがなんだ竹踏みでもするか

煩惱の悲しさ恋も捨てられぬ

脳細胞減りすぎたのか僻みぐせ

とりあえず笑っておこう寒いから

鳥取県 太田 幸枝

飼犬は主人の心よく抱む

孫からの暑中見舞がパソコンで

外務省臭い物には蓋をする

回り道無駄でなかった美女に会う

ネックレス母娘の絆つなぎとめ

松江市 銭山昌枝

独りにはなりたくないが居ると邪魔

嘯み合わぬ部分に花の種を蒔く

喧嘩した数ほど想い深くなる

肚を据え言つて置きたい事がある

鏡台を磨きわたしを光らせる

松江市 佐野木 みえ

悔い一つ残して長いトンネルに

口開けてざくろも赤い気炎はく

口笛を吹き高原へ羊呼ぶ

蓮の実が古代のロマン語りだす

すず虫寺秋を見つけに一人旅

松江市 川本 畔

酔いしれたわたしを包む酒の精

しあわせな酒がわたしを車座に

木の葉舞う私も酔うて舞っている

屋根上の月取れそうな酔い心地

盃を酔うた額にのせました

出雲市 吉岡 きみえ

全国の神がわいわいやつてくる

大安吉日今日の神さま大多忙

ふたりだけの愛を神さまお見通し

神有の街がしばらく活気づく

神さまと協定している神の街

出雲市 岸 桂子

ほめられて軽く約束してしまふ

烈しさも唇に溶けてやがて冬

あいまいな色に馴染んでから平和

つがい鳥一つの籠に馴れて老い

過ぎ去った月日へ戻る橋がない

出雲市 小玉 満江

愛の歌唄つて老いもまた楽し

散歩道売れない土地に草もみじ

さがし物今日も時間の無駄遣い

パレードに参加出来ない三輪車

お葬式二日続いて世をなげく

出雲市 板垣 夢酔

自惚れの案山子雀になめられる

渋柿も干せばポツチャリ甘さ増し

大上段カマキリ派手な構えする

コオロギと一緒に泣いたふられた夜

松茸の料理産名書いてない

出雲市 久谷 まこと

転んだら痛手大きい老いの坂

新聞も老眼鏡でひろい読み

なわのれん親爺相手に憂さ晴らし

開店と店じまいが呼ぶ人の波

招かざる船が日本を狙つてる

出雲市 城 多喜

横波を受けてぐらりとする恋だ
胸の鈴近頃少し鳴りすぎる
幸せな人に泣き言など言わぬ
脳味噌を売って下さる店がない
じつとりと濡れた心の傘をさす

出雲市 小白金 房子

心経を唱えて登る女坂(十回目巡礼)
お大師の遺徳を偲ぶ遍路笠
一人ではおしい夕月夫よぶ
飾らない女の素顔美しい
豆を選ぶ子なし夫婦へ猫の声

出雲市 富田 蘭水

芯強いコスモス私みつづける
ミニトマト主の心で熟れてくる
橋いくつ越えたら無我につくのやら
濃いうすいリンゴの紅もままならぬ
流れいい駅はやつぱりもうけてる

出雲市 石倉 美佐子

帯強くしめて今年の終いとする
すっすつと草履はけないこともある
どうしたら嬬やかになる肩の線
ゼロ一つ間違えそうな袖展
椿一輪染めてもらった塩瀬帯

出雲市 青山 久子

名作を開く不思議な風に会う
拉致の子の涙か星が雫する
心まで緑になつて野に遊ぶ
わたくしの外出を見て鳴くカラス
看る看ない身辺とても賑やかだ

出雲市 岡 あきら

ふるさとの変らぬ山と舗装路と
代替りしてもふるさと温かい
ふるさとの幹事変らぬ同窓会
セレモニー終えて一つになるふたり
カタログで選びなさいと引出物

出雲市 伊藤 玲子

お喋りな波に乗せられ本音吐く
おかげさま寺の廊下も光らせる
光らせてくれた雑巾干している
正論の雑魚が肴にされている
楽しくてメダカの群が抜けられぬ

鳥根県 伊藤 寿美

直線だけ歩く男に従いてきた
再入院黙つて林檎むいている
病んでいる大樹に薦を着せる妻
つき通す嘘に疲れた紙の鶴
いつか割れる予感を抱いた薄氷

島根県 柿原 秀子

探しものやつきになるとなおみえぬ

ああ言えばよかった訥弁悔まれる

あの人この人分けてあげたい紫蘇穂こぐ

待望の雨かと思う耳のせい

淋しさよ片付けごとで紛らわす

島根県 森 茂美

ビール瓶運んでくれる孫の足

アフガンの児にも届けよズック靴

一枚の写真に偲ぶ敗戦忌

虫時雨さいているやら野の仏

インシュリン打った女房が鋏を持つ

島根県 多々納 テル子

森と海いい関係で呼吸する

調子よく煽ての風に乗っている

好い友とメール交わして支え合う

陽を浴びたみかん柿くり籠に盛る

老いてきた五感ときどきチェックする

岡山市 井上 柳五郎

この歳で悟りきれずのこのわたし

雨に耐え風にもめげず傘寿越え

甘えかな聞かれる歳を自慢げに

ひと言に毒も薬も盛り込まれ

松食いに長き手入れし松が枯れ

岡山市 川端 柳子

老春の残務整理や月明かり

お邪魔してみようと思う好感度

自分ではないように好き昔の絵

やわらかい脳をねがって喪に服す

これぐらい両手抜けて足りぬ愛

倉敷市 井上 富子

おつちよこちよいこんな私と墓場まで

冗談のこはれるちよこと差し向い

瞬間に技をかけてるテクニシャン

ねんごろに翔べぬ鴿をみる私

鍵盤で踊るショパンの手のように

岡山県 山本 玉恵

青春の夢は未完の絵の中に

藁屋根に煙立つ日はもう来まい

丸い輪を描いて一日らしく生き

気まぐれな風にのるくせ引きずって

トンネルを抜けて本心取り戻す

岡山県 矢内 寿恵子

秋晴れの中で悔いなき汗を拭く

子の傘下楢山までを舞いきらん

歳月や喜怒哀楽の彩模様

雨を待ちトマトゆっくりうれていく

来ればすぐ帰る娘を待つ彼岸花

岡山県 大石 あすなろ

ライバルを意識しすぎてばてている
サバイバルゲーム昭和一桁強かろう
ハイヒール膝が弱音を吐いている
失敗をやんわり包む苦勞人
退屈の虫をなだめる小さい旅

岡山県 小林 妻子

刈り後の稲株戸惑う暑い秋
刈り後を御輿が通る秋祭り
一年の早さにしがみついている
栗ごはん食べて柿剥く秋夜長
鴨が味を覚えた柿簾

岡山県 福原悦子

親と子の絆をつなぐ一通話
よく噛むと旨みのました里の米
親展の返事に釘が刺してある
脚光を浴びた米寿の舞扇
過疎守る老母の祈り長くなる

竹原市 小島 蘭 幸

高野山の雷雨を思い出している
少年の一句ところに灯をともし
高速を走るひとり淋しいぞ
句碑ひとつひとつに祈りあり秋よ
結婚よりも今は新車ということか

竹原市 森井 菁居

リサイタルいよいよ秋が深くなる
副大臣ずらり知らない人ばかり
元プロと言うレッテルが邪魔になる
胸襟を開くと握手したくなる
気がかりなページ埋まらぬまま冬に

竹原市 時 広 一路

有効に使っています保険証
生命線伸ばしてくれている薬
二十年前の服だねビタリだよ
捻ったら出る水道が頼もしい
吹き溜り友が居るからやって来る

竹原市 岩本 笑子

市議戦へ向う三軒両隣
コスモスに心を許す小半日
県体も国体もあり青い空
赤い実は赤い実なりの悩みごと
異常気象耐える姿で椿咲く

竹原市 三宅 不朽

たゆたう海みずの流れのごと寝釈迦
素顔はいかに寝起きはいかに美人なり
綿菓子売れるは楽し傍目にも
仙人掌のほったらかしの面白さ
五体満足髪抜けたとて抜けたとて

竹原市 古谷 節夫

確實に秋を恵んだ今日の雨
絵ごころを櫟るように夕焼ける
コスモスとたわむれ秋の陽が落ちる
流行のテンポに脳がくたびれる
辞書くって繰って生れたこの一句

広島市 森田 文

立秋とやことばの秋が遊ぶだけ
スローモーションのように寝起きが動きだす
芸のない指が変形して老いる
寄り添えばころろが満ちる絆かな
過労死のはなしは聞かぬ将棋板

宇部市 平田 実男

ある時は麻薬にもなる酒が好き
不思議ですラベルを貼ると売れる水
捨て石になる政治家が見当たらず
原発のヒビは見ぬ振り見ないふり
お祝辞も読経も短いほうがいい

美祿市 安平次 弘道

さよならを言いに来たのは冬の使者
見栄張ってみても所詮は木偶の坊
自己主張しすぎて恥をかかされる
海峡を越えると仮面つけ忘れ
ある殺意夢の続きを見えています

熊本市 永田 俊子

うっかりと散歩出来ない人さらい
声出して欠伸している独り者
しみじみと知った病後の白湯の味
コンプレックスあるから心を洗う
さよならが言えず追伸長くなり

熊本県 高野 宵草

醉芙蓉ももうすぐボクも赤くなる
痴呆介護いまに口ボ犬抱かすかも
口開けて手持ち無沙汰なスピーカー
人の知恵究極に来て殺し合う
邪魔になるとこへ置いとく物忘れ

熊本県 岩切 康子

みかん豊作今期も美肌期待する
付合いの難しさ知る友の愚痴
甘党屋手造りおはぎやり取りし
威勢よい添乗員で頼もしい
森林と青空仰ぎ深呼吸吸

唐津市 山口 高明

法螺貝の木霊が返る神の山
棒縞の囚人服が良く似合い
遊蕩は芸の肥やしと気障を言い
品行の良すぎる彼が物足らず
手柄杓で受ける甘露の岩清水

延長戦余命の策は神まかせ

棺に入るまではバツカス信仰す

消火器の損したような期限切れ

少子化が世のルールまで変えてゆく

お点前は知らず茶漬けに唐津焼

唐津市 宗

弘

戦争をしたい男の頬かむり

割り勘で国家を論じ世を嘆く

匿名の好きなお方の正義感

ただ今の声が弾んで彼氏でき

突如来て踊り上手な秋の蝶

唐津市 市丸晴翠

寝不足が続くと妻のヒューズ切れ

僕の家昔の墓の上

リハビリの腕に家族がぶらさがる

子も四十路健康法を聞きに来る

また一つ分校の灯が消えて行く

香川県 池内 かつり

身の丈に合うた暮しの茄子カボチャ

放任と自由を親は決められぬ

ためらっている間に運がお隣に

錠剤でうつらうつらと風邪三日

老母の部屋はの財布がかくれんぼ

頭一つ出たばかりに打たれたり

まる秘よと放送局は得意顔

珍客が部屋の整理をかきたてる

痛むまで我慢している歯の治療

平凡な母でも不意の強さ秘め

香川県 瀧井 勝

原人に段々戻る老いの腰

休日には妻の予定に組み込まれ

一つ覚えの軍歌臆になつてきた

頼り甲斐なくした夫に頼られる

よい夫婦見れば馴れ初め聞きたがり

香川県 川崎 ひかり

強がりを言っても背中ふるえてる

老人会三分の二はおばあちゃん

自分でも愛想が尽きる物忘れ

スポーツが当たらないまま幕下りる

サーブ権握った妻のしたたかさ

香川県 清川 玲子

訪う人拒まぬ里の自在鉤

望郷やさぬき平野の緑なり

民宿の朝は漁港の声で覚め

お祭りでぶつかったのが縁でした

七難をかくす化粧が高くつき

香川県 神保坊太郎

望郷の胸にさぐめく笛太鼓
もう恥だなどと思わぬ忘れ癖
愛情をためしているのか拗ねている
静止した画像の吾を斜に眺め
悪運かも知れぬ命を持ち歩き

愛媛県 中居善信

たが締めたはずの秘密が零れ落ち
気まぐれでお洒落でベレー帽を買う
言い訳の下手な夫を飼い馴らす
怨念か正義か内部から漏れる
辛辣な言葉の好きなのも素顔

松山市 丹下美津子

虚子の句碑にひかれも一度萩の寺(東光院)
かんかん照り竜神さまもおかんむり
ダムの水 無限の神話くずれだし
ばれているとも知らないパパにうふふふ
深い訳知ったら母は目を回す

松山市 宮尾みのり

雨の日が好きなたしの自在鉤
包み込むやさしさがあるそばの花
賑わいも女ならでは旅枕
写真とは残酷老いをもろに出し
敵に塩送る情けが仇となる

松山市 高橋宏臣

毒舌の主が涙に脆いとは
不器用な言葉の裏にある温み
反骨の気負いが過ぎた孤独感
断わりとはつきり分かる生返事
笑うなと失敗談に力入れ

高知市 北川竹萌

句碑一つ立てたお旅所ふり返る
故里菜園元氣ですねと里の知人ひと
妻が出す焼いた秋刀魚の味が好き
無位無冠老いを思いのままに生き
沢蟹の消えた清水を掬い飲む

砂川市 大橋政良

ブレミアを入れるポケット底がない
新しい血を入れ絆太くする
輪を抜けた悔いの涙を噛んでいる
嘘のない生きざま私には出来ぬ
後列にいと気楽な私語が出る

黒石市 相馬一花

タクシーにポーナスあげる俄雨
熟年が兎のように食う野菜
学校が温室だとは知らぬ子等
似合わない服を色気でカバーする
禁煙のパパを娘が煙に巻く

十和田市 阿部 進

若い娘にミニもロングもよく似合う

老農の使う鋤ですピッカピカ

古里の旬の野菜を娘に送る

いい空気がたっぷり吸った万歩計

初恋を大事にしてる喜寿夫婦

弘前市 一戸 ツネ

若者の夢はぐんぐんクリスタル

ジーパンの動きこまやかボランティア

携帯の渦に溺れた雑記帳

さつま芋ゴロリゴロリと我儘で

おはようと出したひと声虹になる

弘前市 岡本 花匠

落し蓋 業を煮つめて愛唄う

齒に衣を着せぬ男の信頼度

卍寺慈悲の情念天女舞い

コンサート寺の本尊苦笑する

卒寿母 舞い終え笑顔子にかえる

弘前市 高橋 岳水

祝勝のビールで架ける虹の橋

カルチャールの椅子で残り火確かめる

弁当に妻の機嫌が詰めてある

注ぎこぼす酒に心を見透かされ

ハンドルの驕りに死神が潜む

弘前市 宮崎 ヒサ子

気に入ったセーター値段後まわし

転ばぬようゆっくり歩き身に付ける

天高く飛行機雲は一人芝居

秋の陽すとい逃げない中に事済ます

十月小春みんな許して冬支度

弘前市 小寺 花峯

恋をする螢が放つ千ワット

十和田湖は僕の涙で溢れ出す

みちのくは桃源郷だりんご花

久々に友来たる酒酌み交わす

一日の終り笑いで締めくくる

弘前市 須郷 井蛙

中央に石を放って意見聞く

外孫と試されている知恵比べ

知恵無限パスカルの葦子に諭す

公傷がずらり並んだ大相撲

竹の葉のおにぎり語る三回忌

弘前市 蒔苗 果林

秋近い虎落笛また老い嘲う

美しい紅葉根際に立てば散る

稔り良い稲は老いにもしおらしい

畔の草これ見てくれと可愛い実

田のお役終り排水流れ澄む

弘前市 福士慕情

高級なグラスは飾り棚におく
言う方も言われる方もある理屈
タンゴ踊る首がコキコキ鳴り出した
一日をカチンと閉じる赤い酒
恙無く燃えて夕日は明日を向く

弘前市 櫻庭順風

特急を乗り継ぎ着かぬ峠かな
せせらぎを聞いている間に着く峠
辿り着く峠陽炎ばかりなり
指呼の間に仰ぐ乗鞍眩しすぎ
峠から睥睨される岩木山

弘前市 今愁女

変りもんこの子はきつとノーベル賞
物理と化学明るいニユース国走る
リストラの案山子も並ぶハローワーク
旅先で早朝の街散歩する
山茶花の何時咲いたのか散り始め

横浜市 保田絹子

幻覚か花に埋もれて眠る君
ノーベル賞日本中を活気付け
好物を選ぶときには意気が合う
リハビリも趣味と同列精を出す
年齢は鯖を読まないことにする

横浜市 田中笑子

虫を見て躊躇している無農薬
毎日を我慢で暮らす嫁の位置
今日もまた居眠りしいし見るテレビ
適当に嘘をまぜ込む日記帳
明日テスト計画よそにおお軒

横浜市 菊地政勝

地位などは欲しくないのにノーベル賞
今の世に未だなくならぬ人さらい
アメリカの愛国心が恐くなる
病室でひとり食べるをはばかられ
シャンソンを抱いて落葉を踏みしめる

国分寺市 酒井輝

メモを見て何をメモしたかを忘れ
催促をさせぬ程度に借りられる
老いた歯を蛸のかけらに押掬われ
携帯が取り持つ縁は直ぐ飽きる
臍嚢り用にとつとくテレカード

横浜市 清水潮華

一口の余分終日胃にもたれ
店員の評価へ惑う試着室
傷口の深さ笑顔を氷らせる
出掛けたい旅へ揃わぬ頭数
家計簿を赤字にさせる猫の風邪

東京都 播本充子

楽な方得な方へと若い足

芸術の秋外出が多くなる

コンビニも寿司屋もつぶれました秋

自転車妻を詩人にさせる秋

今日も雨欠伸をとめる知恵がない

静岡県 蘭田 猿 杏

謝辞を読む新婦も親もただなみだ

神棚にずつしり重い稲供え

温泉もいいが孫との風呂もよし

漬物と飴玉詰めて旅仕度

新世紀黍粟供う山の里

静岡市 安本晃授

蝶乱舞美女をかすめて花選ぶ

愚痴の種ゆつくり論す蕙紅葉

愚痴を聞く屋台の酒にある余裕

十指みな愚痴をこぼして春を待つ

赤ちゃんの名前でわかる親のエゴ

富士宮市 渥美 弧 秀

米寿よし詩と音楽が生命綱

息抜きのつもりの酒がほろ苦い

孫の弾くピアノが家族の輪をつなぐ

背の孫と歌って帰る影法師

お辞儀する何方だったか散歩道

富山市 島 ひかる

亡き人をふと思ひ出す雲の峰

良いも悪いも風の噂を受け止める

川柳塔出生地との摩訶不思議

四五歳の頃の記憶が残る街

恩人を忘れはしない十二月

富山県 増田 紗 弓

続編があるのか明日へ問うて寝る

好きな娘にノウと言えないハンドルで

君とゆく夜間飛行は時差を越え

おだてには乗りやすそうない足

実行力我が家にもある下克上

可児市 板山 まみ子

童心に帰り指巻く赤とんぼ

メールより嬉しい手紙また拡げ

切り時はチャイムが鳴った長電話

ストレスがあるはずなのによく眠り

掃除機をかける順序が決まっている

大阪府 米澤 俣子

ひと電車遅らすゆとりたそがれて

抱えてた夢軽くしてなおも翔ぶ

裏切りに心は闇の水びたし

こだわりが強く前に出られない

老いの殻破り光ってみるつもり

大阪府 初山隆盛

器量よいみかんを狩りに山に入る

裸婦像も違う目で見える美術展

官能の小説ばくも地で書ける

キズテープ貼って吹っ切る窓の傷

デパ地下におふくろの味買いにゆく

大阪府 澤田和重

嫁姑本音吐ければ楽だろう

時々自分を叱る怠け癖

百歳の母が元気で子孝行

取り越し苦労ばかりで母は老いてゆく

除夜の鐘悲喜こもごもの音で鳴る

池田市 栗田久子

あなたとの思い出話ならできる

ほっこりと冬至かぼちゃは甘く炊く

みそかそば時雨の音を聞きながら

せちがらい世も中天に月が出る

ありがとうこの一年のしめくくり

和泉市 岡井やすお

諸国の目 日本打出の小槌持つ

電子立国この頭ではついてけぬ

横綱が揃い横審年が越せ

ドラフトの的報徳か明徳か

南座にまねき上がって春近い

和泉市 中川楓

十六夜や寂しい時はさびしく居

まだ渋の抜けない六十路走るなり

どこよりも我があばら家でうまいめし

美しいもの棘を持ち秋の薔薇

今日の運使い果して眠られず

泉佐野市 山本蛙城

祭だ祭だ子供御奥もいっちゃまえ

隠し癖松茸土産など無論

痩せ薬信じて飲んで死ぬ人も

笑え笑えこんな手軽な健康法

通帳という年金の仮の宿

大阪市 前 たもつ

ノーベル賞中身さておきおめでとう

秋風に負けるが勝ちを諭される

似てきたと夫婦鏡に笑われる

いつまでも光つていては嫌われる

気合かけ今日も動かす故障体

大阪市 鶴田遠野

自慢の子とうとう電話だけになり

晩酌の肴と並ぶ常備薬

旬の旅 行先決めず靴を履く

そのままの人だと聞いて心寄せ

小商い継ぐ気譲る気言いだせず

大阪市 古今堂 蕉子

十二月喪中ハガキで始まった
なんでなぜハテナマークの孫三歳
百歳のしわが輝く底ぬけに
一日の半分寝てる九十歳
氷山の一角ばかり顔みえず

大阪市 川端 一步

晩秋は淡谷のり子のブルースよ
火事見舞い友も来ていた法善寺
親切にふれて心がほてってる
女性見て綺麗と思うまだ男
悪人になれずさりとて善人も

大阪市 奥村 五月

惚れすぎも今では尻に敷かれおり
汚れ役ばかりで生きるお人好し
長男で膝もくずせぬ三回忌
携帯を持たせ老人惚けにされ
老人会幼なじみの恋もいる

大阪市 大川 桃花

輪に入るきっかけ掴む鮎配る
落書きの相合傘でプロポーズ
もう一年まだ一年の手術痕
先生にこれも歳かと先に聞く
金木犀香りのシャワー浴びている

大阪市 清水 絹子

低空飛行よぎるあの日の艦載機
低金利質素質素はお手の物
寝たきりでいいからずうつといてほしい
ああ独り七時の風呂の湯の加減
秋夜長また浸りたいたくくらべ

大阪市 玉置 英子

思い出すこと母よりも多い父
北朝鮮^{きた}の拉致生きている人少なすぎ
握り飯持参平壤入り首相
木犀の香り一瞬立ち止まる
繋がれるのはいや電話コードレス

大阪市 中村 叡子

赴任地の河原芋煮で盛り上る
五十余年添うても判らない人で
孫の事だけは心が一致する
雲海に北アルプスが島と浮く
湯治旅帰る車内でもう疲れ

大阪市 本間 満津子

ゆく秋へひとさし舞うて紅葉散る
遠い子へラブレターめく手紙書き
歳と言う数字に負けぬしょぼくれず
通訳が要る大阪弁のおばあちゃん
火を消して出たのに電話もう切れた

大阪市 浦田 綏子

大阪市 津村 志華子

手本にも反面教師にもなれず

つる茎を草は短く風を避け

それぞれに主によく似た犬を連れ

日本海風は悲歌^{エレジー}この叫び

手拍子にアフタービートはない軍歌

大阪市 町田 達子

彼岸会に曾孫と詣る京の寺

報告を故人に墓石洗つて

和尚さんの話に欲もちらほらと

帰路の足押されて進む京都駅

案外と混む週末のミュージアム

大阪市 小泉 ひさ乃

立ち直る女ひとりの薄化粧

萩が咲く道をゆつくり車椅子

すぐ横になれる自由は私にも

終電の女うれしい月明り

娘と孫に連れられ初の回りずし

大阪市 安達 はじめ

幽玄の闇夜に響くシテの声

もみじの手母の乳房を弾ませる

北風をもろに受けてるおとうさん

正直な冬が寒さを連れてくる

窓際は背中ボカボカ裾寒い

淋しくて風のたよりを待つポスト

ご好意を無にしてからの不整脈

いたわりも喧嘩もします老いふたり

優劣の比較はしない五本指

正信偈ときどき邪念よぎります

大阪市 川原 章久

でぼちんと頭ビカビカ父元氣

曼珠沙華紅光る朝の露

満足を口では言えぬ犬の顔

アメリカに誰もその指止まらない

孫が来てテレビ漫画にすぐ変る

大阪市 大塚 節子

不義理する勇氣自分ではめている

休肝日うまいお酒が届いている

あかんたれ一寸は強うなんなはれ

車窓見る私の胸もローカル線

クラス会華やぐ友が一人居る

大阪市 杉澤 汀

喜寿の坂こえた傘寿の山見える

栄転に単身赴任という付録

返り血を浴びて守った社もこける

パチンコ屋軍艦マーチで玉弾く

バーゲンを蛍の光しめ括る

大阪市 津 守 柳 伸

クーラーが寒い診察待合所
中国茶スリムの兆しないままに
栗御飯味見済ましたお裾分け
剃り落とす眉毛入れ墨入れてある
雨の日は雨の話に湧くメール

大阪市 松 尾 柳 右子

目をとじて顔は仏の耳掃除
湯豆腐の向こうにかすむ夫の顔
思い出のつまる急須を捨てました
高齢化進む手職のありがたさ
美女前に酒の進みが気にかかる

大阪市 津 守 なぎさ

コスモスやスキと遊ぶ万歩計
目をみはる高知カルスト牛の声
呆けたかな青信号を見すごして
岩くだく波頭竜串展望塔
放牧の牛カルストの背番号

大阪市 川 久 保 睦 子

遠回りしてみる秋が見えるかも
どの指に止まろうトンボ迷うてる
おんな独りチューハイを呑む外は雨
竹割ったようなおんなで嫌われる
しっかりとゼ口を数えて品さだめ

大阪市 鈴 木 トヨ子

秋風にさあ出番ですスニーカー
津軽三味ビーンと腕が立っている
漂白剤世相の汚れ思案する
運動会応援の目が忙しい
洗いざらい喋りすつきりお腹空く

大阪市 熊 代 菜 月

利き酒の地酒が出した国言葉
午後三時パート終れば母の顔
笑うより仕方なかった勘違い
カラオケで音痴同士の息が合い
歳月に恋の深手も風化する

大阪市 伊 藤 博 仁

入庫下手若葉がついにぶつつけた
縦縞は戦闘服だ燃えんかい
気の毒にお連れさんかと聞かれてる
水着見ていったり来たり秋茜
眉唾のうまい話を吟味する

大阪市 星 野 きらり

骨のない若者好きなハンバーグ
帰宅してみんな脱いだらベルが鳴り
天高く五欲をひとつずつ減らす
夜更けて焼芋の笛秋の音
暑うおます寒いでんなど歳重ね

大阪市 西川 更紗

交野市 山川 日出子

山並も化粧早めて色づいて
秋晴れにルージュも変えて街に出る
肩の荷が少し解かれてティータイム
占いを信じて今日の賭けに出る
不器用で主婦の域より抜け出せず

大阪市 榎本 舞夢

朝顔の淋しい姿夏終る

花よりも人と車の伊吹山

交野市 森本 弘風

待ち合せ人並み泳ぐように行き
とりかえしつかぬ遅刻をしてしまい
考えが違ふと好意無駄になる
寝不足を癒してくれる秋の風

大阪市 寺井 東雲

マッサージ体調維持の老夫婦
携帯電話車中放送気にもせず
オフロには必ずアヒル入れてある
エビセンベほしくてカモメ船につく
女房は夫をホメル事知らぬ

大阪狭山市 矢野 梓

一人旅 人の流れについて行く
もう少し主役でいたいおばあちゃん
使わずにお守りだけの常備薬
車間距離守ればいつも割り込まれ
太陽に誘われ今日も布団干す

古時計四週トップ平井堅
米英が不気味イラクとにらめっこ
波風よ穏やかになれ日本海
貴乃花秋場所相撲正念場
たまちゃんに平和な日本大騒ぎ

先客の顔が浮いてる露天風呂
カウンターみな常連のお人好し
はつきりとさすので検査恐ろしい
空港で結ぶ世界の表裏
金の成る横丁燃えた法善寺

河内長野市 井上 喜酔

河内長野市 山岡 富美子

キッチンの時計が止まる妻の乱
もう少し乱れてほしいロゼワイン
振袖を着ると乱れる長い脚
冷酒とおでんが沁みる負けゲーム
バス停のあかりが滲む失意の日

河内長野市 植村喜代
坂道にひよいとこの膝おかしなる
どことなく淋しく見える萩の花

これ以上困らせないで余生です
一と月も咳が止らず眠られず
孫が来てみんな忘れる小半日

河内長野市 村上直樹

天高し迷わず赤いタイ締める
抜ける青なお悠然と鬼やんま
この赤は毒婦の赤だ曼珠沙華
秋風や近くて遠い夫婦箸
錦秋のかくも見事に神の筆

河内長野市 水谷正子

集めてた記念切手の形見分け
もう五年行かないが来る蟹便り
駅前に木枯し平気ジベタリアン
それからは何もなかった三代会
朝夕が冷えてもみじが手招きす

岸和田市 原さよ子

ばあちゃんの趣味玄関にある一句
けちんぼのママにも抜けたところがある
浪費家とけちの夫婦でうまく生き
お喋りがすぎて伝言忘れてる
ネット化の流れに乗れぬ老夫婦

岸和田市 宮野みつ江
手相では夫婦円満やったはず
デイサービスの名の下老人収集車

スタンスを合わせて解いているパズル
柔らかな言葉で痛いところを突き
重いのは日頃の憂さの旅靴

岸和田市 井伊東吉

一日が始まる朝のストレッチ
夕散歩ほのかに匂う金木犀
旅ゴルフ誘いの電話増えてくる
下がる世に酒気帯び罰金跳ね上る
北鮮のペースにはまる正常化

岸和田市 高須賀金太

雑巾で拭けば事足るほどの靴
単品は損だセットで食べなさい
うろこ雲ガンの転移を告げられる
ガン祓うお百度妻が踏んでくれ
日没が早くて夜を持て余す

岸和田市 岩佐ダン吉

サラ金のCMばかり見せられる
チャンネルのここでも頭下げてはる
脇役にされて言いたい刻み葱
落葉抱く大地母さんなんだろう
冬の日を浴びて孤老の青テント

岸和田市 長谷川 呂 万

胸つかみ有無を言わさぬ星条旗
魂を悪魔に売って一儲け
終章に美田残さぬ駆け競べ
治療途中歯医者かまわず三連休
栗飯に納得日本の秋の味

岸和田市 木村 正 剛

落馬だけ逃れて今年暮れてゆく
歩きたくないのに急かす万歩計
嬶やかも削除してます第六版
五日制ゆとりができて塾梯子
忘れた頃チエルノブイリはやってくる

堺市 村上 玄 也

日本が隅に置かれた世界地図
二番手に控えて隙を狙ってる
初恋は妻に似た娘と言うてある
恍惚の人メルヘンの森に生き
喧噪に疲れただけのバスツアー

堺市 和田 つづや

山頂で風のボレロを聞いている
正論が解決策と限らない
衣替えせねばと思う秋灯下
コスモスが咲いていたからこの借家
生真面目でないから信じられそうだ

堺市 源田 八千代

読書よりおいしい秋に憧れる
雑魚のまま老人力の仲間入り
闇雲に天下狙っているブッシュ
宝石よりスパンコールが性に合い
紅白の幸子憲一光り合い

堺市 宮本 かりん

明日への期待をくれる茜雲
人もまたいつか別れるちぎれ雲
黙りこむ二人秒針しゃべり出す
オイと呼ぶ人が達者で居てくれる
思い出の継ぎ目で友の顔はける

堺市 齋藤 さくら

さわったら折れそな母の肩を抱き
ストレスに指輪買った気が晴れた
健康にキムチ納豆もう飽きた
脳味噌の違い笑顔でカバーする
缶詰の鯖の味噌煮を替えてくれ

堺市 神原 文

桔梗色千代女のころそのままに
手をつなぎ歩いた道よ萩のみち
アマリス説教されているような
飲む話へついていたら喫茶店
テレビ討論へ僕の物言い通じない

堺市 渡辺 さだを

法善寺月も焦げたてほんとかい

蚊もやはり狙うで嫁の白い脛

びくの鰯拉致せんといて彼岸やで

また秋刀魚無理など言えん世帯です

案山子から稲を刈ったらまた無職

堺市 西村 りつえ

凭れ癖少し離れたベアカップ

百円玉ほんの一善赤い羽根

狂牛より人間先に狂い出す

銀杏散り一万人の第九聴く

腹立ちに大根おろし爪も入り

吹田市 瀬戸 まさよ

真っ先に季節到来服売り場

嘆き節今年もあつと過去になる

危惧抱く正義の味方星条旗

この構図私も撮った写真展

無器用な私が仰ぐ伎芸天

吹田市 穴吹 尚士

愛犬を呼んでる妻の甘い声

一軒の家の天下も取り損ね

雑巾とバケツを妻に当てがわれ

胸元の白さにちらり目が泳ぐ

台風に手ぐすねをひく工務店

吹田市 太田 昭

風とならでできる話を持つて出る

銃口を押しつけられて吐く本音

早送りできず苛立つ妻の愚痴

一人居てアリバイの無い恐ろしさ

五十音順これも一つの運命か

吹田市 岩屋 美明

古里に心安らぐ道一つ

美しいゆえかクルスを抱く女

ライバルの情けに負けた借りがある

世渡りの下手な夫婦のサロンプス

空腹を知らぬロボットには勝てぬ

吹田市 野下 之男

鏡にはほんとの歳を教えない

お小言の無い日の妻を愛してる

歳だから美しい時刻みたい

分刻み総理でなくて幸せだ

携帯に見えない紐がセールスマン

吹田市 大谷 篤子

光るものみんなはずして孫を抱く

自分史のつもりで日記まだ続く

お祝いにパッチワークの手さげ縫う

子の立場考えながらなくさめる

ぎりぎりになって相手が覚えて来た

大東市 南 原 正 和

小刻みに杖つく母の後を行く
軽やかにステップを踏む喜寿の足
甘い文証拠のように妻は持ち
茶柱の立つほど幸は回りこぬ
大山の峨峨たる巖に紅葉燃え

大東市 児 玉 蛙

添え書きに本心かいたラブレター
軽い嘘軽く流して馬が合う
夫婦松いつの間にやら独りぼち
表札の亡夫の名前生きている
いい話聞いて全身毬となる

高槻市 傍 島 克 治

さんま焼く七輪あおぐ渋うちわ
生簀から殺気が消える定休日
魔法がかかるママが添寝の子守唄
ご近所の目が背なを刺す若づくり
悪友も弔辞で惜しい人になり

高槻市 江 原 秀 夫

列島を狂った風が吹き抜ける
わけもなく鉄拳飛んだ戦時中
秋うれし妻が自慢の栗ごはん
ひとすじに生きてごほうび百までか
輝いて沈む夕日にあこがれる

高槻市 生 田 義 一

日朝が憂い残して大握手
司会者に夢中抱きつく鐘三つ
なぜかしら六甲おろし寂しそう
古希過ぎて妻はピアノのレッスンへ
健やかで越えて見せたい喜寿の坂

高槻市 乙 倉 武 史

日本中沸かしノーベルダブル賞
テロと拉致いやな言葉だ死語となれ
賛成と反対自分二人いる
ケイタイの虜切っても切れぬ仲
偽装ではないか悲しき猜疑心

高槻市 西 谷 治 三 郎

同権が女らしさも奪い取り
バーゲンに燃えてるうちは大丈夫
照れるのか手などつながらん老い二人
民主主義反論することだけ覚え
赤ちゃん語しゃべる園児が英会話

豊中市 吉 田 あ ず き

はにかんだ作業服よしノーベル賞
秋の色手に染めながら柿をむく
コスモスと夢の話がしてみたい
触れて知る物にいのちのあることを
電磁波に取り囲まれて狂う脳

豊中市 松岡 久留美

墓詣り愚痴聞く先祖苦笑い
物言わず貫禄見せるうちの祖父
その笑顔だんだん誤解とけてゆき
子の未来ヒント与える母心
一とせの思い出巡る年の暮れ

豊中市 岸田 知香子

MRI頭の中を暴露され
萎縮した脳に納得生さる道
ここからの先の余生に腹くくる
大切な物生前に形見分け
久方の墓参上京へまばかり

豊中市 山門 タミ

金金金人間模様狂わせる
戸が開いて大丈夫かと娘来る
駅弁に海山川がつまってる
窓際で雲行き案ずカタツムリ
ああ人生終着駅が見えかくれ

富田林市 片岡 智恵子

やんわりと打たれた杭の深いこと
暇そうに見られ怪しいピラくれる
まな板の音はわたしの自己主張
浮き沈みしずんだ日本どこへゆく
月うさぎやっぱり餅を搗いている

寂しそうだから話に乗ってやる

観覧車夢の続きを見に上る

神無月 賽銭箱があくびする

風の吹く方へ転がる生き上手

錆びついた脳にエンジンかけた恋

寝屋川市 江口 度

かぶりつきのヤング正直だと思ふ

味つけの上手な妻の手に飼われ

受付けが済み番号になっている

券売機メニユーのように駅探す

長男に生れたメリットデメリット

寝屋川市 森 茜

社会科は見てきたような嘘も言い

腹立てる馬力残っていたなんて

バッグから頭 美容師の教材

かち割って本音をさらしたい胡桃

自転車籠に兵糧さんざめく

寝屋川市 太田 とし子

しかめっ面 月も三角十二月

九官鳥に帰れ帰れを教えとく

思い出しお金が逃げる十二月

神無月神と論議を交わしたい

天と地を円く納める地平線

寝屋川市 坂 上 高 栄

寝屋川市 籠 島 恵 子

都合等聞くから居留守使われる

名月も霞む今宵の拉致家族

喜怒哀楽紡ぐ日毎の綾を織る

朝風呂の至福に亡夫思い出す

同時テロ風化させないレクイエム

寝屋川市 富 山 ルイ子

的確な助言を友はありがたい

聞きいれてくれぬ忠告差し控え

欲しくない夢達成のその日まで

あのパワーどこから湧いてくるのかな

宅老所塵少しずつ増えている

寝屋川市 堀 江 光 子

人混みに居ても目を引く美しさ

美しい姉を持つ身の複雑さ

美人薄命我悠悠と長生す

老いてなお美貌は芸の力かも

頂点を極めて増える稽古量

寝屋川市 岸 野 あやめ

風呂で滑って独居老女の気の弱り

定年後妻の郷里があたたかい

恋多き女も歌う子守り唄

お供えに高々と盛る栗おこわ

東京は坂の名多き旧市内

挨拶を頭の上で交わされる

恥かきにせいはいっぱいの笑顔して

バス待ちの後ろの人が濡れている

まるで被告会計監査受けている

散らかっていても通してしまおう客

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

夕焼けに行方不明の子を思う

鏡見る死んだ親父がそこにいる

輪の中に入っていたいいじめっ子

身寄らない人と思えぬ笑顔持つ

四輪駆動夢が叶った今は古希

寝屋川市 平 松 かすみ

お手振りへ日本中がみな笑顔

おみごとへ拍手いっぱい曲技団

ママチャリの遠出許さぬ五十肩

果物の好きな夫へぶどうの絵

少食の夫の方が達者です

羽曳野市 三 好 専 平

毒舌を捨てたら閻魔待つており

イチローと呼び捨てにする犬を飼い

冷房を暖房にする秋の雨

ブライドが高くて酒がやめられず

青テントにベーターペンが鳴りひびき

羽曳野市 徳山みつこ

灯をともしように柿の実熟れてくる

トロッコ列車コトコト秋を縫って行く

断らぬ人にそうそう頼めない

かけそばがこいしくなった機内食

ほらもつと背筋伸ばせと秋の天

羽曳野市 安芸田泰子

花束に囲まれている虚栄心

魂胆があつて味方になつておく

捨てられず動かぬ時計亡夫のもの

コスモスの情け貰つた休耕地

秋の夜の灯せば眠く消せば覚め

羽曳野市 川口信子

運不運神が握っているいのち

世の中が動き過ぎるよ目が回る

生きるには歩けるけというカルテ

幸福だ奮ふくらむ庭の隅

いい夢を冷凍保存したくなり

東大阪市 安永春

律儀にもお彼岸知らず曼珠沙華

有名になつても同じお人柄

ホロ馬車に乗つた気分で見るシネマ

医者の指示さからいながら自己管理

お医者さんも糖尿病になつてはる

東大阪市 笠井欣子

秋晴れだ心の虫も乾しておこ

悩みごと聞いて私も悩まされ

秋の風笛族には身に沁みる

夜ドラを見るため昼寝しています

東京で買った鞆が大阪製

東大阪市 中岡妙

わだかまり持った闇夜の独り言

空回りしてる私の設計図

長生きの世で順番がよく狂う

フラッシュの光り仮面の裏写す

秋桜を千も咲かせば観光地

東大阪市 指宿千枝子

牧場の子牛涼しい目をしてた

暑かった暑かった日も遠のいて

アニーローリーハミングしてる秋の風

口紅で鏡に書いてみたい文字

ジョークなら甘い言葉も許せます

東大阪市 北野賢子

まごころに触れた涙は美しい

隣接の炎へ生きのびた柳

両手広げて腹いっぱいに青い天

作業着のままの受賞がカッコイイ

故郷に案山子を守る千枚田

枚方市 宮川 珠笑

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

神さまは私の製造責任者

拳手をして発言させる子沢山

ケイタイのメール省略語を探す

住職が気に入らないと宗旨変え

熟睡のベッドは神の治療室

枚方市 森本 節子

姪の著書兄在世ならいかばかり

虫の音もかすか要支援継続す

拉致事件むかしの子とり思い出す

あの人は川柳塔の表紙褒め

右脳刺激にモーツァルトの曲が効き

枚方市 安達 忠央

げんじつを鏡は遠慮なくうつし

サンガラスかけても鏡僕の顔

江田島に名を刻まれた生き残り

遺伝子の刻んだとおりさからわず

口髭へ古希のおしゃれは手鏡で

藤井寺市 高田 美代子

風百態夏から秋へそして冬

葬ひとつ大事な人を見送りぬ

買い替えるつもりは無いが新車見る

切り札は辞表矢でも鉄砲でも

もう武士に戻らぬ刀売ってきた

果物屋鏡一役買っている

私を搾れば甘い汁が出る

産み分けたように生れた子はふたり

人妻も秋の暦に宴続く

老いた象見かねてしまふ歩き振り

藤井寺市 楠 昭子

脚光を浴びてそれから芽が出ない

ほどほどの欲があります元気です

猛練習スポーツライト浴びたくて

時どきは群をはなれて群を見る

相性は良いはずなのに波が立つ

松原市 國見 蘭香

寝つかれぬ窓には月の鎌刃える

伸びる芽を刈る叱り方直さねば

遊ぶ金ほしくて起こす大事件

傷つけた言葉心で詫びている

泳げたら向こうの島へ行きたいな

箕面市 岩津 ようじ

我が半身わがものならず情け無や(脳梗塞)

これが皆脳梗塞か患者たち(入院 3句)

いつ死んでもええなわが身にいい聞かす

動脈へパイプを通すその検査

アメリカのバカバカバカというてみる

箕面市 出口 セツ子

本日は定休日です妻の顔

捨てられる日へ体力を溜めておく

悪女にもなれず才女にほど遠い

生きるため心の傷に塗る化粧

虚の中でしばし心を休ませる

守口市 結城 君子

敬老日一日天下人となり

亡姑に似ておいしいものを買いあさる

ピカーが出世するとは限らない

光るものつけて外出許可される

秋風に押されて雑魚も波にのる

八尾市 宮崎 シマ子

秋雨や今日は私も日曜日

湯上りの匂いの妻が柿をむく

思い切って走ってみるか老いの坂

血液型二つに分かれている家族

仕事を勝手に片づけては困る

八尾市 吉村 一風

したいことまだまだあつてまだ生きる

花好きと会えばやっぱり花のこと

涙腺がゆるんで老いを知らされる

ものはずみで言うた言葉を詫びておく

プライドを捨てるとジョークよう分る

八尾市 高杉 千歩

三回忌夫に告げること多し

放浪癖やまずアルノ川夕暮れる

ジャパニーズ絵描き青い目に囲まれる

ボンジョルノ グラッチェだけでトスカーナ

しあわせな一日でしたひとり風呂

八尾市 内海 幸生

春の花愛でたカメラで花紅葉

落日と日の出に蒐まるカメラアイ

親切な医者のおすすめを拒む酒

童唄亡母への甘えかも知れぬ

病気とは付き合うものと他人様

八尾市 村上 ミツ子

食欲へ実りの秋が怖くなる

買う自由買わない自由だつてある

年金じゃシンブルにしか生きられぬ

強すぎるやる気自分を追いつめる

がんばれることへの感謝忘れない

八尾市 篠原 いつふみ

度忘れを思い出したは風呂の中

まあ飲めよ落ち着け金で済む話

近道を知ってそれからする遅刻

会席の原価計算妻がする

金借りた方が強気で睨みつけ

八尾市 長谷川 春蘭

花言葉無くて咲かされ水中花
石畳隙間に生きて苔紅葉
ほほえみも言葉の一つ秋桜
菊育て日日足るを知る凡夫婦
露ふくむ萩の葉づれに虫の声

八尾市 神原 まさと

散水の手足に藪蚊まとい付き
大つれて乗る平日のケーブルカー
行列の店ヘラーメン食べに行く
朝は秋午後から夏に逆戻り
爺出番運動会の座席取り

八尾市 井尻 民

ストレスを溜めた電話の請求書
同意書に三文判をぼんと押す
たどり着く雑魚にエールを惜しみなく
紅葉と夕日に抱かれ旅終る
産声をあげた時から七光り

兵庫県 大谷 幸次郎

小さくて安くておいしいリングゴ買う
招かざる客で居座る風邪の神
愛国心やたらはためく星条旗
憂国も愛国もまた甦る
農薬漬けのリングゴが赤く美しい

相生市 中塚 礎石

合槌の裏はとつくに読めている
夫婦道かぞえきれない曲り角
外出のおしゃれの噂さきに着き
束ね髪おしゃれのつもり赤い紐
千羽目の鶴の祈りは空の青

尼崎市 春城 武庫坊

十月タンポポ異常気象を語るのか
トップから少し離れて丸く生き
鱗雲飛び友の計報の電話来る
蛇口から秋の温度で顔洗う
OB会出席出来て幸せだ

尼崎市 春城 年代

とりあえず朝の祈りはきょうのこと
リハビリが過ぎて身が入るふくらはぎ
十月八日寒露夏日よさようなら
リハビリの靴をぬげずに秋になる
自己愛の極み念仏うまくなる

尼崎市 長浜 澄子

風ひゆるる ふと老い方を考える
わたくしと本音で生きた土踏まず
忘れぬ思い出フリーズしておこう
神無月残り少なくなる余白
極論を避けて美味しい茸飯

尼崎市 田 辺 鹿 太

謝れば済むくらいなら怒らない
潮時を計りあぐねている座禪
一片の義理から重い荷を背負う
大声で歌うさびしい男たち
横丁の再起を祈る法善寺

尼崎市 松 下 比 志

円いから丸く歩いて恙なし
塩っぱい顔したわりによく喋る
横道にそれた話に花が咲く
道化師にあやされている親も子も
ストレスが溜まると美味しいものを食う

尼崎市 山 田 耕 治

水都祭一万人の鼻緒ずれ
騎馬戦の残る敵将女の子
時々はリングの唄を口ずさみ
コスモスの嵐に心奪われる
稲の穂を半紙に巻けば神います

伊丹市 山 崎 君 子

今日寒露小雨にぬれる松のこも
紅葉には早い鞍馬の露天風呂
無人駅自動改札里の風
里は初雪紅い実白いナナカマド
友の温み今年も男しく南瓜連れ

伊丹市 小 熊 江 美

不況風元値切っても売れ残る
緊張をすると出て来る笑い癖
冗談と打ち消す裏にある本音
下心犬の機嫌も取っておく
孫と来て好みが違うレストラン

川西市 西 内 朋 月

ほうふらの上がり下がりに見る自分
やめとけと点滅させる別の僕
カラオケを聞いて寝ている三次会
朝刊を素顔で読んでいる美人
線香をあげてない墓ある彼岸

川西市 米 原 雪 子

膨らんだ実りの秋の予定表
夕方には忘れてしまう二日酔い
日暮れにはやっぱり秋が冷んやりと
衣更え祭ばんでん出しておこ
列島の興奮ダブルノーベル賞

西宮市 山 本 義 子

窓開ける今に空気も量り売り
犯罪にならぬ程度に横着し
大声を出され常識敗けている
乱雑な机わたしの定住地
伝言板面白かったのに消えた

西宮市 坪井孝一

あの時は菩薩に見えた酔っていた
おーい はーい 素直な返事気味悪い
皿のバセリ残さないでと睨んでる
二人の地図矢印書くのいつも妻
おとうさん映画千円楽しいよ

西宮市 門谷たず子

面はゆいダイヤ婚とて祝われる
りんどうを夫と植えてこともなし
一年過ぎてようやく馴れた片乳房
邪心そこそこ水に流して仏の花
余生のどかにすこし遅れる古時計

西宮市 牧淵富喜子

泣いている場合でないが拉致に泣く
咲き場所を心得ている彼岸花
釣るべ落しへ雨戸くる音響き合う
何時か来た道でとんぼが赤くなる
よたよたとそれでも秋の蚊にさされ

西宮市 井上松煙

古ばけた鏡に今も亡母おわす
油蟬猛暑刻んで燃えつきる
秋晴れに氣力をためて街に出る
今のうち遣りたいことに生き急ぐ
地下鉄の窓を鏡に身づくろい

西宮市 緒方美津子

若い人青い山脈唄わない
切り札の咳も孫には通じない
立ち話小声になると気にかかる
うそつかぬから鏡にはかなわな
甘いもの断つと私は思考ゼロ

西宮市 長谷川淳

明日あると思いつ逝くか吾もまた
貯めることだけが楽しい人がいる
文殊さまテロには知恵を貸さないで
癪だけど妻の予感に帽子脱ぐ
秋空に番のへりが飛んでいる

西宮市 刈田泰司

出遅れた朝市豆腐売り切れる
遅刻した謝りを聞く花時計
泳ぐより水着を見せに行くツアー
ネオンの海を泳いで乗った玉の輿
水面下泳いでくれる妻がいる

姫路市 古川奮水

吉報を速達にした文字を読む
カラオケに凝ってビールがロゼになる
観覧車ゆっくり秋に閉じ込める
独身寮さんまがつづく匂いする
ちやぶ台にみかんを盛って師走なり

鳥取市 田村邦昭

決断を迫るいよいよ朝になり
箱入りの金魚は波を知らぬまま
知りすぎた耳が勝手に愚痴を言い
苦しみを耐えて明日に陽があたり

鳥取市 宮脇道子

投句して愚痴と孤独を洗い出す
小魚をコツコツ食べて背を伸ばす
収穫で心豊かに満ちた日々
約束を時々忘れ脳不在

鳥取市 前田一枝

案内のなかったまつりすんでいた
柿の実は上の方から良くうれる
はきなれたクツにも水がもれていた
木守柿ポツンと一つ残される

鳥取県 近藤春恵

川柳の趣味冥土まで持つて行く
許可証がないから冥土まだ行けぬ
人妻の喪服姿が色っぽい
色っぱさ少し残して黄泉へ発つ

鳥取県 原みさを

潮時を西の空から知らされる
病院のいつもの場所の目安箱
寄り道がこんなに楽し花野ゆく
向こうにも峠が見える古稀越える

鳥取県 乾喜与志

年々に浄土への足にぶくなり
足ガタガタ漸く老いたなと憶う
秋晴れに頭なで撫で草むしる
栗三粒ポケットに温泉通い

鳥取県 国森武子

いつとなく息子のペースについてゆく
ボタンキュー私の心何処いった
一つずつ仕事片づけ良しとする
年よりの仲間に話しすくわれる

鳥取県 吉田孔美子

酒愛し短命残るのは女性
待っている猫夫より愛しい
餌をまつ真剣な目に負けちまう
奥さまはハリーポッターに嵌まる

米子市 永井三津子

葉バラバラ心ガサガサみんな秋
貧しさが思いやる子を育て上げ
好きだからもう一度だけ騙される
また縋る掴みきれない愛なのに

米子市 神庭詩郎

リストラをされたか秋のはぐれ蟻
マニユアルの役所言葉が善処する
今ペット先祖はネズミ捕った猫
机上論だけでは景気浮上せず

松江市 安食友子

脚光で赤毛のアンも浮かばれる

祭典場ハンカチ共に五度行つた

ツンドラのコケよばちばちさようなら

ゆっさゆっさと狭められてる私の座

松江市 小川注湖

青い空とどけ届けと叫んだよ

君種は播いただけでは育たない

一言が風に浮かれて舞い戻る

大相撲やっぱり貴で盛りあがる

高知県 小澤幸泉

ポケモンがわたしの居間に座を占める

そのままの流れに任す老い二人

膀胱が近頃少し反抗期

海鳴りを夢底に聴く遍路宿

亀岡市 井上森生

八幡は踊りを誘う水が湧く

可憐なる古代紫ハスの花(オニバス咲く)

孫が描くじじはばの目は輝いて(三歳)

孫の声今日も電話に割り込んで(一歳)

大阪市 中田あい子

六人の病室一人が早耳屋

丸ビルで夫は弁当妻バッグ

閉店のバーゲンセールビラかなし

立ち話出来ぬ相談珈琲屋で

堺市 黒田真砂

リハビリの汗懸命に今日を生き

敬老日抹茶と饅頭でもてなされ

亡母の忌思い出すこと皆樂し

今日という日を大切に過さねば

和泉市 西岡洛醉

女房の味に染まって五十年

丸く住む我が家は棘の無い暮らし

欲の無い心植えられ戦中派

賞味期限少し残して妻は派手

吹田市 早川棲世

佇てば榆 学友すべて書信断ゆ

賭なんかちよろい戦争やった身に

青春は戦争 兵舎に哭く地虫

八聯隊弱し船場は妥協癖(生家は道修町)

高槻市 井上照子

ライセンスとって生きてく糧とする

上等の皿にさんまが照れている

独り居の食事盛りつけ飾らない

何にでも丸さがみえる兄も歳

豊中市 檜谷郁子

十六夜の月に誘われ亡夫偲ぶ

春愁に君忘れじの月朧ろ

晩夏には夢の宴の白い月

月下美人そっと触れたい午前二時

枚方市 二宮 山久

不況風つづきますます肩たたき
友と二人コップ酒のむ肩たたき

趣味に生きわが人生に明日がある

苦労して貯めたへそくり飛ぶ不況

枚方市 鈴木 政子

種子島やっと成功三号機

私には甘いドラマに縁がない

フォークダンス リズムに乗れぬ喜寿の足

リズムよく足が運べる今朝の幸

藤井寺市 中島 志洋

お互いの臍繰りばれた大掃除

忘れない忘れない憎い人

別れてから良いとばかり想いだし

千鳥足ジングルベルに足もつれ

守口市 井上 桂作

ご神前小銭をそっと入れました

老いたとは思いたくない歳がぞえ

古希すぎて変わらぬ手相今日も観る

ペイオフの解禁いつかなしくずし

八尾市 宮西 弥生

底辺の力ほんものかくれてた

血まなこのエリートすこしずつ消える

衣着せぬ言葉表も裏もない

くたびれたわたし支える秋の天

神戸市 池田 善守

笑顔笑顔みな別嬪の顔になり

サン格拉斯美人そのままグラスはずさずに

ゴメンネを安売りしてる定年後

エスカレーターのらず階段えらぶ歳

西宮市 秋元 てる

親であり続けた背なに疲れ見え

片親のせいか気配り忘れぬ娘

ひとり住む昼は腰元 夜は女王

切れ者との対話に疲れ小爪研ぐ

西宮市 菊池 トミエ

交差点スクランブルの急ぎ足

糠漬を毎日まぜる母元氣

避暑便り見知らぬ町の消印で

忘れない過去も今では郷愁に

予告

第九回 川柳塔まつり（アウイーナ大阪）

平成十五年十月五日（日）

第二十七回 全日本川柳大会（香川大会）

平成十五年六月十五日（日）

第十八回 国民文化祭（山形大会）

平成十五年十月十二日（日）

自選集

志摩波切にて

白日紅虹 灯台と喜寿よき友ぞ
カラオケもルパン三声十二月
宝くじ十枚まさにストーカー
一日を五つに分けて生きるなり
除夜の鐘五臓も腐れゆく思い

命残照悔いなく幕を降ろしたい
とほとほと歩けば影もとほとほと
今日もまた標的となる席に座す
浅はかなわたしを笑う冬の月
若者が群れる不気味な戎橋

虎落笛鳴らして寒気団が来る
母の愛フィリピン海溝より深い
あの山を越すと故郷の灯が赤い
北風に向け掛取りのゆく寒さ
迷いから覚めると碧い空がある

橘 高 薫 風

川 島 諷云児

木 村 あきら

越冬の支度ボタンの覆いする
五風十雨 喝采のない農に老い
片袖を濡らし相合傘がゆく
うわついた気持我が家の踊り好き
家建てて先祖に済まぬ土地を売る

黒 川 紫 香

学友が仕組む挙式は賑やかだ（孫六甲アイランド島で挙式）
一組の愛百の眼が祝福す
日本を背負う気持でいるふたり
言葉にはならず両親涙拭く
若者が島に溢れて式終る

小 西 雄 々

無縁仏の鳴咽を虚無の町で聞く
隣にもだんご分けあう低い堀
警鐘乱打 台風進路変えてきた
すじ雲が案山子の苦勞聞きたがる
怪我したと思つて耐えるスキヤンダル

小 林 由多香

夢フェスタ七年かけてやってきた
とつときの顔で国文祭迎え
会場をはしご国文祭に酔う
柳友の笑顔で鹿野燃えあがり
夢フェスタ握手あくしゅで幕を閉じ

工 藤 吟 笑

斉藤 嘉

万歩計声掛けあつてからの友
坂の子をそつとまなこで押してやる
縄文の鼓動伝えている柱
介護する窓を覗いていく蜻蛉
毬を蹴る少し遠出がしたくなる

田口 虹汀

曳山囃子ゆつくり浸る仕舞風呂
二十二時になつたら止まる曳山囃子
殿の曳山は太鼓に気を遣う
宵曳山に唐津供日の幕が開く
拝啓はすぐに出たけど後が出ぬ

竹内 紫鏑

半ドンに教師の野球見て愉し
父が切る大根で学ぶ多面体
ゴム印の指名 翻訳二十年
首都に来て誤訳を正す六十路
翻訳に追われバスボートは眠る

田中正坊

今日もまた休まぬ父の古時計
正しいと思うが辞書で念を押す
運不運 神さまだけが知っている
生きている唯だけで価値がある
明日のことよりも思い出に生きている

玉置 重人

消しゴムで消せない嘘を悔いている
仏にも鬼にもなっている喜劇
したいこと何もないのも淋しいな
退屈をせぬ鉛筆を持っている
ひとが好き人が恋しい花ことば

月原 宵明

右手あげ小泉総理通りすぎ
悪友という父よりも偉い奴
横向いて携帯電話大笑い
風鈴が居眠り誘う午後三時
拝啓と書いたが暫く次が出ず

恒松 町紅

一合が入ると箸も元気いい
一杯は悪いと出雲お茶どころ
いい話大根漬を切りながら
よく光る星だ亡妻かも知れぬ
一徹な筆で少々骨がある

遠山 可住

来年がじわじわ足や腰に来る
来年は孫とメールをはじめよう
うぬばれを赤提灯が聞いている
上目づかいに鼻の高さを比較する
結婚してから女の運不運

土橋 螢

夢フェスタ鳴かぬ蜚が身を焦がす
若月の輝き明日もよい天気
信じる人のうしろから月が出る
勤労感謝 汗の匂いを嗅いでみる
忙中閑午後は川柳人になる

西田 柳宏子

まん丸い月を見上げる見惚れてる
うっかりを美人婦警にしぼられる
愛想笑いして変態と間違われ
お隣を覗き読みする通勤車
指定席ある居酒屋のコップ酒

西村 早苗

陽だまりが好きコロコロと毛糸玉
為すこともなく繰り上げた雨の酒
喫茶店季節はずれの桜餅
鯛雲流れいわしの浜不漁
大風呂敷で話をまいて去んだ客

仁部 四郎

あの頃の責任たがいになすり合い
あの頃というトンネルがある昭和
あの頃という一年の学齡差
あの頃の各駅停車ぬくかった
あの頃も主婦になったら強かった

野田 素身郎

木枯しへ少し熱めの燗をする
来年は定年がくる大晦日
煮物をしたりテレビを見たり大晦日
大晦日今年も苦しかったなあ妻よ
十二月丈夫な妻も疲れ気味

野村 太茂津

卒寿まで生かしてほしい主治医さま
目標は白寿へ希う主治医さま
戦友の電話は貴様生きとるか
貴様も俺もまだまだ死ぬな手を繋ぎ
腕を組み肩抱き合える回り道

波多野 五楽庵

百日紅昔むかしの夢のこと
おしきせの病衣の袖が悔しそう
鉄橋を渡って行ったかたつむり
中流という安らぎに支えられ
ふり向けば一年ほどの哀しみぞ

藤村 女

エプロンと足袋の白さに母の自負
人形の箱から出たい夢がある
シンデレラ夢見て踊るトウシューズ
おかめだが医者も薬もいらぬ孫
匿名のままで続いて来た善意

舟 木 与 根 一

青刈りの田んぼで泣かぬ罰当り
百姓が泣いて馬謖^{びく}を斬る田んぼ
かまきりの異議は聞かないコンバイン
生きている証 茶碗は光ってる
亡妹はどの辺やろか曼珠沙華

芳 地 狸 村

御神灯飾って街はまつり彩
まつり待つだんじり小屋の鉦太鼓
だんじりをいきいきさせるまつり足袋
だんじりにこなから坂が人の波
だんじりの宮入り競う岸和田っ子

宮 口 笛 生

間の抜けた朝なり新聞休刊日
秋ナスのうまさ紫色の濃く
稲刈りがすつかりすんだ夜の酒
拉致事件二十四年も経った今
米余り続く豊作もて余し

森 下 愛 論

辞書開き暮らしの中の自己育て
人の世の裏を返して自守自戒
ストレスが入りしている障子穴
月丸く座禅も組んで秋夜長
十三夜そつと挽歌を口ずさぶ

八 木 千 代

幕いくど下りては上がる人の世や
峯は雪 祭りの耳は過敏症
祭り囃子と微妙にずれながら踊る
神も早めに寝ていられよう祭りあと
栗の実は栗におそらく人の世も

八 十 田 洞 庵

あれからのわたしファジーな道を選ぶ
秋の風 名山赤く染め上げる
潮騒を遠くふたりの情死行
研究室 生涯こと決めている
燃えつきた男花道などいらぬ

両 川 洋 々

風吹けば細い絆が切れそうだ
解散へ金の成る木を植えよう
ヤジロペーお前も心細いのか
からみつく土に離農が詫び切れぬ
妻いつも時限爆弾抱いている

阿 萬 萬 的

人間不信だんだん狭くなる世間
マンネリな暮しで同じ愚痴を言う
生真面目でちつとも浮いてこぬヒント
抜け目ない男にうまく乗せられる
存在感アピールしたい口はさむ

石川 侃流洞

子の歳を数えあきらめつかぬ拉致
一時帰国新たに不安湧く家族
ダム底の旧家懐かし渇水期
ヤセ薬の効き目体験談誇張
職人氣質中途半端が大嫌い

板尾 岳人

十二月母を迎えに花を買う
十二月絵を画くひとに母のこと
十二月恋をしましう深呼吸
森の中一人で歩く十二月
悲しくはないが淋しい十二月

奥田 みつ子

数知れぬ恩に逆らうことばかり
過去追えば二の矢三の矢つき刺さる
レクイエムむらさきに塗りこめし胸
目立たない杭が一番効いている
赤いエブロンつけて元気をもらう朝

越智 一水

八十の恋茶をすすり茶をすすり
月見酒独りで子のこと孫のこと
飾らない言葉で人間ふとく見え
糸瓜忌や今宵も明るい十七夜(子規忌)
虫が鳴く一草庵で虫が鳴く(山頭火忌)

河井 庸佑

一步退き事態静観するゆとり
他人事と迂闊に聞いて落ちた穴
湯に浸かり今日をゆっくり振り返る
受けて立つ腹は決まった向かい風
顔見世で姑は今年を締め括る

河内 天笑

孫という邪魔が入って捗らず
青テントから出ていった霊柩車
パチンコ屋裏も表も出入口
拍子抜けして引き返す消防車
フラダンスしに蘭鑄は生まれ来し

第2回 川柳マガジン文学賞 作品大募集

応募要項 所定の用紙またはB5原稿用紙に、
課題「人」3句(未発表作品)・住所・
氏名(雅号)・年齢・電話番号・性別・
所属結社を明記・複数投句可

第一次選考 小林由多香ほか29名共選
各選者ごとに特選1句、秀作3句、佳作
10句を選出

第二次選考 選者15名で第1次選考選出句120句
から大賞ほかを選出

賞 「川柳マガジン」大賞1名(賞状と盾・副
賞として句集発刊)準賞3名(賞状と楯)
第1次選考特選者30名(賞状)

締め切り 平成14年12月31日(消印有効)

参加費 2000円(郵便小為替)

発表 第一次選考 川柳マガジン15年3月号
第二次選考 川柳マガジン15年4月号

応募先 〒537-0023 大阪市東成区玉津1-9-16-4F
新葉館出版内「川柳マガジン文学賞」係
TEL 06-4259-3777 FAX 06-4259-3888

水煙砂

奥田 みつ子 選

日立市 加藤 権 悟

お日様と握手満期のない野良着
人生のドラマ泣いたり笑ったり

つるべおとし影は等身大になる

しつかりと洗うたたかつて来た手あし

老農の汗を労る米の出来

ライバルの背中 of 疵は触れずおく

鳥取県 西 垣 美知子

花が好き痛みもわかる人も好き

老いの影いよいよ宿る丸い背な

豊かさにあまえ腰抜け多すぎる

邪心みな消せよと寺の鐘がなる

たのしいね夢一杯の中にいる

母の手は打つと何かが出てきそう

河内長野市 石 堂 潤 子

最初はグーみんな味方とつい思う

一人では何も出来ないから夫婦

絆創膏スパツと剥がす人が好き
悔しいのに笑う仲間だから笑う

B面の位置で耐えます霞草

いい人じゃ無いけど嫌な人じゃない

札幌市 三 浦 強 一

ふる里の秋が宅配便で来る

人間の心の砂漠化が進む

大海の一滴たらん岩清水

決断が行ったり来たりドアの前

ライバルの優しさに会う下り坂

ロボットに出来ぬ笑顔で勝負する

堺市 藤 井 一二三

老いの血を沸かせ祭の鐘の冴え

献灯に虫とび跳ねて里の秋

控え目に生き秋風と語りたり

そよ風のありかを見せて萩のゆれ

季の移る雲窓に見て薬包紙

岐阜市 平野 あずま

志野焼に乗った秋刀魚の男振り
平凡な明日を信じる飯茶碗
これ以上何を願うか流れ星
名工の誇りロボット寄せ付けぬ
美しい訛に会った城下町

今治市 塩路 よしみ

生きざまを見ている鏡研いとか
それぞれに個性ゆたかな指五本
触れ合うて沙羅の白さよ一会とは
胸の内吐きたい空は透き通る
レモンティーしみじみ旨い夫といて

秋田県 秋野 宏

流れ弾落ち目になると良く当たる
駅ごとに違う訛が乗車する
少子化に広場は老いと草ばかり
教室に未来の博士たんといる
ちっぱけな悩みを笑う日本海

北九州市 岡田 幸生

善人の証のように鼻の汗
秋の天働く汗と遊ぶ汗
晩酌に妻も付き合ういい知らせ
ぼろぼろの辞書を捲れば亡父と会う
すつきりと詫びが言えない自己嫌悪

田辺市 大峠 可動

くも膜下我がてつぺんの実を落とす
カテーテル明日が見たくて闇を這う
癒されて逝こか桜の咲く時期に
点線の点に隠した七転び
原点は人の一子か地藏さん

高知市 小川 てるみ

主婦というノルマへ秋の日が暮れる
ジェラシーを抱いて私はまだ女
打ち返す波が心を和ませる
ありがとうその一言で癒される
終の地と決めて夫婦の歩が揃う

高知県 百田 幸

ほどほどに愚痴も言いあい嫁姑
妻だつて温い言葉も欲しいのに
聞き流すほうが楽です平和主義
友禅の着物思わす茜空
にんまりと皮肉の裏を読んでいる

武蔵野市 亀井 円女

婆さんや食べすぎ夜更ししてないか(亡夫の声)
たしなみじゃお洒落もしろよたまにはな
まだ来るな暫くのんびりしたらええ
天国の呑み屋で毎晩ごきげんや
友達出来た心配するな淋しゅうない

アルゼンチン 松井美稚子

店頭の毛皮で夢を吸っている

お茶漬に妻の旅路が映る日日

明日があるまことかうそか移民節

我が家には家族数だけ銃同居

何見てもバックミラーに母国影

高知県 桑名孝雄

江田島の五省心に書いてある

唐辛子すこし利かせておく蝶

矢印の順路の通り来た甘さ

瓢箪の駒よ自由に出ておいで

方言が消えて誇れるものがない

愛媛県 黒田茂代

秋の庭に生きた楽器を飼っている

ほととぎす草挿す有田より備前焼

世界の天気よりもわが家の物干場

抜けているところがあるので親しめる

紅葉も祭日も急ぎ足で去る

竹原市 正畑半寛

年金で青春十八切符買う

カタツムリみんなの方がはやすぎる

親子バツタ落さぬように落ちぬよう

命半分句碑にあずけて置くことに

神様はきつといなさる見てなさる

岡山市 大森純子

良心の目減りが目立つ日本丸

良心がそのうち死語になるのでは

わたくしの肩書きですか元少女

そして今ジャズを聞かなくなりました

話し合い苦いココアになりました

松江市 山根邦代

少々の不便気にせぬ戦中派

贅沢にならされ質素に戻れない

豊かさに馴れて明日が怖くなる

回り道ストレス捨てて栗拾い

暗い世に明るいニュースノーベル賞

松江市 松本知恵子

娘から習っていますイタリアン

ほととぎす咲いて初秋の咳一つ

風は秋舞茸料理でもてなされ

少年の心揺れるかバイク音

くるくると空回りした日の疲れ

島根県 武島ちよえ

球根を春へ充電させておく

お互いに添え木になっている生活

年輪が語る生き様くつきりと

しきたりが時の流れに埋もれる

病葉を無視するわけにはゆかぬ性

鳥取市 美智代

鳥取県 竹森 富久江

年金と二人三脚ケセラセラ

少しだけ妬心コスモスゆれている

影が付いて来るから生きる覚悟する

お荷物にならぬキップは持っている

白鳥とおしゃべりしてるパンの耳

鳥取県 澤 裕子

静かな夜風の音にも身構える

ふるさとで血圧下げる風に会う

ジェラシーをほどよく持つて仲が良い

隙間風弱気になると忍び込む

何気ない誤解が亀裂深くする

鳥取県 前坂 なお美

ひとひらの愛をもらって生き返る

本心が言えずいらしてしまふ

自慢ではないがとっても幸福だ

老いて子に叱られること多くなる

悪いことばかりはないと夢つなぐ

鳥取県 福西 茶子

神様を拝むかたちの猿を縫う(日吉神社お礼猿)

振り向けば花も地雷もあった道

身二つに分けて良妻演じきる

慶弔の帯の長さは変らない

オペ前夜亡母の写真を抱いて寝る

ふとこゝろに階段があり拠りどころ

きざはしの一段ずつにリハーサル

柿の実の落ちて月齢ふかくなり

育くんだ夢もはじけて今セピア

大波小波いまは深さを気にしない

鳥取県 岩崎 和子

生きている証拠に爪が伸びて来る

みみず腫れ母のよしよしい葉

子や孫にバトンつなげて生きている

風のなか十人十色生きている

太陽のにおいを丸くかけて寝る

檀原市 安土 理恵

とびきりの笑顔をあげる人がない

大きな山消して硯がかえらない

遊びぐせついたか爪がよくのびる

ときめいて花屋の前で止まる足

不器用な愛が伝わる痛いほど

奈良県 江波 正純

ためろうて言うたごめんて仲直り

外国語学び自由の羽根を持つ

物忘れ歳か血筋か問うている

小鳥とも秋をわけあう庭の柿

人間の勝手を笑う神仏

神戸市 山 口 光 久

慌てずに先ずは大きく深呼吸
足音のちがいを妻は聞き分ける
マイカーの乗車定員妻一人
疑いの眼で見ると月も欠け
星空に無限の夢がありそうな

神戸市 河 川 無 限

節くれた素手が一番温かい
乾杯の好きな男が抱くロマン
シヨパンひく男の夢にだまされる
ああ夫婦良くも悪しきも同じ枷
原色の海に沈んでゆく野望

尼崎市 河 津 正 治

現し世に疲れて今日を舞う落葉
はんなりと上手に使う京言葉
ヒナ壇で巧みに使う腹話術
言い勝って空虚なひとみ捨て場なく
老木の疲れも見せず花を添え

兵庫県 安 達 厚

携帯の無い生活に自負がある
塗らないで素顔で生きた七十年
自慢する業績もなく生きている
本当の笑いは最後にとっておく
敬老会まだ余生とは思わない

綾部市 藤 田 芳 郎

乗り切った酷暑へ五臓褒めてやる
キリトリ線を挟んで神と綱を引く
お見舞いの籠方便も盛り合わせ
休肝日どこへ行っても酒がある
右に倣って次の号令待っている

京都府 前 上 英 一

幾星霜許せぬ拉致に国揺れる
ノルマまだ残し冬の日暮れ急ぐ
亡父の歳越えていくつか謎が解け
出土した土器万葉へ遊ばせる
ひとときを昔に戻す祭笛

大阪市 尾 崎 黄 紅

空っぱの金庫に鍵は老いの意地
回れ右ばかりしている詩囊かな
お守りの勲章見せてホームレス
ほんとです黄色赤色恋の彩
八十の恋患いを笑えない

和泉市 横 山 捷 也

つい口が滑って迷路を抜け出せぬ
迷い聞く母の背中が暖かい
ライバルの餌食となった低姿勢
うやむやで済ませた返事ツケが来る
健やかに老いた出世はしないまま

泉佐野市 備 後 三代子

東大阪市 田 中 美弥子

生き甲斐はどこにもあると屋根の草

似合う人似合わない人もブーツ履く

暴走族静かな夜をかき回す

株相場下がりを夫の乱気流

茶道具と昔噺を秋の夜

大阪狭山市 羽田野 洋 介

登りつめたらそこには誰もいなかった

知らん顔しても見ている影法師

綴り込む余白が足りぬ定年後

喜怒哀楽素直な鏡騙せない

それぞれの立場が爆ぜる会議室

吹田市 木 村 無 禄

絵日記を今日も笑顔で締め括る

此処だけの話聞かない事にする

袴を脱いで地で行く老いの坂

戒名を親のためにと金はずむ

子が巣立ちお役御免の身を叩つ

富田林市 稲 川 恵 勇

風向きが読めぬ奴の有頂天

古代から覚めた土偶がしゃべり出し

胸がすぐ啖阿家内に譲ってる

思ひ出をドラマ仕立てで聞かされる

男気が火中の栗を拾わせる

許さねばもう許さねばならぬひと
巻き戻しできぬいのちよ川流る
翔んでます夫婦の糸のゆとりだけ
お互いに感謝し合つてフルムーン
月かげり遠い日の疵また疼く

藤井寺市 若 松 雅 枝

下心あつてビールを注いでいる

掃除機を掃除するのは夫の役

胃袋が一つで足りぬ栗御飯

雨の日は真つ赤な傘でケセラセラ

娘のバッグ一寸拝借デートの日

藤井寺市 西 村 栄 一

忘れるという特効薬を持っている

おでんぐつぐつチビリチビリとやってます

シャボン玉風と遊びに行つたまま

生きている証拠に夢をよく見てる

消しゴムを上手に使い生きている

大阪府 前 田 忠 子

亡き姉が思い出してと紫苑咲く

姫ざくろ五つ色づきおらが庭

子の頃の追憶語る秋夜なが

才媛も惚けてると聞く風便り

亀が勝つこともあるよと追いかける

横浜市 近藤道子

許し合ひだまし合つてはなぐさめる
走らねば老いの青春短いよ

沸点が欲しい情熱さめてくる
石を積み願いを込めて高く積み
気負わずに生きて一年短すぎ

横浜市 秋元和可

柳友よ何故急ぎ師の許へ(吉田裕峰さん)

異常なし急に食欲わいてくる
許す気になって今夜は眠れそう
縄文の土器に古代のロマン盛る
現世に埴輪の視線やさしすぎ

横浜市 川島良子

ああ言えばこう言う妻に育て上げ
桐タンス生まれ変わって一周忌
ドンマイと笑顔で交わすチームの輪
たかが風邪甘く見たのが運のつき
ハイポーズ彼が笑ってくれました

横浜市 巖田かず枝

あざらしが主役となっている平和
ほどほどに心配掛けてほけ防止
年金を貰わず死んでなるものか
期限切れ犬と私で食べている
定年後少し会話が増えました

藤沢市 妹尾安子

欠点も個性に変える芸術家
老人が言うほど良くはない話

頂上に行くほど我慢強い草
日に何度見ても飽きない富士の山
寅さんに似た人に会う村祭り

東京都 井上つよし

水彩の光と風が描くドラマ

うっとり雨に打たれて居る蛙
買う物は無かったはずが並ぶレジ
夕立を若さが走る水しぶき
予報通り雨音聞いて二度寝する

町田市 土田今日子

年一度夫婦の旅は海を越え(ニューギランド旅行始末記)
季節反転ニューギランドで見る桜
大自然人をゆったり包み込む
フィヨルドのセスナに命皆託し
狭いけどやはり日本が性に合い

野田市 那賀島雅子

草笛が捨てた記憶を呼びおこす
バスを待つ日傘にとまる蝶ひとつ
豊かさを浴びて人情紙となる
一杯の濃茶が席の和を保つ
なるようになるさと抱くひざ小僧

横浜市 荒井 広和

男にも出来るレンジの調理法

童心に返る熟女のクラス会

篤農の汗へ頭を垂れる稲

飲み込んだ愚痴を屋台の酒に吐き

横浜市 芦田 鈴美

プリンセススマイルお手振りも覚え

胎動に母の期待は天をつく

問診にひとつふたつの嘘を伏せ

五十年夫婦よく似た顔になり

泉佐野市 稲葉 洋

腕時計外し気ままの第一歩

無理せずにやろうと今日も古時計

貧富美醜いのち有つての事なのに

さて何から片付けようか十二月

奈良市 乾 春雄

ブランコにリストラの人ゆれている

赤い爪やがてオシメを替える指

消しゴムで消せない嘘が歩き出す

飄々と歩く夏やせ影法師

倉吉市 酒井 芙美子

父の背な堂々として暖かい

医療ミス命あずけるとこがない

原色を貴方の色に量かして

子沢山今はニュースになる時代

藤井寺市 俣野 登志子

娘にはまだまだ負けぬ背を伸ばす

デメリット聞いてさいふの紐締める

姿見を信じろなんて過酷です

スローライフなまけ心に拍車かけ

今治市 野村 清美

秋晴れに振るステックに参加賞

病む友に絵手紙のせる秋模様

検診に丸を貰った秋日和

七草を指折りながら日暮れ道

出雲市 加藤 スズコ

ほんやりと寝不足らしい昼の月

すれ違い神がいたずらして困る

木の葉舞う窓辺少女の物思い

暗い雨明るい傘で出かけよう

京都市 清水 英旺

仲秋の月はいくもりのない鏡

熱失せてはおずき色の西日落つ

愛犬の死でぽっかりと穴があく

アベマリア聴かせて愛犬を悼む

吹田市 須磨 活恵

ほんとうを言えば傷つく人のあり

倅せの中でゆつたり日が暮れる

もう居ない父に逢いたい秋の風

邪心抱く私を睨む達磨の目

宜野湾市 杉谷 一栄

守護靈か介^かけてくれる人に会う

エイサーのリズムに酔うて郷に入る

約束を忘れてないが筆不精

正常と検査結果に出た元氣

唐津市 岩崎 實

日帰りの首相重荷をかかえこみ

不審船拉致と驚く新事実

つれづれの記帳へ句う金木犀

映像を追ってなぐさむ旅登山

南国市 小原 圭二

流されて角をとられた河の石

衝動買いた本ばかりたまる棚

お接待うけた遍路のはずむ足

無信心でもないやされるへんろ旅

高知県 近森 功

列島をマツハで飛んだフルムーン

戦友会孫が付き添う車椅子

鬼の角かくして孫とかくれんぼ

たばこ断ち酒断ち命修理する

高知県 貞岡 佐紀子

七草を指折り数え母の秋

少し鬱ベッドの母が感じとる

旅に出る楽しみ今は封じ込め

孫娘パワー全開風に乗る

今治市 渡邊 伊津志

幸せは振り子の幅が伸びたこと

幸せを呼び込むための耳掃除

赦したら心の底が風いでいる

不整脈僕を氣遣う音で打つ

愛媛県 花岡 順子

バスツアーほどの人生だと思ふ

バラの刺包む一途なすすみ草

巣立つまで包んでいます栗のイガ

口下手が言うと言説力がある

愛媛県 宮本 末子

ささやかな平和に染まる赤い羽根

あわてまい何にでも有る裏表

手話という対話静かな笑顔よし

澄む風にいなごの孕む山日和

香川県 原 賢

多数決本音が見えぬまま終わる

晩酌が過ぎると涙もろくなる

遺言を言った術後も十五年

友が逝くたびごと渴求喉仏

香川県 伊勢 八重子

水墨の余白に心遊ばせる

きまぐれな風の一言胸を刺し

子を叱る心が女強くする

過去は皆置いてホームの人となり

香川県 松村輝夫
耐えさせるたびに子供は強くなる

おとなしい癌が怖くて腹を割る
病床に休めと天が病くれ
大の字で休むと病狼狽える

香川県 向山治延

年の暮れ財布の口がよく開く
諭吉さん居心地わるいか落着かず
御先祖が植えた山の木宝です
お守りは母がしつかりランドセル

府中市 馬場利子

汗にじむ山りんどうへ涼もらう
淋しさに浄土の孫へ電話する
一方通行返事の来ない糸電話
人間の言葉がわかる猫と住み

倉敷市 撰喜子

遺伝子は同じ孫にも賭けてみる
神様の前を素通りできぬ古稀
捻挫して歩く喜びかみしめる
一字一匹虫を殺した日の写経

岡山県 国米きくゑ

谷川は昔のままに流れてる
信じるという妙薬で打ち込める
ひとひらの紅葉うかべて酒を酌む
思い出のかけらを拾う秋ひと日

松江市 松浦登志子

そばの実も三角四角自己主張
重い口赤いワインに酔っている
有頂天私の足をすくう波
骨折が百名山を遠くする

出雲市 梅ミツエ

夕暮れに芋売りの声ひびき来る
夕日見て明日も無事と手を合わせ
青空に秋がきれいと言げてやる
秋桜がゆれて私に話しかけ

出雲市 川島和歌子

愛こめた菊満開の秋日和
秋晴に心機一転髪を切る
月の夜石焼芋のぬくい声
よく変わる山の天気と母のぐち

鳥根県 福岡博利

たわむれに石投げました池の月
立ち話孫の自慢もそれとなく
一合の酒おいしくてまだ死ぬ
散歩する二本の足に感謝する

鳥取県 藤山弘子

台風に泣いた農家の無抵抗
ブランドの古着で案山子立ちつくす
いよいよと世代交替決意する
リストラへひらきなおりの力出す

島根県 持田 多輝子

一粒の種も生命の温み抱く
句の宿で語り明かした亡友偲ぶ
母の愛鬼千匹の傷いやす
ひたすらに川柳という一兎追う

鳥取市 永原 昌 鼓

欲捨てた仲むつまじい雑魚でいる
振り向くな過去の栄光邪魔になる
無位無冠二人で軽い肩を抱く
赤い物身につけ弱気追い払う

鳥取市 山口 千代子

健康を宝に今日も生きのびる
傘寿過ぎ米寿へ夢の橋をかけ
夫は逝き夫婦揃った良さ判り
コスモスの可憐な姿秋の風

鳥取市 横田 春 名

秋日と同時に友と誘い合う
お年寄り亡きあと畠駐車場
正論を通して顔が歪み出す
ごくらくの余り風だと手を合わす

鳥取市 谷岡 清 子

赤く燃え誰恋うるのか彼岸花
日々好日小さな幸に感謝する
産地国たしかめて買うくせがつき
雑言を飲んでほは笑む妻になり

倉吉市 青砥 菊 枝

サンガラスはずして蒼い空ごらん
率直な友の言葉が有り難い
淡々と過去を明かして聞かされて
袖着て人目引きたい秋日和

鳥取県 平尾 菜 美

雪よりも白い誠にあこがれる
年季入り鍬が執念燃やしてる
三代代束ねる壺を買ってくる
座ってるだけで利いてる父の釘

鳥取県 池澤 大 鯨

つづら折り道の途中に泉あり
田舎道出会う人ごと会話する
父祖の道引き継ぐ人も少なくて
猪の通る道あり過疎の村

鳥取県 蔵本 悦 子

ときめけば古いエンジン動き出す
身勝手な人間を見て牛が泣く
近頃は金が人間見て笑う
美しい秋胃に溜めながら冬を待つ

鳥取県 山下 節 子

結果より努力の過程認めたい
ジェラシーを感じる私まだ若い
結論は予告どおりに出てこない
スランプを救ってくれた愛燦々

誰か来るようで野菊を摘んでくる
元氣でる嘘で友情深くなる
浮雲の行方にあつた老いの幸
いわし雲夫婦茶碗が物忘れ

和歌山市 土屋 起世子

海南市 堂上 泰子

高野山 日一日と紅さ増す
嘘つけぬ性格やはり親ゆずり
学び舎の寂しい姿廃校舎
大胆なスカイダイブは空の華

和歌山市 前岡 健三郎

和歌山県 森下 順子

五目並べ競つた友も思ひ出し
自転車も車も乗れず歩く足
選手には負けぬ応援父兄席
心こめ思ひ届けと写経筆

和歌山市 松尾 和香

和歌山県 辻内 次根

にぎりめし提げて乗り込む心意氣
話し合い糸口つかみ光見え
未来にも光見えると期待する
ばれました原発内部告発で

和歌山市 宮本 三喜夫

神戸市 田中 章子

若作り褒められはしゃぐ赤い服
恋歌を唄い青春呼び戻す
クラス会体験談が糧となる
ジーパン姿今日は着物で目を見張る

和歌山市 今 一歩

神戸市 木村 忠義

男の子冗舌にするEメール
我が心正して拝す秋の空
天秤座沈ませている己が自我
母慕う声透き通るアヴェ・マリア

脇役に慣れて一人で歩けない
お月様とゆつくり歩く帰り道
しがらみも絆もあつて生きられる
一人になつて明日へ耳を研いで置く

和歌山県 森下 順子

この今を上手く乗り切る深呼吸
苦瓜を刻む自由を有り難く
間がもてず花の香りを嗅いでいる
地域巡回バスは老人ばかり乗る

神戸市 田中 章子

せっかくの獲物はき出し鵜は凜と
彼岸花何ときれいな造型だ
不用意なひとこと胸に突きささる
幸せな退屈時間もて余し

神戸市 木村 忠義

花束を抱えるようにベビー抱く
スーパードで自分の妻を間違える
憂鬱はもう死語にして生きている
名画見るように夕焼け雲を見る

神戸市 木村 忠義

神戸市 伊勢田 毅

金の顔見て正論が揺れ動く
試着室暫く妻の城となる
年金の範囲で自由謳歌する
三面の隅ではのぼの記事に会う

尼崎市 軸 丸 勝 巳

反省をします社長座禅組む
十一桁覚え生まれた日を忘れ
盆栽も名月を見て背伸びする
湯豆腐の話題で帰る紅葉狩

尼崎市 林 昭 三

どちらかが出口になって子を叱る
呆け防止自炊はよいと言うけれど
銀行も親も一見元氣そう
すすきの穂霊園広告ふえて来る

川西市 井 本 清 山

幸せを感謝しながら医者通い
居酒屋で今日も充電する老後
年金の財布狙ってくるチラシ
健康の貯金のつもりウォーキング

三田市 石 原 歳 子

荒れた地をきれいにみせる泡立草
まだ子供思っていたがパパになり
果物を見れば絵心騒ぎ出す
爽やかな日和に鬱も癒えてくる

大阪市 岩 崎 公 誠

母の手は節くれ立った仕事の手
胸算用いつも自分が勝つもあり
善人は転んだ石でまた転ぶ
自我捨てた上塗りのない顔の皺

大阪市 三 浦 千 津 子

綺麗事ならべて嘘が多過ぎる
人生の最後の殻はひそと脱ぐ
夫婦だけの話があつて目の合図
自己暗示かけて踏み出す第二章

大阪市 伴 洋 子

美辞麗句並べられてる有頂天
慢心が敵に遅れを取っている
足掻くほど誤解は深くなつてゆく
やんわりが妙に苛立つ昨日今日

池田市 多 田 契 子

深皿に賑いを盛る幸せも
ときどきは吞める幸せ友と分け
少数派根性だけを砦とし
阿呆やなあ一言ですみ広い愛

和泉市 小 坂 凡 英

熊野古道耳の響きに騙される
由緒ある湯浅の味噌は径山寺
余所者も興そそられる秋祭り
酒飲めば飲むほど浮き世去り難し

柏原市 永 浜 加津子

ちよつとだけ意地悪したら罰あたる
指ぬきをはめたら女らしくなる
会ったのは初めてなのに一目惚れ
病床の空は広くて青すぎる

交野市 田 岡 九 好

うちのこと放っておいてボランティア
進歩なし諦め方がうまくなり
送り火とともに最後の歯が抜ける
音たてて変る時代を呼吸する

河内長野市 大 西 文 次

鯖読んでいたのがばれた敬老日
眺めよい墓地梯子するフルムーン
開いた口締まらぬ話多過ぎる
たわいない話にたわいない仲間

河内長野市 印 籐 智 子

がん告知されて優しき姉の顔
亡母と同じ姉も七十七で逝く
病んでみて夫の優しさ身に染みる
夢の中亡母の袂をつかんでる

河内長野市 木 太 久 正 一

一日を生きるに気合入る朝
今年また無事に生きたよ金木犀
亡き母を語れば尽きぬ秋夜長
同窓がまたひとり欠け十二月

岸和田市 亀 井 皎 月

七十路来る喜怒哀楽を伴として
明日を待つそんな楽しい今日もある
奥さんの手料理だけを食う男
故里の山懐に酔わされる

岸和田市 雪 本 珠 子

街灯のない裏道を月照らす
毎日の暮らしの中に猫が居る
現実と夢のギャップが大きすぎ
泣き疲れいつの間にやら眠ってる

堺市 荻 野 像 山

お笑いを見ていて涙拭いている
蚊一匹夜中に夫婦喧嘩させ
思い出を現に戻す妻の声
内助の功夫がつとめる退職後

吹田市 木 下 敏 子

逆らえぬ流れにうまく乗るめだか
老人力発揮しているボランティア
前向きに歩幅を合わす夫婦坂
妻の座を光らせて置く花生けて

吹田市 二 宮 栄 子

嫁入院俄かあちゃん楽でない
孫三人変りばんこの添寝する
児と唄う童の歌に亡母もいる
パパ似ママ似いずれもかわいい宝物

豊中市 藤井則彦

定年になって見上げたお月様
開業医愛想笑いも堂に入り
妻も行くやっぱり女性専用車
消防の鐘に我が家を振り返る

羽曳野市 福田悦子

踏みしめる落葉が綴る秋の詩
一枚のスカーフ冬の華になる
今日一日感謝感謝の仕舞風呂
暮れだけは聞いておきたい姑の知恵

羽曳野市 永田章司

知っていて知らぬ振りした亡父の愛
立飲みの酒で一日今日も了え
虫食いが証明してる露地野菜
正義感付き合いの輪を縮めてる

羽曳野市 森下一知

人間の幅を広げたボランティア
テリトリー護るキャッシュが切れてきた
注ぎ足した酒に緩んだ口封じ
ふる里に土と戦う母ひとり

羽曳野市 濱口フジ

過疎の村柿食い競争村おこし
ハイキング心なごます道祖神
道端の名もなき花に目がとまる
子や孫と食べるおにぎりうまいこと

東大阪市 今岡貞人

山の氣をもらって今日も生きのびる
水溜り何度も越えて今日がある
大物になるぞ大きな呱々の声
一番星空から心のぞいてる

藤井寺市 吉田喜代子

声高く内緒話が皆漏れる
工場の跡地に出来た知らぬ町
金魚まで一匹になり強くなり
秋寒に赤出し好きな亡父思う

箕面市 北川ヤギエ

紅葉の空気にそっと深呼吸
行き先を決めかねているウインカー
老いてこそ人生だよと慎太郎
握手して敵意だんだん解けてくる

八尾市 平川幸枝

メルヘンに遠いゲームの孫の部屋
メルヘンの切手が誘う青い鳥
覚えては忘れる花の実を結ぶ
夫という垣失いて妥協する

八尾市 與田明

ためらった運を逃がした影法師
二次会へ溜まる本音を捨てに行く
真実をかくし通して疼く胸
松茸は諦めている栗御飯

八尾市 松葉君江

三重県 南 忠道

初月給温い地酒が父泣かす
弁解の代わり仏によもぎ餅
無駄口をたたきポロリと出る本音
根回しが効いて黒から白になり

大阪府 藤井郁代

歳重ねなりたい孫のオアシスに
生きるなら女八十現役で
この歳で誕生祝い嬉しくて
忙しさの中の豊かさ心掛け

大阪府 東 文江

最後まで元気でいてね我が足よ
収穫のよろこび送る娘や孫に
いい国に生まれ美味しい水と米
夕食を嫁に注文してる幸

京都市 三宅満子

持ち時間減っていくのに無為徒食
観音さまのお顔にも慈悲の笑み
親子ゲンカ湯気立つ鍋に溶けていく
同窓会話題健康介護など

草津市 久保和友

老農や汗の野良着は白ばかり
旅なかば金魚の町に金魚売り
バイク停めあの道行かん天の川
秋草よあやとり橋の喫茶店

安心は家庭菜園のみとなる
緞帳が降りるが如く師が逝きぬ
みそ汁にめざしとしんこ懐かしい
物足って心貧しやどこの国

新潟県 高野不二

なおる癌だから医者から告げられる
人生を満足そうに呆けている
犬嫌い犬も見抜いていたらしい
子も孫も十一桁になっていた

横浜市 金森徳三

年金が気になる物価また下がり
何もない庭に咲いてる赤とんぼ
交替で息抜きしてる主婦と主夫
巨人勝ち貴が復活うまい酒

横浜市 長島亜希子

百歳の遊亀の彩に背を押され(小倉遊亀展)
闘病を笑い話にして聞かせ
後追いも考えた友翔んでいる
原発もダムもノーだが要る電気

横浜市 山梨雅子

十六夜の月確かめて雨戸閉め
文化祭孫に呼ばれて秋の服
どっと出た秋の味覚に老いの腕
フォスターを唄う集まりやすらぐ日

文化祭先ずは屋台の食文化

モーニング着ていた案山子盗まれる

同じ木の柿にも個性秘める味

節くれた母の指貫宝物

横浜市 布山 嘉信

横浜市 平 達也

ストレスが深く飲ませた二日酔

老妻の手抜き料理に馴らされる

打たれても出る杭になる自己主張

また一人逝って天国近くなる

横浜市 石原 三郎

低い鼻容赦をしない三面鏡

空いた席慌てぬ老いの自尊心

返品を笑顔で受ける心意気

金魚だけ儂を頼りにしてくれる

川崎市 大島 三四朗

たそがれてオートロックに立止まる

元上司買物カゴが照れ笑い

一匹の蚊も争いの倦怠期

車椅子もくせいの香に深呼吸

川崎市 浦野 昭志

床払いビールの味をかみしめる

童謡を唄って孫と今日は暮れ

幼児にじーと心を覗かれる

貸したこと太く書いてる覚え書

東京都 やまぐち 珠美

追いかけるまだ間にあうという誤解

うなずけば睫毛の影が邪魔になる

アザラシへ夏の童話が終わらない

振り向けば節くれだった掌の影絵

東京都 清原 悦子

諦めも肝心自問自答する

受け継いだ漬物石に味が出る

百円の品で料理の腕磨く

お互いに許せる内は脈がある

日高市 根岸 方子

一万歩体重減へふみ込めず

今だから開けるガンとの泣き笑い

鳥よりも一日遅れ柿も採る

今が旬テニス・カラオケつつがなし

秋田県 湊 修水

ひらがなの風に抱かれて咲くむくげ

夢にまで時代の波に乗りおくれ

用済んだころひよっこりと思ひ出し

花道はだまって老兵消える道

青森県 福士 トキ

名月に夜ナベの菊を捧げます

寺の門くぐれば釈迦となる心

浮きうきと夜道急かせる月下美人

只今の声にしつばがちぎれそう

堺市 河盛龍三

安心をくれるナースの顔眩し
結婚をするという子の爽やかさ
飲むたびに夢の膨らむ老夫婦

八尾市 中島春江

秋の空屋根師に笑顔戻り来る
なびくよに見せてコスモスしたたかに
主治医とは永い付きあい共に老い

兵庫県 黒崎美紗子

Eメールかわし笑顔が見えるよう
宵宮の籤引き明日の運だめし
屋太鼓に負けじ大声樽神輿

大阪市 池上清治

刻まれた業績の碑にある孤高
拉致された痛みを刻む深い皺
人生の黄金時代定年後

出雲市 荒木英子

朝露に豊かさ貰う散歩道
毎日を夫婦と繋ぐ茶の間の灯
秋風は風鈴の音悲しすぎ

鳥取市 西尾敬之介

難ありの品についつい買心
強いられて歩き疲れて八ッあたり
無人市後がえりして買う目玉

横浜市 豊田羊子

娘右私左手ショパン弾く
左手で朝食すんだ洗いのもの
麻痺の手を組んで合わせて上に上げ

和歌山市 橋爪佐一

妻の留守空気流れず窓を開け
ときめきの余生おまけと強く生き
病床の窓に花片季節知る

唐津市 坂本兵八郎

若者に負けじと秋をふくらます
ゆとりある教育ゆとりない夫婦
娘の意見口振りまでも妻に似る

鳥取県 竹信照彦

昨日にも明日にも今日の顔が出る
倒れても頭もたげる秋桜
趣味に凝り足腰痛いとも言えず

大阪府 高木道子

老いてなお娘を従えて母傘寿
萩ゆらす風と夕陽に背を押され
栗送りみかん贈らるお付き合い

枚方市 大昇隆広

仲間寄りグチを笑いに変えて酔う
意地の涙道頓堀の灯で乾く
ごった煮は異種を拒まず温い味

高知市 澤村 哲史

すり減ったスニーカーにある気概

疑問解く噴水の散歩道

止り木でじっくり訊けた正攻法

娘が嫁ぐそつと涙を拭いた朝

星回り悪い私で損ばかり

人目引く茶髪娘も根は無邪気

愛媛県 安野 案山子

草刈りへ討ち死にをする曼珠沙華

夕闇に稲穂も僕も包まれる

濁水に耐えたコスモス花盛り

宇部市 高山 清子

つい口がすべつてからの四面楚歌

あっさりと断つたあと寒い風

出来た嫁といわれて愚痴を飲み下し

府中市 岩 本 雅 代

打たせ湯にストレス散らしていい気分

薬の青田渡って栗拾う

霧の朝甘柿だけが浮かんでる

安来市 原 煩惱児

たくさんの妖怪変化飼い馴らす

鍼灸に頼り余生を慈しむ

コンバイン使い携帯掛けている

島根県 菅田 かつ子

コスモスを抱いて芒はうつとりと

娘の病治して下さい秋の天

若者に負けるものかとまた忘れ

バスツアーぞろぞろ歩く観光地

拉致事件闇のトンネルミステリー

海眺め心は遠く水平線

島根県 毛利 幸

瓢々と寺にたたずむ史の誉れ

彼岸をつなぐ墓前で交わす酒

世にカネがあつて苦勞のタネになる

島根県 岡田 信 恵

見舞い受け友の一言励まされ

松茸で秋の味覚を舌つつみ

曇り空月見だんごが月をまつ

島根県 河田 のり代

愛想良く孫にふるまい使いさす

愚痴不足捨て場さがしも楽でない

姿見に夜叉と如来の顔を見る

鳥取市 近藤 秋 星

皇太子ご夫妻この眼で確と見る (国分祭)

秋の夜や書物は僕の恋人だ

老人が主役だきようは敬老日

写メールに親ばかりを写される

倉吉市 大下 智子

懐がさみしい時はしゃべらない
虫の音にけんかのわけを忘れてる

倉吉市 前田 喜美子

見なかった事にしておく垣根ごし

朝まだき遠くに聞くや救急車
楽しんで園児送迎祖母の役

倉吉市 森川 あらた

真つすくな瞳に君だけを映す
お金より大切なものご存知か
病院へ行くとき力入れ過ぎる

米子市 小塩 智加恵

忌が明けししるし届けり亡友偲ぶ

望むのは生脳移植ほけが減る
敬老の日は長生きを自覚する

米子市 池尾 保子

天才の兄弟愛のゴツホ展

人間も牛も育ちで決められる
納得のいかぬ話に胃がさわぐ

鳥取県 吉田 弘子

年金暮しデフレの波によく馴染む

いつか飛ぶ長い助走路から学ぶ
さえずりが響いて静か秋の庭

父帰る門灯秋にホッと消え

鳥取県 松川 行男

始めから負けてはならぬ花婿よ
不況でも秋限定のツアー行く

鳥取県 平木 公子

悲しみものり越え米寿まで生きる

デカ過ぎる夢はだばらに見えてくる
改革の後の暮しが見えて来ぬ

鳥取県 山岡 久枝

青い空布団干すのが楽しくて

ふとところに旅の思い出描いてある
お人好し欲張ることを忘れてる

鳥取県 鈴木 一弘

原爆忌折り重なって千羽鶴

空腹に耐えた戦時の芋ばなし
恋しいがとても渡れぬ虹の橋

鳥取県 岡村 孝明

小田原のような議論で時が過ぎ

店主の顔見える店には客が増え
諦める口実にする時の運

鳥取県 河本 晴子

素面では好きでも握手さえ出来ぬ

肩凝りに脅されながら草むしり
出不精が自分で壁を厚くする

鳥取県 細田裕子

改革の文字が踊るよ新聞紙

価値観の違い握手で認め合う

幸福がこぼれ落ちそなハガキ来た

和歌山県 中村君枝

健やかが取柄と思う天こ盛り

凶太さで窮地何とか乗り越える

相性も大切という夫婦歴

和歌山県 村中悦男

思い込む気性迷路に入り込み

こだわりのひも動く度よくしまる

カケッコが運動会を盛りあげる

和歌山県 根田美子

腰痛みやつと自分の分を知る

寝耳に水国も慌てるノーベル賞

竿にビビッはじめての釣り鰺跳ねる

和歌山県 北村光男

芸なしで酒も飲まずに定年か

店しまい埃被った招き猫

酌ぐ酒に言ってはならぬ愚痴も出て

生駒市 小西稔

初恋の胸の痛みはどこへやら

子供から胸おどらせるかけくらべ

新婚の思い出つづるマイビデオ

尼崎市 桑原東園

インタビュール味も素っけもない返事

老いてなお旅の醍醐味断ち切れず

名月を見る人もなく過疎の村

三田市 辻開子

ガーデニングブームにのって競いあい

趣味の会終えてしばらく立話

さし芽して並んだ鉢に日々の愛

宝塚市 飯西ミサヲ

心うらまだまだ残る村まつり

今日よりも若い日はなし健忘症

セールスもおひまと見えてべんとう出し

姫路市 服部一典

鏡など見ないと言えぬ髭を剃る

初恋は先生だったと同窓会

舌足らず何時も女房補足する

兵庫県 岩本美緒子

タッチ筆炎えろと点す曼珠沙華

草を引く今日の足跡裏の庭

万葉の花へ偲ばす嫁菜菊

大阪市 中村忠敬

眼を見ればあなたの嘘はすぐ判る

食品界われもわれもと嘘をつく

想像を絶する苦悩拉致家族

大阪市 平井露芳

高槻市 執行稲子

耳鼻科先ず診察前の耳掃除
老人は七十五歳と国が決め
一願を聞いてもらいに太融寺

大阪市 寺井弘子

高槻市 安田忠子

積年の拉致問題に光見え
新米を噛みしめ今日の幸とする
エスカルゴよりもたこ焼口に合

門真市 矢阪英雄

高槻市 大崎侑子

口数が減ったけれども的絞る
赤い羽根はずしてくぐる焼鳥屋
松茸に栗が脇役過去的事

岸和田市 森元ふみよ

寝屋川市 岡本勲

財産が無いから姉妹仲が良い
忘れてた本の間のラブレター
ママゴトに家庭の躰見えかくれ

岸和田市 坂口英雄

寝屋川市 中川恵子

また来るようるさい奴が酔っている
監督のサイン首振りホームラン
竜馬なら日朝交渉どうするか

岸和田市 堤植代

羽曳野市 吉村久仁雄

うっかりと病も出来ぬ自己負担
創作の喜び我は生きて居り
あやまってすつきりしたい胸の内

一票の重みしかない僕である
改革が米百俵の底を割る
三方一両損丸損の庶民

老いの袖仄かに嬉しシャネルの香
枯れるまで熱い想いを抱いて生き
バーバリーをほとぼり覚めてから貰う
かな文字を一雫ずつ読む幼児
田沢湖の秋の香りに亡母しのぶ
旅の宿雨に打たれて地酒飲む

三面鏡腹六分目を誓わせる
鏡には心の動き映ってる
ほどほどの夫婦暮らしもほどほどに

取柄ない妻だがそばに居てほしい
静止した中に渦巻く潮がある
窮屈なので一人気ままの旅に出る

秋桜群れて華やぐ女子学生
留守電に残った声が澄ましてる
イヤリング揺れて静かな嘘をいい

枚方市 莊 司 弘 之

コスモスとワルツを踊る秋の風
地下鉄の窓を鏡に身だしなみ
ノーベル賞日本丸を励ましに

枚方市 小 川 良 吉

ぬか床がしあわせ覗きうま味だす
拉致むごく時と人間のみ込んだ
アメリカの嫌なまねするビールかけ

藤井寺市 喜 島 芳 江

貯める娘と遣いたい娘が二人居り
さりげない医師の言葉に胸さわぎ
辛い事一つ越えたらまた一つ

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

食卓へ愛のひと匙加減する
強面をやりわりさせた孫の声
三分の表舞台の裏事情

箕面市 寺 井 柳 童

汗くさいスーツ迎える子の笑顔
北新地旧友と出くわしUターン
人目さけ某日某所某料亭

八尾市 田 中 トシエ

幸福は嫉妬の風も連れて来る
よくもまあ飽きもしないでくじを買う
雲真紅 明日への力有難う

大阪府 小 栢 こずゑ

はんわかと胃袋通る酒の熱
峠越え萩や尾花が笑み迎え
晴れ上がり吸いこまれそう青い空

大阪府 桑 田 ゆきの

青空を両手で掬うダムの水
錆鮎が水底の砂掃いて行く
伝言板横文字で書くしたたかさ

大阪府 野 田 栄 呼

甘塩ではやはや育てた子が怖い
待ち時間なくて病院もの足りず
雨乞うて栗が小さく息をする

大阪府 畑 中 節 子

稲刈りに定時ないのよ野良仕事
老いの耳二度聞きをせず聞いたふり
お腹から湧き出すパワー米の飯

尾張旭市 三 浦 き ぬ

老人が先輩だったのは昔
自画自賛何が悪いと車内化粧
染みと皺一つ一つにある歴史

静岡市 中 西 雅

山寺の仏ほほえむジャズを聞く
夫婦雲肩よせ合って涙する
この大地吸わせてならぬ戦の血

森路郎物語

—童謡流行と新興川柳の台頭—

(12)

東野大八

路郎が著述業として本格的な文筆活動を開始したのは大正十一年の三十五歳である。山

雨楼メモに「童謡の森」出版、著述業として本式に手を染めることになった」とある。

「丁路さんが古本屋で見付けたという路郎生、大正十一年春秋ノ茶屋の遅日荘にてと序文にあります。それを今、書棚から出してみました。童謡の編集したものです」(霞乃書簡)

昭和四年の改造社刊『現代日本文学全集』現代日本詩集、篇で、北原白秋が「明治大

正詩史概観」のなかで次のように書いてゐる「まさしく時は大正に入つて新民謡の氣勢が昂つてきた。一つには大正七年七月童謡重

謡雑誌『赤い鳥』の創刊によつて、以来自覚の上に立つた新童謡の作家の簇出雲のごとく、その童謡の普及日に隆んにして、新時代の民謡もいよいよ確実性を帯びて来つ、蒐集、研究、論戦もまた詩壇のとなつた。この期において白秋の作最も多かった。野口雨情

も民謡に復活した。」

新童謡の大正中期後の興隆は、「学校に家庭にまたは音楽界に、ラジオにレコードに、今やとうとうとして浸潤しつつある。この運動に従つて既に先の件々が興隆した。

一、詩壇の諸家、有名なるも無名なるも問わず、たちまちこの新運動に共応し競いたち加つた。

一、新進童謡作家の輩出。『赤い鳥』以外の模倣雑誌の頻々たる刊行。

一、国定唱歌に対する童謡の代唱、これは児童自身の自由詩集の発行となつた。」

路郎の童謡関連の編集は、面識ある白秋やその関連者たちによるものと想像された。しかし、大正末期の新童謡の爆発の興隆よりも

「真実者には困惑と苦笑をさへ催さしむる俗悪な流行にまで堕ちた。芸術児童雑誌の乱行、童謡童曲集の乱発、和洋童謡踊りの試演、レコード、ラジオの吹込、放送の乱発、遂に

は無理解と乱擾と潜童謡との混雑と喧噪とが、真の正しい芸術童謡を猥りに冒瀆し、真の児童自由詩の向上を阻止しつつある。追従者と雷同者の誤つた模倣と利用とは、実に童心の思無邪境をして刻々に俗情の地獄たらしめつつあるのである。物極ればすべて乱れる。大正の童謡運動には早くも衰退の芽ざしが現れはじめた。衰頹すべきは衰頹させた方がいい、真の優れた童謡は、しかもなお本質の光輝を光輝するであらう」(北原白秋同上)

白秋も指摘する如く童謡は童心童謡の歌謡である。童謡もまた詩の中の一つの道であるわけで、路郎もこれを認め、欣然とその編集に熱中したのであることは想像に難くない。だが、路郎は大正日日新聞や、毎日新聞のマスコミ畑に身を置いたことによるジャーナリスト的感覚が、絶えず心証の底辺にわたかまっていたことは否定できない。童謡関連の編集に当る以前にも『商業の大日本』(大正八年)主幹として「時期を過ごし、『土団子』創刊号にもその編集後記に「変な雑誌で、愉快な雑誌で、売れる雑誌で広告の利く雑誌を出すことにした」と書いてゐる」(『川柳雑誌』の創刊号も「売れる雑誌」に徹底し、のちに新聞社並の「有保証紙」の権利さえ取得していることである。壮年期における数々の出版刊行物を手がけた実績もまた以上の著述者の感覚によるう。

余談だが、さきの『商業の大日本』主幹時代「同じ社に机を並べていた『工業の大日本』

主幹、風見卓が第一次近衛内閣の司法大臣になる。二むかし前の仲を思えば……と昭和十五年の頃の山雨楼メモにある。(同一の社が経済関連のシリーズ刊行物を数種発行しているらしい)

「路郎は大変放送を嫌っていました、朝のお茶の間の時間が何かで、放送もしていません。講談倶楽部の柳壇も担当していて、句稿を飛行機で送っています。またサンデー毎日が週刊朝日か、どちらかの懸賞川柳の選をしていたこともありまして。投句数は講談倶楽部の比ではありません。曲尺で一尺四方、厚さもそれに近いものでした。私が葵素女の匿名で結婚前夜」とかいう題で、サンデー毎日が週刊朝日へ書いたことがあります」(霞月書簡)

大正十一、二年の頃の山雨楼メモには、断片的に路郎の手になるつぎの記述がある。

「『黄傘』に『ホトトギス』六月号の俳句、川柳比較論について一短篇小説のエッセンスのようなきつい人間性のあふれた句を作りたい。人間味のハチ切れそうな句、川柳家は社会批評家である」

「尼崎市の図書館の楼上で、武藤山治氏に始めて会ったとき、新聞人のSが僕を武藤氏に紹介して川柳家だといった。ところが武藤氏は言下に『隠れた天才ですね』と僕にささやいた」

「傘百句会、鈴ン坊の旅情を慰め旁ら、一人百句会を蚊象居で催す。鈴ン坊、水府、蚊象、緑犬、佳汀、五葉、路郎で、路郎は三十

六句入選第一位を占む」

「『黄傘』へ『五葉足下』と題した松窓(斎藤)いわく『森の家は、新生を個人雑誌にした、ソレが本当である。川柳を革新しようと思えば道連れの多いのは障害が多い。往年の新傾向派鉄羅漢君は川柳に飽き、路郎君または考え中という形である』

この辺で川柳界にとつては、刮目すべき新興川柳の台頭について触れておかねばなるまい。

新興川柳といえは、たちどころに想起されるのが田中五呂八、森田一二の名である。新興川柳なる呼称の名付け親は五呂八で、その呼称に先だつのが新生川柳であった。一二が手がけた革新的な新生川柳誌『新生』からによる。時に大正十一年六月、この川柳史上、画期的な柳誌の発刊は、意外にも東京でも関西でもなく二二の住む名古屋市であったことだ。

「森田一二氏は、革新運動の極左傾(傾向主義)にある人で、『新生』という個人雑誌を創刊して、川柳家の自覚にむかつて大きな爆弾を投じた唯一の先駆精神に富んだ思想家であり、創作家であります。氏は『新生』の創刊号に

『神なるべからず。仏なるべからず。人間たることの息苦しさに耐え得ずして逃避する者は偶像をつくる。善悪美醜の交錯する処にのみ新しき川柳は生れる』

と述べ、あくまで現実生活を二元的に進めよ

うとする川柳家としての強烈な要求と理想をもつて時代の民衆と共に生きようとし、また時代の思想界へ何等かの交渉と反映も実現しようとする積極的態度です。

— 虫ケラと云われて紙幣を握られ — 一二

— 審判の不機嫌な日に刑をうけ —

— 十二時に重なる針の夜と昼 —

— 一本のマッチを持っている強さ —

こうした作品をじつと噛みしめていると、そこには現在の社会組織に対する不合理を指摘する苦悩と憤りが看取されましよう。これらは既成派の人たちには、異様な川柳でありますが、そこには人間としてのやみ難い要求から真実に生れたものであります」(木村半文

銭著 川柳の作り方研究 II 5・4 型)

一二の『新生』に刺激を受け、大正十二年二月には、期せずして二つの新興川柳誌が力強く誕生した。北海道から五呂八が『水原』を、大阪から川上日車、木村半文銭による『小唐』がそれである。

「田中五呂八氏は、柳誌『水原』を主宰する思想家であり、柳界唯一の評論家であり、その本質的批評は目下独歩の勢いであります。氏の主張は生命主義の立場から自己の哲学をより深く進めるに就いて川柳の形式に表現する事であります。氏の創作の多くは自己発掘の哲学的過程を踏んでいるのは当然でありまして、氏の作品は思索的でありますから、哲学の何かを解しない人々には、一寸理解することは難しいと思われまます。それ程に氏の

創作は一般詩壇と雁行して進んでいるのであります。

——鞘の奥深く言葉が死んでいる

五呂八

——地の底の仏眼の針が天をさし

〃

——円みさえ知れぬ心の壺を抱く

〃

——白露のまろさ二つが抱きつくし

〃

右の諸作に見るように、その内容はおそろしく思索的で、時間と空間を織り込む生命の本流は無限の深奥帯にまで突き進んでいます」(木村半文銭・同上)

一二五呂八は、人間の主観的深層表現を主張し、必然個性尊重の強烈さを表面化するため、その理論的革新詩論の行手には、もはや伝統川柳の存在さえ認めない態のものである。したがってその理論論争の凄じさは、伝統既成川柳を真向から粉碎する気魄に溢れ、一二五呂八すら互いに論詰しあい、あたかも第三者をして仇敵の間柄とすら成得せしめたほどである。

この一二五呂八の理論的革新派の屹立状態に対し、日車や半文銭の『小康』をはじめ白石維想様・井上信子らの『大正川柳』や、古屋夢村の『影像』など、岡田東魚の『影』村井潮三郎の『黎明』などは、伝統川柳からのいわば革新的進歩派の形で、若干迫力を欠くことになる。

半文銭は自著『川柳作法』で、『小康』の趣旨をつぎのように述べている。(要旨)

「革新川柳は、その川柳家の内部的要求によつて生れる短詩で、過去の一切の川柳とは

その立脚点を異にしている。既成川柳では自己のやみがたいものから生れ、川柳の生命はないが、新興川柳は自己のやみがたい衝動から生れるから、その表現されるものは自己の生活であり、自己の心の記録である。その作句動機や衝動は、過去の娯楽気分を全く抛棄しているの、一つは破壊的にみえる。

これは川柳を作る手技や形式を破壊しているが、帰するところは自己の川柳の建設である。同時に自己の生活の建設となるのは当然である」

日車・半文銭の『小康』における作品を参考までに掲げよう。

——芭蕉去つて一列白浪がしら

半文銭

——釈迦の左手に握る一切

〃

——机上より一尺低き民衆よ

〃

——天井へ壁へ心へ鳴る一時

日車

——群集の口みな動きを澄める空

〃

——夜具を敷くことがこの世の果に似つ

〃

このような新興川柳の台頭を織り込む川柳界の大きな変革に遭遇して、路郎は果してどうこの動きに反応を示したのであるうか。

「日車氏は半文銭と共に『小康』を出したが、私は日車の強請を断じしりぞけ、これには参加しなかった。(中略)

私は静かに考えた。柳界は麻の如く乱れて全く收拾するところを知らない。何人も川柳を愛しているにはちがいないが、何れも自派独尊であり、兄弟牆にせめぐの類である。こ

れではいけない。お互い川柳家同志が、いかに可なりとして褒めちぎったところで、一步社会へ出て見れば、まるで社会から川柳の存在が認められていないではないか。これではいけない。ここに眼をつけた私は日車氏らの強請懸望これつとめてくれた友情をも振り切つて、社会的な柳誌、社会を対象とする柳誌代行の計画をすすめたのであった。

これは私にとつても、全柳界にとつても一大異変であつた。旧同志は私が墮落したかの如く歎じて悲しんだ。金沢へ出掛けて私の意見を發表した時など、翌日同志が私の宿へ押しかけて来て「アレは本気で言つたのですか」と眼の色を変えて膝詰談判を食つたものである。

私は当時の柳誌が豆本式の範囲を出ないこと、兎糞の刊行であること、お互いの間で寄贈本位であること、内輪同志で摩擦ばかりしていること、これでは社会に認められる筈はないことなどを列挙して、私としては俳誌『ホトトギス』を目指して経営をやっていくつもりだ。『ホトトギス』が内容的にどんな地位に置かれていると言うことは別に、この誌の社会的存在価値は見脱すことができないと思つたからである。そこで新しく出す雑誌は、柳界を代表させる意味と、寸時も早く社会に知らせる便宜上、普遍的な『川柳雑誌』という名にしたのであることをつけ加えた」(『川柳雑誌』NO.三九号・雑誌泰選・S18・12・所載・吉岡四十年・麻生路郎)

俳風柳多留二四篇研究 48

大野 秀二・小栗 清吾
橋本 秀信・粕谷 長生
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

359 かつ込そしやう斗有るまつをか

大野 駆つ込み訴訟は「かけこみそしやう」の促音便。②急に駆け込むのを、訴訟に擬している。〔江戸語の辞典〕

鎌倉松が岡の東慶寺は駆け込み寺として有名。嫁が駆け込んで足掛け三年いと、離縁することができた。東慶寺は女の駆け込み訴訟ばかりである。

古川柳の好題であつたらしく松が岡に関する句は多い。

かけこみの娘もみに出るはなし鳥 三三七
清・佐藤 賛。

360 雨だれハ首を仕廻て通りぬけ

大野 「しまう」は、入れ納める。始末する。置くべき場所へ片付ける。

雨垂れを通り抜ける時は、首筋に雨が入らないように着物の襟で首をしつかり押さえて通り抜ける。

雨たれをかなしひ聲でくゞる也 一〇一七
雨たれに切られたやうな聲を出し 二七三
雨だれに猪首ばかりハせわがなし 四六七

清・佐藤 賛。

361 とゞめをハ余人にさせるさじ加げん

大野 患者が死にそうになった。自分が治療しているときに死なれてはまずいので、この患者は私の手に負えないなどと言って、藪医

者に押し付けてしまふ。自分も藪医者だが、死ぬところはさらにへばの藪医者にまかす。

藪いしやの余人へといふかるい事 二三四
半ごろしにしよ人へとやぶいにけ

余人へといふ場をいわずもりころし

明四礼 9

清 賛。流行医者の処世。あぶなくなると藪医に渡す。

佐藤 賛。

362 真向にかざし木具屋ハへいで居る

大野 木具屋は、木具の製造を職業としている人。また、それを売る人。

木具屋の仕事の生態を詠んだ句で、薄く削る板を光にかざし、これからどの部分を削つたらよいかを見てから削っている。

風窓を木具屋へ頼む箱番家 一一四二
知恵の輪のやふナを木具屋軒へ干す 二二九三

橋本 木具＝桧の白木で作つた器物の総称〔江戸語の辞典〕とある。そうするとこの

「剥ぐ」は削るでなく「はがす」「そぎ取る」が適ではあるまいか。つまり桧材の材料の木目をよく見て、きれいに剥ぎ（割取る）取れ

る処を選んで仕事する情景と解する。

山田 橋本兄もそのつもりかも知れませんが、本句は、木具屋が、三方・四方や折敷などを作る材料の松の片木を作っている景で、例句Bは、半製品の器を軒下にかけている情景でしょう。

清・佐藤 同右。

363 三河から暮のきげんを来て直し

大野 三河万歳の句。年末の掛け取りの攻防などいやなことがあったが、年が改まり正月になると、三河万歳が来て、目出度い祝いを述べてまわる。才蔵が卑猥なことを言つて笑わせることも多かった。

江戸中を笑わせに来る三河者 三七二

三河から古風なしやれをい、に来る

一八16

清・佐藤 賛。

364 やんごとの有つら斗売れ残り

大野 張見せの売れ残りの句。やんごとない人とか、やんごとない顔といえはいかにも高貴な感じを与えるが、その反対のやんごとのある面と言えば、美しくない顔で売れ残るの

も尤もといえる面である。情け容赦なく川柳子は鋭く詠んでいる。

目あき千人しやもつらほうれのこり

たてくふむしもなく毎晩売れ残り 一七20
てんがんのうるはしからぬうれ残り 二三18

橋本 賛。素見の観察句。

山田 賛。実景句。

三三7

清 同。

佐藤 同。言葉のあやだけの句。

365 一箱を息子段々軽くする

大野 一箱は、(一つの木箱に詰めるところから)江戸時代、金十両、または銀十貫目。

どら息子が遊里での遊びのために、家の千両箱に手を付けた。遊びはだんだんエスカレートし、千両箱も軽くなってしまった。

一ト箱をむす子拾度とに盗出し 八17

駕かきと一箱明々たはなしする 一〇15

沓ト箱をくしかきぬきにむす子する

安六満1

橋本 賛。(親が苦労して作った財産を)が

言外にある。

清・佐藤 賛。

366 いんぎんにいつて尺八ほどござす

大野 敵討ちの虚無僧の句。虚無僧が尺八を持って敵を探するために、門付けとして門口に立ったが、家人は丁寧にことわりの「御無用」と言つて、金品を施すことをしなかった。尺八を吹く虚無僧に対して施さなかったと解した。

めぐり逢ふ迄は手の内受る也 一四25

御無用といふて尺八にぎらせる 四22

小栗 礎稿のようなことかと思うが、どうも面白くない。忠臣蔵九段目の句とは解せぬか。橋本 礎賛。何故なら、忠臣蔵九段目の本蔵は「南無阿弥陀仏と唱ふる中より御無用と、声かけられて……」なので、とても「いんぎん」という雰囲気ではない。

御無用で笥と刀の手がゆるみ 六二10

伊吹 敵討ちに限らないと思う。他の物乞い、門付けの類は「お断り」でいいが、虚無僧は武士以外の入宗が許されない普化宗であるから、「御無用」と言っているというのでしよう。

清 伊吹説でよいのではないか。

佐藤 同右。

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 福井 桂香

絵手紙に銀杏はらはら遊ばせて
膨らませ縮めて真夜中を悩む

和歌山市 川上 大輪

生を問い死を問い何もわからない
不意にペン止まり謀叛を企てる

弘前市 斉藤 昴

イーハトーブで銀河と握手したくなる
墓地までの坂でゆらゆら舞う蜻蛉

松江市 川本 畔

今が好きコスモス含み笑いする
ほろほろになつて岬にきてしまふ

鳥取市 徳田ひろこ

ジャンケンに負けても豆の蔓のびる
生真面目なくせに喜劇が大好きだ

鳥取県 西沖 彰雄

コンマ以下捨てて気楽に生きている
飄筆の中からわつと出てやるか

西宮市 門谷たず子

錯覚を重ねて綴る私小説
敗者復活いつか笑える日もあろう

鳥取県 ささきやえ

鏡の中に残されている道しるべ
ふすま張り替え三十年は夢の夢

青森県 西谷 大吾

恐山 涙が涸れるまで語る
恐山 いのちいとしと虫が鳴く

鳥取県 吉田孔美子

待ちましよう心映した虹が出る

米子市 白根 ふみ
おぼろな中の肩ぐるま乳母ぐるま

八尾市 村上ミツ子
ちぎれるほど尻尾を振ってみたいのに

弘前市 高橋 岳水
散り際は風の情けに溺れたし

弘前市 宮崎ヒサ子
踏切りの向こうも同じ雨模様

松原市 小池しげお
行列のうしろはみんなお人好し

藤井寺市 高田美代子
男という型にはまってゆく背広

愛媛県 花岡 順子
塩味の効いた小言を思い出す

和歌山県 中後 清史
いさかいは止そうゴールが見えて来た

倉敷市 井上 富子
うかうかと終着駅に来てしまい

弘前市 一戸 ツネ
天地左右ただ中程のしあわせで

大阪市 前 たもつ
目印のつもりの杭に縛られる

唐津市 田口 虹汀
怒らない踏まれた足に礼申す

倉吉市 山中 康子
秋の陽のつるべ落しにだまされる

岡山県 大石あすなろ
下手な鉄砲当たる喜劇もたまにある

八尾市 宮崎シマ子
歩きます有情無情を道連れに

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 桜井 千秀

逆転劇信じて明日の絵を描こう

曇りガラスの向こうの夢は見ぬように
煽らないで乗り易い質です私

東京都 やまぐち珠美

曼珠沙華 炎の青を内にする

喉越しのいい言葉だけ注いでおく

和歌山市 西山 幸

亡父母へ耳傾ける日よ 秋よ
玉手箱には一本の鞭入れておく

弘前市 高瀬 霜石

少年に戻ればシヨパンほろ苦し
大根をふーふー吹いて生きのびる

和歌山市 木本 朱夏

栗剥いて夜の長さを感じるなり
ひまわりを襲う白昼の睡魔

富田林市 池 森子

散り際の残日録よわがエロス
秋深むそこが私の現在地

八尾市 高杉 千歩
サブリメントに負けぬ薬を飲まされる

アルゼンチン

この辺で認められたい豆のつる

富田林市

首筋が痛む 噂に火がついた

中井 アキ

雑魚なりに錯覚抱いて生きている

和歌山市

下駄箱の一番奥に亡父の靴

今治市

月原 宵明

川はキラキラ私の微罪かくまいぬ

吹田市

山本希久子

表札の手前悪人にはなれず

香川県

木村あきら

偶然だ君も泣き虫だったのか

藤井寺市

太田扶美代

ためらいがないとは言えぬ胸の奥

和歌山市

吉村さち子

一日も持たない私の黙秘権

河内長野市

水谷 正子

片思い忘れる旅の文庫本

箕面市

北川ヤギエ

余所で見る絵本がとももおもしろい

米子市

鷺見 正子

女には少うし甘いかも知れん

愛媛県

中居 善信

ゆつくりと慣らされ妻の檻の中

唐津市

坂本兵八郎

アソビが足りぬものさしを持っている

松原市

玉置 重人

奈良市 米田 恭昌
訥弁の唖呵どうにもしまらない

羽曳野市

すべてよしきれいな水の湧く所

八尾市

八十路までとうとう内緒持ってきた

倉吉市

不器用な手だが不思議に温かい

弘前市

線香の匂いの滲みた菓子を食べ

尼崎市

追伸を書いたあたりで悔いている

尼崎市

書き出しが決るとベンがよく走る

泉佐野市

今日の日に追われ追われて十二月

羽曳野市

老夫婦バントマイムが板に付き

鳥取県

建て前の話はかりで冷めてくる

和歌山市

ブライドは写楽の鼻に満ちあふれ

池田市

仲直り微妙な位置で向かい合う

吹田市

政治家になるしか知恵のいい男

和歌山市

軍歌まだ全部覚えていた怖さ

寝屋川市

未練には触れぬ手紙が長くなる

堀江 光子

和歌山県 辻内 次根
人と会う度に私の多汗症

海南市

シャンソンが聞こえて来そう枯葉色

米子市

神の目線に太字で書いた絵馬をつる

岸和田市

追い越していった我が子が頼もしい

鳥取市

駕籠に揺れながら花野に行くもよい

弘前市

絵の中に生きてる石の笑み深い

吹田市

ジングルベルの狂騒きつとレクイエム

和泉市

バックカスに賜る新酒くみ交わす

美祿市

封印をほどけば夢がほとばしり

唐津市

有機だといふからきつと嘘だらう

黒石市

姿見に自問自答する脂肪

寝屋川市

もうどうにでもなれという株価値

鳥取市

死んでも死んでも金魚買つて来る

八尾市

幸か不幸か後ろ指には気付かない

岡山県

意に添わぬ風もあろうに風車

山本 玉恵

和歌山市 松原 寿子

蓋つきの器へ想い伏せておく

横山 捷也

肺腑におちぬ話 座布団ひとすさり

丹後屋 肇

悔しさの涙を落す夜鳴きそば

太田 昭

切り取線俺の運命左右する

和歌山市 上地登美代

その人の器が見える崖つづち

板東 倫子

どっこいしょ今日も生きてる泣きながら

大坪 天涯

過去捨てて明日もついでに捨てようか

田鶴

裏目ばかりでる日本で死にきれぬ

中 宗明

振り向くな期待裏切ることとなる

秋元 和可

菜園にストレス埋める穴を掘る

矢内寿恵子

未知数へ背伸び足元狂いだす

板垣 夢酔

陸海空 老いて戦時の夢ばかり

井上柳五郎

抜擢に仲間はずれの風が吹く

水笑

臆せずに意見が言えるピカソ展

和重

どうしても良い話 補聴器外しとく

横浜市 芦田 鈴美

けだるさよ人生丸くなり過ぎた

中山 雅城

りんごの実自然落下もある因果

岡本 花匠

師走風 反骨男仕立て上げ

近藤 道子

深呼吸してもめぐりの輪に入る

塩路よしみ

男には女の知らぬ顔がある

仁部 四郎

かかりつけの医者に小説貸してやる

三宅 保州

ベケじるし付いてる僕の誕生日

浦野 昭志

褒められて単細胞が力出す

乾 春雄

拝観料詫びてるような仏の目

大橋 政良

善人というレッテルが剥げません

恵子

世渡りの下手な男と終列車

求芽

背の高い方が深ぶかお辞儀する

北村 賢子

飯茶碗一つに家が広すぎる

川崎ひかり

五線譜からはみ出る父の祝い唄

正雄

偏差値を刻み込まれる塾かばん

大阪市 三浦千津子

四面楚歌 夢盛る皿が干涸びる

播本 充子

犯人はAか真面目でおとなしい

羽田野洋介

先生の眉が気になる再検査

川原 章久

爺婆の暮らしに合わせフルコース

服部 一典

わが人生馬鹿正直と知った喜寿

小野 克枝

言い訳を聞く晩酌があたたかい

西岡 洛酔

一桁の昭和律儀の字を重ね

谷口 義男

裏側を何も知らない方が良い

志田 千代

ポチとミケのご臨終には立ち会えた

神夏磯典子

故郷まで乗せて下さい白い雲

淡路ゆり子

一本だけ樞の釘がおさまらぬ

林 瑞枝

語り部の戦の海で散るいのち

牧渕富喜子

夕焼けを連れて白寿の姑に会おう

吉岡 修

声変わりそろそろ夢を語りだす

津川 紫見

赤とんぼ空の高さが気にいらず

国民文化祭夢フェスタとっとり2002(10月26日)

第17回国民文化祭川柳大会は鳥取県鹿野町立鹿野小学校体育館で開催された。事前投句者は5231名、当日投句者は650名。大会各賞は次のとおり。(太字は川柳塔社同人)

◎一般の部

文部科学大臣奨励賞

ふる里に戻る敗北感はない

東京都

小金沢綏子

国民文化祭実行委員会会長賞

反抗期子の羽ばたきだなと思う

三重県

松田 順久

鳥取県知事賞

身の丈の答えをくれる里の風

神奈川県

後藤 洋子

国民文化祭鳥取県実行委員会会長賞

第一ヴァイオリンを弾くてっぺんの柿一つ

鳥取県

八木 千代

鳥取県教育委員会教育長賞

泣きなさい輝くときがきつとくる

鳥取県

大角 幸代

鹿野町長賞

素粒子にカミオカンデの水静か

神奈川県

中村 五豆

国民文化祭鹿野町実行委員会会長賞

現住所人間砂漠と書いておく

石川県

吉本 君枝

鹿野町教育委員会教育長賞

沈む陽が争いはもう止せという

東京都

おかの蓉子

社団法人全日本川柳協会会長賞

九官鳥孫の名前を呼び捨て

兵庫県

山本 芳男

鳥取県川柳作家協会会長賞

望郷へどつと崩れる砂の塔

鳥根県

川本 畔

◎小・中・高生の部

文部科学大臣奨励賞

なきながらといたもんだいわずれない

群馬県

東崎 真凜

国民文化祭実行委員会会長賞

団結の出来ぬ悲しい砂の性

熊本県

金栗 瑠美

鳥取県知事賞

ふるさととはきれいな星の生産地

岩手県

田村 守

国民文化祭鳥取県実行委員会会長賞

砂遊びやろうよ砂が呼んでいる

鳥取県

植田真由美

鳥取県教育委員会教育長賞

盲導犬君から学ぶ思いやり

滋賀県

政明佳奈未

鹿野町長賞

鳥取の砂丘の砂は人が好き

鳥取県

岩竹 直美

国民文化祭鹿野町実行委員会会長賞

ふるさとの母に捧げるホームラン

大阪府

池口 航介

鹿野町教育委員会教育長賞

ふるさとのうたきこえるよ森のかげ

愛媛県

山崎 拓馬

社団法人全日本川柳協会会長賞

学ぶ事会った人数にも勝る

群馬県

堀越 奈弓

鳥取県川柳作家協会会長賞

砂時計砂はまじめに落ちていく

鳥取県

岡田 大輔

首香のむ

政岡日枝子選

群羊の中のわたしは眉を上げ
売に残した夢を時々思い出す
遠い日をツンとくすぐる溶き辛子
信号の黄のあたりから出られない
しなやかな五感でいたい森の中
雑巾のように疲れて床につく
十指から砂のこぼれる夕映えよ
いちにちの女結びをたしかめる
秋の白さよ残り時間をひそと生き
秋の果て何度掟を破ったか
秋まつり土に還ってゆく一会
価値観の違う器が採めている
許す気になればなんでもない隙間
自身との対話無言の日が続く
人生ゲーム二者択一と言う掟
鳩時計の捻子は家族で温める
ひとりだとしめじみ思う冬の鍋
九十九折抜けて光を手の中に
尋ねては問うては対話する鏡

和歌山市	福井	桂香
藤井寺市	高田美代子	
和歌山市	楠見 章子	
富田林市	中井 アキ	
鳥取市	徳田ひろこ	
米子市	青戸 田鶴	
米子市	林 瑞枝	
和歌山市	西山 幸	
吹田市	山本希久子	
富田林市	池 森子	
米子市	白根 ふみ	
和歌山市	上地登美代	
鳥取県	石谷美恵子	
寝屋川市	堀江 光子	
尼崎市	長浜 澄子	
米子市	野坂 なみ	
八尾市	高杉 千歩	
岡山県	矢内寿恵子	
鳥取県	岩崎みさ江	

筋一本とおす加減が掴めない
そつのない人の隣で阿呆になり
指切りの小指ほんのりあたたか
流星の銀の尾に乗る青い毯
天界と私をつなぐ星のかず
そろそろと枯野へ向かう影法師
坂の途中でふり向くくせを引きずって
砂を踏む子供はしつかり自立する
拉致の字が大きく小さく泣いている
水琴窟あの世の音がするような
防災袋もう置き場所を忘れてる
ガラクタか宝か迷う古い皿
胸奥に溜めた愚かがまたよぎる
秋の風一たす一をまたこわす
気位の高い器で反り返る
躓いた痛みを忘れかけている
時々涙の芯を確かめる
海に立つ両手広げてみたくなる
買い被られたわたしの役が重すぎる
十一桁私死んだら死ぬのかな
昨日より明るい顔で目を覚ます
信すれば水緩やかに流れ出す
輪の中で上品振って服がない
コスモスに影ろう亡母の櫛がけ
むらさきの風が誘った遍路笠

和歌山市	松原 寿子
寝屋川市	太田とし子
八尾市	生嶋ますみ
和歌山市	古久保和子
米子市	中井 ゆき
和歌山市	山根めぐみ
岡山県	山本 玉恵
岡山県	福原 悦子
松江市	川本 畔
和歌山県	森下 順子
堺市	志田 千代
鳥取県	西原 艶子
鳥取県	土橋 睦子
鳥取県	さへきやえ
和歌山市	田中 みね
鳥取市	福田 登美
米子市	鷺見 正子
芦屋市	黒田 能子
大阪府	米澤 俣子
八尾市	宮崎シマ子
和歌山市	吉村さち子
弘前市	宮崎はサ子
倉吉市	山中 康子
横浜市	保田 絹子
鳥取市	録沢 風花

姑という立場でまるとい絵が描ける
 時々自分を叱っておかないと
 太陽が昇れば光るものばかり
 笠智衆そこにいるよな麦藁帽
 メルヘンの森にも不況風は吹く
 太陽に誘われ光り出す林檎
 残り時間追いたてられる秋祭り
 わたくしの円を広げるミニバイク
 去年より少し太ってきた命
 円周率の計算今も覚えてる
 おばあちゃんなんて呼ばれて浮かれてる
 ややこしいが心がなごむ孫が居る
 こんな世にしたい元氣なクレヨン画
 座禪積む心亡ぼさないように
 洗濯機消えない汚れ増えていく
 本当の悲しみに会う夢の中
 憧れも小さくなつていく余生
 晩学の道から貰う明日の絵
 水仕事指の先から秋深む
 夕焼けに会うとしみじみ里こころ
 暮まいり無限の愛にひざまずく
 くるくると長い物にはよう巻かれ
 空冴えて今日をねぎらう月昇る
 装った元氣カメラが空回り
 腕時計二十歳に買つて五十年

西宮市 門谷たす子
 米子市 門脇 昂子
 西宮市 牧瀬富喜子
 八尾市 中島 春江
 八尾市 村上ミツ子
 和歌山市 武本 碧
 箕面市 出口セツ子
 羽曳野市 徳山みつこ
 藤井寺市 太田扶美代
 倉吉市 米田 幸子
 横浜市 芦田 鈴美
 東大阪市 北村 賢子
 寝屋川市 平松かすみ
 鳥取県 西川 和子
 倉敷市 撰 喜子
 和歌山市 居谷真理子
 松尾 和香
 大阪府 三浦千津子
 香川県 川崎ひかり
 香芝市 大内 朝子
 八尾市 井尻 民
 出雲市 石倉美佐子
 大阪府 小栢こずえ
 生駒市 飛水ふりこ
 交野市 山川日出子

グラスカチリ嬉しいことのある宴
 菊香る風は亡母なり忌の巡り
 デイケアのバスに最敬礼をする
 腹立ちを宥めてくれるハーブティ
 呼ばないで浮世離れの夢の中
 人生に色いろあつて試される
 それからを聞かぬ細くて長い道
 虚と実の狭間へパンを走らせる
 煮崩れた愛一瞬に憎となり
 面舵をしつかり握る母の船
 憎いほどうまい料理のテクニク
 あくせくとしてもせんでもこの命
 わだかまり晴れて一献月の宴
 献立をほめられ妻は上機嫌
 円満の風にひそんでいる嵐
 八十路坂アクセサリーは洒落た杖

桂香さんの句―早々と羊の句が出て来ました。人間は理性と創造
 力を持つていふと言われますが、矢張り肩を上げねば、群の中
 は潰されるといふ事でしょう。美代子さんの句―満ち足りた日の
 連続に、ふと振り返ると、果せなかつたいくつの夢を懐かしく思
 い出す。今の伴せがひししと伝わって来る句だと思ひます。章子
 さんの句―メランコリーの世界に引き込まれていくような句です。
 ツンとくすぐるという何とも言えない表現に哀愁が漂つていて手か
 ら離せませんでした。アキさんの句―日頃は信号機の赤青黄を意識
 しながら無意識に通過しているのがあるが、どちら側にも素早く対
 応出来る黄を掴んだところが作者の句仕立ての上手な処でしょう。
 人の心の中にも、黄色の中にも悪魔は棲んでいるようですよ。

和歌山市 土屋起世子
 弘前市 一戸 ツネ
 東京都 播本 充子
 高知市 小川てるみ
 東大阪市 田中美弥子
 河内長野市 植村 喜代
 倉敷市 小野 克枝
 奈良県 渡辺 富子
 堺市 西村りつこ
 大阪府 津村志華子
 倉敷市 井上 富子
 大阪市 板東 倫子
 寝屋川市 坂上 高栄
 横浜市 山梨 雅子
 東京都 やまぐち珠美
 大阪市 本間満津子

駅

小糸 昭子選



街冷えて貨車の列なし郷里の駅
上野駅多国籍語であふれてる
少年の心を抱いて駅で待つ
ローカル線学生列車で生き残る
手づくりのさぶとん温い無人駅
見送りも無くて左遷の駅に佇つ
終着の駅では言おうアリガトウ
職のある幸せ駅へ急ぐ足
終着の駅まで愛を信じ切る
ストレスが溜まつた駅は通過する
乗り換えの駅でいい案顔を出す
気味悪い深夜の駅に月と僕
ストープへ話も弾む北の駅
下積みへ大人になって戻る駅
駅長という名で駅を掃除する
この駅が好きで嫁いで来たと言う
おふくろの味駅裏の縄のれん
傷心を癒してくれる故里の駅
野の花を挿してのどかな里の駅
開通式祝った故郷の無人駅
窓ごしのキスで別れた終電車
行き止まりの駅であしたを考える

三代子 章子 充子 実 みつこ 輝夫 勝規 重人 ひかる 康子 千春 とし子 一風 朝子 不二 伊津志 柳弘 庸佑 志華子 高栄 修 美代子

アベックが覗き込んでる時間表
早朝の駅へあくびも急いでる
道の駅四季の山菜山積み
駅裏の路地を抜けたら僕の家
駅員が優しくなった車椅子
臨終の知らせ乗継駅で聞く
ごちゃまぜの駅の臭いが消えている
感慨もなく定年の駅降りる
栄転も左遷のときも同じ駅
左遷地へ発車のベルがせき立てる
海が見え駅弁の箸休ませる
駅までは送り迎えをしてあげる
駅前がお茶の間に来る英会話
こだわりはよそう今日から始発駅
仮面一つ置き去りにする無人駅
佳 定年日駅のゲートは明日へ開く
夕食に駅弁を買うひとりもの
終電を送り駅長伸び一つ
眼裏にふるさと捨てた駅がある
里の駅 今もやさしい風が待つ
人 一駅を歩くしゅぶんではないぞ
地 終着駅明日は希望の始発駅
天 停車する駅は無かった父の貨車
軸 コスモスが上りになびく無人駅

東雲 ミツネ ツネ 妻 子 シマ子 保州 孝雄 雄々 雄 正子 洞庵 綏子 紫見 セツ子 あやめ 倫子 鉄治 たもつ 典子 千代 ひかり 西谷 大吾

禁煙のつもりで午後は昼寝する
切り干しをふくらと煮る雨の午後
午後三時から銀行忙しい
難民のキャンプへ午後の陽はまとも
稲を刈り山近くなる秋の午後
妻の顔脱いで冒険してる午後
午後五時のベルに首輪をはずされる
何となく午後から元氣出る私
感情線ばかり纏れて秋の午後
午後五時を過ぎて元氣の出る不思議
運動会午後から少しだれてくる
昼からは帰ってよいという不況
午後からは頑張りますとよく食べる
また傘を忘れた午後の雨あがり
午後の部は出番がなくて寝とるだけ
爽やかに午後の色とく絵具皿
午後からのパート朝寝をしたいから
菊咲いて午後の日差しがやわらかい
いつまでも歩きたいからあるく午後
根回しが出来てすんなり決まる午後
鈍行の旅路は午後もおつづく
罪のない話で午後のティータイム

清山 みつこ 宏章 さち子 節子 セツ子 雄々 一壺 紫見 彰雄 美代子 保州 充子 正剣 次男 敏子 一風 蛭子 綏子 可住 天涯 庸佑

午後

蘭田 猿杵選



午後の妻パートのレジで店の顔
明日さる着物広げてみてる午後
生あくびこらえる午後の会議室
曼珠沙華午後の陽射しによく炎える
町内の特種を聞く午後のお茶
午後一時もう夕刊を売っている
恋文を繰返し読む雨の午後
午後には寝午後起きて来る夏休み
午後からは行方不明になる男
ひと仕事終えて自由に跳べる午後
午後から準備するいくさ場の飲み屋
昼下がりの情事見ていたのは金魚
ふる里へ流れる雲を見てる午後
朝咲いた花が無口に閉じる午後
昼ごはん抜いてゆきますディナーショー

佳

午後の風詩を探している散歩
昼下がりが逢えば何かが起こりそう
職求め今日も悄然落つ西日
本店へ叱られに行く午後のバス
自治会費午後だともまだくれず

人

人生の午後から咲かす花もある

じよんからのチャイム村中昼にする

地

三億のくじ懐に白昼夢

天

松一本植木屋午後によつと下り

遠野 たず子
尚士 一粋
あずま 度

鉄治 哲男
あずき 絹子
俊子 恭昌
朝子 悦男
隆盛

伊津志 圭一郎
三代子 しげお
珠笑

昌鼓

慕情

稲川 恵勇

反 省

塔 寛子選



反省とお詫びの記事が溢れてる
反省しても後悔をしないよう
反省のたびに床屋へ行くはめに
反省のタクトを振って睨まれる
反省会すこうし陽気すぎないか
柿一個盗つて反省していない
反省を仕込んで猿に稼がせる
反省するのはごはん食べてから
つまずいた石を大事に抱えている
言い勝つてみても心に残る傷
灯を消して今日一日を省みる
寝坊して日課が二つふいになる
すんなりと反省されて頼りない
反省は年に一度と決めている
ああいうふうになりたくないと思う事
灰になる前に懺悔をしておこう
反省も何にもしない国になり
大物は反省するも秘書まかせ
反省のしるしコップを伏せてみる
反省の証拠に茶髪やめて来た
惚けた母叱った背へ掌を合わせ
反省の色が紫煙に混ざつてる

富子 螢
安子 公誠
和重 一粋
愁女 ミツ子
清史 玄也
岳水 正子
輝夫 主一郎
みね 俊路
次男 松煙
水笑 雄々
慕情 隆盛

買い過ぎに悲鳴あげてる冷蔵庫
丸坊主反省したは表向き
まだ反省を続けています午前二時
反省をしたのか電話して来ない
怪我よりも転んだことが恥ずかしい
反省はこの山越えてからにする
知らなんだあ知らなんだ社長以下
反省の語録は持たぬ金バッジ
反省会飲んで氣勢を上げただけ
三日目のあの一本がふり出しに
今年こそ来年こそと暮れて行き
反省の言葉にランクつけて聞く
酔いざめの水がおいしいので困る
反省はするが寸法違うネジ

佳

反省をしてから続く自己嫌悪
朝決心 夜反省のダイエット
氣遣つたつもりが傷に触れている
女房に土下座している腹の底
夫の愚痴思えばわたし種時いた

人

反省でまだ痺れてる二枚舌

地

天

反省の弁マニユアルを読むばかり

軸

子育ての失敗嫁に詫びてます

笑子 美明
半覚 しげお
春雄 島

鉄治 比佐子
喬水 節子
旋風 重人
伊津志

典子 章子
登美 一花
康子

あずま

高瀬 霜石

初歩教室

題 一 ほどほど

吐田公 一
はん だ きん いち

本号をもちまして、初歩教室を引退することとなりました。六年七ヶ月に亘る拙筆によくついて来て下さったこと厚くお礼申し上げます。

次回からは川柳塔社の実力者でいらつしやる三宅保州先生がご指導に当られることとなり、心から喜んでゐる次第です。

川柳は先ず佳吟といわれる句をよく読むことと、多作することが大切と言われます。また川柳を作句される時は、あらゆる事象（現象）に対して、表からも裏からも或は横や斜めからもその現象をじっくり観察する眼を向けることが大切です。このことは以前にも折にふれて述べたことでありますが、非常に大切なことであります。同じ物を同じように見ていたのでは決していい川柳は作れません。それがいゆる川柳眼といわれるものと言えましょう。

どうか立派な先生の許で大成されますことを祈っております。ありがとうございました。

添削句

○ほどほどに出来ぬ自分がいやになる 芳江

▽下九音字が単純に詠みすぎ

○ほどほどにできない性で人と揉め

○ほどほどにしとけば良かつた雲勇さん 九好

一言加えることによつて川柳らしく

▽ほどほどでおけば宗男も大臣に

○ほどの良い味付け妻のさじ加減 嘉彦

ご説明に料理も夫婦仲も妻のさじ加減とあつたので、味付けは不要。

▽夫婦仲ほどほど妻のさじ加減

○冗談もほどほどにして置きなさい 三喜夫

下五のために説明句になつてしまつた。

▽冗談もほどほど知らぬ話下手

○ほどほどの塩加減する私流漬 ゆきの

下五の表現に相当の無理がある。特に初心

の間は自分の造語は止められるように

▽評判の味ほどほどの塩加減

○ほどほどにしないと火傷する相手 弘子

傷つくのは相手だけでは無いと思うので

▽ほどほどでおけず最後は口喧嘩

○ほどほどに締めて緩めて僕の意志 照彦

下五がまずかつた

▽ほどほどに締めて緩めて人使い

○ほどほどの程度分らず苦勞する 孝明
内容に具体性が無い

▽ほどほどの程度に悩む宮仕え

○夫婦でもほどほどの距離心掛け 益子

夫婦がほどほどの距離を置くという句は実に多かつた。

▽ほどほどの距離で親子の仲が良い

○梯子酒女房役にもほどほどに トシエ

上下を入れ替え（倒置法）でみると

▽これ以上は下戸にはつらい梯子酒 満子

○長生きもほどほどに細る年金 満子

十七音字だが細るのところで切れて、

語呂が悪い。視点は少し異なるが

▽長生きもほどほど今の世は辛い

○ほどほどの夢の半ばに六十路 敏子

半ば以降を推敲してみると

▽ほどほどの夢を抱いて老いを生き

○黒白の決着付けず共に生き 章司

下五が安易

▽黒白の決着つけぬまま握手

○ほどほどが嫌で血が出る程に刺り 像山

具体性が乏しい。句意は異なるが

▽ほどほどが嫌でついには仲違い

○ほどほどに生きれず岩に棹もさし 勝久

漱石の言葉を引用してみると

▽ほどほどに生きれず情に棹をさし

○親が居るしつけなどはほどほどに　こずえ
上五が冗長

▽世は変化孫のしつけはほどほどに
○呑んべえのほどほどの酒つらいこと　フジ
発想の転換をしてみると

▽ほどほどでおけぬいやすい左利き
○ほどほどの焦げ目をつけて茹いて見せ　つよし
中七の表現がいただけない。茹くところからには、妻とか彼女とかを配せば――

▽ほどほどに茹いて気を引くママの腕
○辛口をほどほど飲める敬老日　清
上五は不要。ほどほどに飲むとあれば大体酒（辛口）のこととなると思うので

▽ほどほどに飲んで楽しむ敬老日
○ほどほどの幸せ過ぎる一人旅　和香
ほどほどに旅行過ぎないように控え目に済ませること（辞書）過ぎるはやや矛盾

▽ほどほどの幸せがある一人旅
○やせがまんほどほどにしやけどする　敬之介
中六はリズムが悪い。できるだけ工夫して十七音字にするように

▽やせがまんほどほどにせず大やけど
○初孫に天下気取りで宮まいり　更紗
三句共ほどほどの題から離れている。

▽ほどほどの衣裳で孫の宮参り
○ほどほどにとやんわり遊び諷められ　恵勇

説明句に近い

▽ほどほどで止まぬ遊びで身を崩し
○言い切るとほどほど済まぬ事になり　輝夫
中途半端な表現に終わっている。

▽ほどほどでおけば暗暉にならずすみ
○ほどほどにかじるのやめて細いスネ　文江
親の心情を詠むとすれば私なら

▽ほどほどにされて嬉しうすねかじり
○ほどほどの人生古稀を目の前に　洋介
下五の表現に一考が欲しかった。

▽ほどほどの暮らして古稀の夫婦旅
○ほどほどの我慢で消える妻のヒス　栄一
原句もいと思うが

▽ほどほどに聞き流してる妻の愚痴
○食べ過ぎずほどほどが良い人の世は　忠子
当り前のことを当り前に詠んでは駄目。小道具（箸）などを考えてみると

▽食欲の秋ほどほどに置けぬ箸
○ほどほどにして円高のお買物　和友
円高と買物といえは海外土産が想定される。となれば買物はしやすいはずでは？

▽円安で海外土産ほどほどに
佳句

ほどほどに口裏あわせた嘘がばれ　節子
ほどほどに妥協しないでいき遅れ　鈴美
ほどほどを忘れやり過ぎ医者通い　侑子

ほどほどという自己欺瞞味方にし
ほどほどでよせばよいのに老いのむち　大鯨
稔

手がげんがますい男の握り飯　安子
ほどほどにされてはならぬ拉致事件　アヤ子
孫の世話ほどほどにする老いの知恵　山雅子

調味料全部ほどほど亡母の味　登志子
ほどほどにして健やかに老いの酒　栄呼
ほどほどに愛し愛され老夫婦　ヨシ枝

ほどほどの金と元気があればいい
ほどほどと思えどついつい欲が出て　宏子
ほどほどに仕事趣味にしまだ元氣　郁代

ほどほどで止められなかった株投資
ほどほどの口嫌われまっせほどほどに　美恵子
老いの口嫌われまっせほどほどに　弘之

ほどほどの幸せ願う小市民
ほどほどに真直く生きて悔いはなし　英旺
自分史にほどほどの汗入れておく　円女

足腰もほどほど達者旅に出る　喜子
ほどほどに距離を保って真珠婚　智加恵
ほどほどに物忘れして老い上手　ふりこ

（老いの心境をうまく）　昌鼓
妻の掌の中ほどほどに転げとく　美弥子
（見付けがよかった）

ほどほどの欲があしたの夢つくる　菜月
（着想・表現共がいい）
私の句
ほどほどで引退せねばボロが出る

秀句鑑賞

同人吟 藤田泰子

— 11月号から

そのままで息を止めてが長すぎる

杉本孝男

レントゲンを撮る時によく言われる言葉。
この不況「そんなに長く息を止めておれない
のよ小泉さん」と叫びたい今日この頃。

通院が出来る幸せ感謝する

淡路 ゆり子

しんどい思いをして辿り着いた病院の待合
室。自分より重症の方を目にしたとき、一人
で通院出来る幸せに、自と感謝の気持ちが湧
いてくるのです。

赤い糸縫れたこともありました

平田実男

結婚記念日、赤い糸で結ばれた二人、意見
が食い違ふこともありましたが。歳月が何時し
か縫れた糸を解いてくれました。

ジャンケンで勝つても勝ちまししょう

高田美代子

実力で勝つたのではなく、ジャンケンで勝
つてもルールに従わねばなりません。言訳が
ましいことは言わぬが華。

揺れたって折れはしませぬ秋桜

西村りつえ

コスモスの季節、外見は弱々しく見えるコ
スモス。そのしなやかで芯の強さを擬人化さ
れて、味わい深い句になりました。

不安げな検尿室のコップ達

鶴田遠野

定期検診の検尿の白い紙コップ。結果が出
るまでの不安を、コップを借りて素直に表現
されています。

ゲームではないぞ仕事も結婚も

加島由一

クリアキーを押すとすべてが白紙にでき
るゲーム。人生はそんなに甘くないのだよ、
そんな声が聞こえて来ます。

鈴の音がやけに大きい空財布

山本義子

目立ちたがり屋のお財布みたいですね。政
治家や身边にそんなお方は居られませんか。
空っぽだから存在感を主張したくなるのでし
ょうね。風刺がきいています。

手ぶらでもいいからすぐに翔んで来て

松原寿子

こんな切ない気持ちを、誰でも一度や二度
は経験された事があるでしょう。心の叫びが
平易な言葉だから切実に響いてきます。

川柳を始めたきっかけは「朝日柳壇」へい
たずら半分で投句したのが入選し、そのまま
二十余年が経ちました。

未だ未だ未熟ですが、私なりに分り易く
て味わい深い句をビックアップしました。

寂聴の風が吹いてる彼岸花

宮西弥生

奔放に生きて来られて出家された寂聴さん
と彼岸花、イメージが重なり、嵯峨野の風景
が目につかぶようです。感性の鋭さを感じま
した。

広辞苑ひらいて探る発火点

山岡富美子

広辞苑を開いて、言葉を探す時のときめき
のような気持ちを、発火点という言葉でうま
く表現されています。

ブレーキを踏んでるつもりですわ

籠島恵子

「私これでもブレーキを踏んでいるのよ」
と言いたい気持ち。暴走してみたなくても母は
暴走出来ないのです。

私を煽り続けるカンナの朱

中井 アキ

燃えるような真夏の太陽をともに受けて
咲いている赤いカンナ。ライバルとして、い
つも私を煽ってくれてありがとう。

執拗に咲こう造花である限り

鴨 谷 瑠美子

私は造花、私には永遠の命があるのよ、と
開き直って咲き続けることが私の使命。開き
直れるまでの葛藤が窺えます。

二度咲いて月下美人の夏終る

山 崎 君子

一夜限りの花。それを二度も咲かせて、今
年の夏を終わりにする。人生もこうありたい
ものです。

八十年代とも自由な風の下

春 城 年代

なすべきことを全てなして終えて、手にされ
た自由を羨ましく感じます。何時までも
自由な風を満喫されますように。

すこしだけうるさいけれど孫である

内 海 幸生

お孫さんを愛しておられるお顔が、目に浮
かぶようです。孫の相手は疲れる。帰ってく
れるとホッとしますが、すぐに会いたく
なる。血脈のなせる技でしょうか。

トイレから戻った顔を見られたり

小 池 しげお

思わずクスツと笑ってしまいました。照れ
くさそうなお顔が見えるようです。

勲章のイメージがある猫のひげ

江 口 度

子供の頃たくさんの勲章をぶら下げた立派
なお髭の、乃木大将の写真が飾ってあったの
を思い出しました。

押入れて出逢った遠い日のわたし

大 川 桃花

身辺整理をしようと思つて押入れを開けた
ら、そこに若い日の思い出の品がある。やつ
ぱり整理せずにおこうと決心が鈍ります。

悪人の顔で写った免許証

村 上 玄也

一列に並んで免許証の写真を撮る時、私は
いつも犯罪者になったような気分になりま
す。意識していなくても、人間の感情は顔に
出るのかも知れません。

自律神経失調症とケンカ中

田 村 きみ子

病氣と喧嘩が出来るようになればもう勝つ
たのと同じ、あなたの明るさが救いです。

遺伝子組み替えミミまわりの背の低さ

亀 岡 哲子

遺伝子組み替えミミまわりの、あの大きな顔
が何ともいえないほどあどけなくて好きなの
に、花まで没個性にされてしまつて…。

本音を吐いた貝は海には戻れない

津 川 紫晃

内部告発でいろんな社会悪が暴露されまし
た。悪いことは知りながらの良心との戦い。
告発をするには強い正義感と覚悟がいるので
す。「私は貝になりたい」という映画を思い
出しました。

毎日が日曜だから休めない

高 杉 千歩

所帯盛りの頃は日曜日を待ちわびたもので
した。そして、生活にメリハリがありました。
今は怠けたい日が私の日曜日となっています。

一人では淋し過ぎます遠火花

赤 川 菊野

火花が揚がつてしばらくしてから聞こえて
くるあの爆発音。遠火花よ、あなたの淋しさ
が伝わってきます。

生む事を考えさせる世になりぬ

古 今 堂 蕉子

何も考えずに子供を生む事が出来た時代、
今「お母さんだったらどうする」と娘に聞か
れたらなんと答えたらいいのでしょうか、安心
して生みなさいとは言えない私です。

同人特集 お金百句

平成八年～平成十三年
同人吟から 編集部

金ですむ恋もさみしきもののうち

路 郎

生来の美貌に金が加わりぬ

薫 風

大金を積んで戒名買わされる
立て替えた金覚えてる千鳥足
金見ると妻のお天気晴になる
預金帳ダイヤモンドに化けました
ばあちゃんのお金 心配してくれ
年金の寂しさ靴が減りもせず
値切るまい花の値打ちが下がるから
相談と言われ小金を用意する
若い二人 寝物語が金に触れ
沈黙が漂う金の要る話
札束の力で扉こじ開ける

相馬 一花
前田 一枝
岩原 喬水
西川 和子
平松 かすみ
中塚 礎石
時広 一路
高瀬 霜石
小林 妻子
井上 富子
最上 和枝

親と子の絆がお金とは淋し
妻ですもの裏金と使途不明金
さあ戦 味方集める金をまく
なるほどと言わせるために金が必要
金のない身軽さ利率気にならず
寄付金の順に招待席がある
結論を言えばお金が要るんです
十円の金魚が二ツ夏越えた
小さい権利一円玉もわたくしも
年金のお礼でつせと般若経
借金ゼロ何て静かな年の暮れ

平田 実男
西出 楓楽
春木 圭一郎
秋元 てる
原 さよ子
大橋 政良
榎本 吐来
西村 早苗
岸 桂子
安藤 寿美子
柴田 英壬子

謹んで拝受敬老祝金

なんだ金のことかと言うてそれっきり

いさかいのものは秋刀魚の二百円

年金の暮しギリギリ音がする

汗知らぬ金はやっぱり溜まらない

自販機と千円札の押問答

金運も僕のとこだけ避けて行く

どこかに金が落ちていないかなと思う

小錦と私と同じ電車賃

義捐金 見知らぬひとの無事祈る

愉快だが金のないのが欠点だ

札束が金庫で黙かいている

退職金他人が計算してくれる

定期預金わたしの余命ふと思う

ゼロ四つあれば三度は飲める店

と言うてみんな使えば困る金

金あらば援助交際してみたい

返らぬを覚悟で貸したお金です

降って湧いたようなお金のいる電話

涼しげに背広を着てるお金持

玉置 重人

岸野 あやめ

藤解 静風

松本 よしえ

八十田 洞庵

小玉 満江

川内 叭笑

新家 完司

太田 とし子

近藤 豊子

谷口 次男

土橋 はるお

石谷 美恵子

田中 正坊

岩佐 タン吉

西口 いわゑ

森井 青居

さえき やえ

丹下 美津子

指宿 千枝子

勇氣出す十円足らぬ窓口で

闇魔さんに握らす札を溜めとこう

札束に目が眩まない金庫番

年金で人並み生きるのは手品

美しい心金があろうがなからうが

喜んでおれぬ金食い宇宙船

金をばらまく約束ばかりして帰り

金は娘が払ってくれる回り寿司

通貨危機アジアの心に帰れよと

札束に溺れたとこで夢がさめ

五百円一枚戦士のお弁当

万札を入れて背広が軽くなる

末っ子に流れる母の内緒金

千円の地図が光った迷い道

三足千円とうさんは定年へ

忙しいいそがしいとは金のこと

集金と苦情一緒にもろて来る

一万円の貫禄カニの目が動く

十円の玉子へ鶏の命がけ

幸先のいい百円玉を拾う

福本 英子

堀端 三男

乾 喜与志

春城 武庫坊

植村 喜代

高須 賀金太

江口 度

刈田 泰司

井上 森生

安平次 弘道

高田 美代子

須郷 井蛙

中田 あい子

澤田 千春

古久保 和子

神原 まさと

高田 博泉

石尾 かつ乃

角野 仁清

早川 盛夫

金も句も送らにやわたし同人だ

管理職手当てですよと妻がくれ

サラ金のボスが高額納税者

年金で加減乗除がうまくなる

キャッシュレス財布のお金寝ています

一円が足りず一万札を出す

借金はないがこの世に借りがある

父ははを囿に金を借りにゆく

金封へ書く字がゆがむ嫌な日だ

最後には笑いたいから貯めている

母の貯金じつとぬくもる暇がない

年金が細るぞ直訴いたさねば

億という保険をかけたのは妻だ

駄菓子屋の百円いきいきとはずむ

借りた金返したような気もするが

北向地蔵一円玉にある祈り

半額になる夕刻の顔馴染み

時間給になおしてみたくなるお布施

倒産のあとへサラ金店びらき

北川 竹萌

酒井 輝

板東 倫子

大石あすなろ

小野 句多留

川崎 ひかり

浅野 房子

土橋 睦子

榊原 秀子

井上 勝視

吉村 一風

堀畑 靖子

楠 昭子

三宅 不朽

富山 ルイ子

岡本 久峰

武田 帆雀

岩津 ようじ

北野 哲男

柿ざくろどれも百円無人店

お金さえあればなんでも叶いそう

百円のすしが疑似餌のようにある

十円でコスモス一本摘み取られ

ミレニアム一千元札見えていない

金貸して人の裏側見てしまう

お正月金もないのにやって来る

坪百万とれた大根五千円

万札が左右に春の出費嵩

サラ金より高い利息で妻に借り

散歩道今日は小銭が二か所要る

百円ショップの笑みは小さなものばかり

年金が貯まるようでは呆けますね

奥様は魔女です十万バツと出し

決断を大きく金が左右する

金は駄目 耳なら貸してあげられる

男盛りとても金など貯まらない

金持ちの極意をのぞく粗衣粗食

線香は百円均一です姑さん

山川 日出子

西村 黙光

岸本 宏章

森本 弘風

林 露杖

中居 善信

井上 桂作

木村 正剛

吉村 さち子

生嶋 ますみ

仁部 四郎

松下 比ろ志

島元 ふみ

岩本 笑子

夏目 健一

阿部 進

吉田 孔美子

丹後屋 肇

早川 棲世

—水煙抄

秀句鑑賞

—11月号から

相馬 一花

虫のいい話に乗った日の誤算

二宮 栄子

最近、悪徳商法が横行していますが、油断大敵です。お互いに気をつけましょう。

標識も信号もない生きる道

湊 修水

とても真面目な方とお見受けしますが、正に同感です。ただ、寂聴説法が道標を示唆しているような気がします。

花一輪誰が活けたか無人駅

福士 トキ

寂れた無人駅に花が一輪活けてある情景が浮んできます。乗客の心が和みますね。

痩せている人にも痩せている悩み

芦田 鈴美

太りたい方の心情をスバリ詠んだ実感句で、痩せすぎの私の胸にビビッと響きました。

パソコンに負けぬ手紙の温い文字

土屋 起世子

恋文は手書きに勝るものなし。

里帰りゆつくり母の愚痴を聞く

若松 雅枝

里帰りして母の愚痴を聞くとは今時、珍しい優しい娘さんですね。羨ましいですよ。

日焼け止めたつぶり塗って握る鉄

秋元 和可

女性にとつて日焼けは大敵、美肌は宝物だ。農家の女性心理を見事に表現した句で、女性ならではの詠めない佳句と言えよう。

ストレスを倍増させる五日制

土田 今日子

五日制でストレスが増えたのは否定できませんね。先生も生徒も親も悩んでいますよ。

神様を恨んだこともある失意

伴 洋子

神は信ずるべし頼るべからずと言った江戸時代の剣豪の言葉を噛みしめて下さい。神に頼らなければ恨むことも無いでしょう。

ハンサムな医者に婆さんまで騒ぐ

興田 明

ハンサムなお医者様は女性患者の憧れの的であり、医療費の一割負担もなんのその、婆さんでも勿論、小綺麗にして通院する。

敬老日派手なセーター面映ゆく

中島 春江

派手な服装に少し照れているようですが、派手な服装ができるのは若い証拠です。益々若返りますよ。私は原色が大好きです。

近頃は金が人間見て笑う

蔵本 悦子

事件の裏には金と女が絡む事が多いようです。特に金の魔力に魅せられると、人間は動きがとれなくなるのです。金が人間を見て冷笑する訳です。金を擬人化した佳句と言えましょう。

ひととおり紙めた苦労が糧となり

渡邊 伊津志

体験した苦労が実って現在のあなたがあってではないでしょうか。

白衣着るナースの笑顔眩しすぎ

永田 章司

ナースさんが眩しく見えることは元氣になった証です。そろそろ退院ですね。

叱られたことを骨に飲む法事

浦野 昭志

怖かった父の思い出に浸りながらの盃は格別な味がします。

お酒落して若く見せたく背を伸ばす

山口 千代子

お酒落してモデルのように闊歩しているあなたの姿が目に見えます。

本社 十一月句会

十一月二日(土) 午後一時
アウイーナ大阪

霜月に入り、急に初冬の気配となった二日、十一月句会は、午後一時から開催されたが、あいにく川柳塔唐津支部の二十周年大会と重なり、89名という、やや淋しい句会となった。はじめに十月五日に亡くなった同人小林一夫さんのご冥福を祈り二分間の黙祷を捧げる。お話は井上桂作さん。頭の体操と思つて聞いて下さいと前置きをする。

漢字について最近ではメールでの文字交換が盛んになり、日本語練習帳は増冊されている現状である。

文字を作ったのは中国の蒼頡(そうけつ)という人で、目が四つあると言われていた。世界中で漢字を使っている人は15億人もいる。

日本語には、カタカナ、ひらがな、漢字があり、覚えやすく便利とされている。

ところが、漢字にはよみ方に音訓があり難しい面もある。

子子子子子子、子子子子子子は、(猫の子の子猫、(獅子の子の子獅子)と読める等、楽しい話で、あつという間の30分間であつた。初出席に南圭彦氏(尼崎市・中井大八氏(伊丹市)・安土理恵さん(橿原市)を迎える。

月間賞は東大阪市の谷口義さんに輝く。

(司会) 朝子 (記名) 澄子・玄也

(受付) 月子・茜 (清記) 義

席題「大根」

和田つづや選

百までは生きるつもりの大根炊き
まず大根正井丹吾をなつかしむ
鍋奉行大根おろしもチェックする (矢) 五月
食材に大根の白疑わず
何時までも名に大根とつく役者
かつらむきいま包丁は修業中
獅大根冬將軍のおもてなし
干大根隙間すきまに詰めた便
背を向けた友から届く千枚漬
煮えすぎた大根頑固の歯に合わず
じつくりとあめ色祖母のぶり大根
大根で七つのおかず膳に乗る
脇役を揃えアイドル光らせる
いか大根豆腐焼酎外は雪
大根もコロも煮えてる細雪
角の無い大根わたしを戒める
大根を漬けて今年も無事に終え

重人 弘風 五月 比呂志 章久 雅文 柳弘 かすみ 全彦 柳弘 茜 東雲 尚士 天笑 重人 典子 とし子

大根のすだれを吊す里の冬
木枯し一号ふるふき大根さまになり
寒空を絵にして大根干しである
飴色の大根で飲む店の隅
千切りにしたい男も大根も
大根葉も食べて元気に秋を持つ
大根干し井桁に組んで秋に入る
大根がうまい馴染の縄のれん
身の程を知らない足に泣くミユール
脇役は大根役者ではできぬ
土付いたままの大根よく売れる
未練ひきずり大根を干に切る
換気扇となりの大根煮えてます
今年また仰山集う大根炊き
驚沢な舌がたくあんはめてくれ
まじないの大根食べにゆく京都

佳

とりあえず大根こんにゃくがんどき
器量よい大根先に売れてゆく
おでんふつつ大根がのぞいてる
一坪の畑に大根ばかり植え
善男善女信じています大根炊き
人
いら立ちの勢い借りるおろし金
地
大根炊き京にほんまの冬がくる
天
二三本抜けと田んぼで大根くれ

隆盛 度 萬の 真理子 雅文 千枝子 高栄 千枝子 尚士 楓楽 愛論 希久子 小雪 柳宏子 金太 天笑 隆盛 愛論 萬の 富子 あやめ 洞庵

てつちりに紅葉おろしが力貸し

兼題「ジンクス」

三宅

保州選

ワン切りというジンクスに負け残り

ジンクスはどうあれ朝の靴を履く

降り出した雨勝算はわが手中

ジンクスを信じて数珠を繰っている

友引きで鉄がのびた母の通夜

ジンクスを御破箱に仕舞いこむ

ジンクスの呪文私を裏切らぬ

勝つたので今日もキッスをして出かけ

ジンクスがおんな心をもてあそぶ

ジンクスを破つてからは楽になる

ジンクスを逆手にとつて運がよい

ジンクスを破る楽しみだつてある

かと言つてやはりジンクス気にかかる

縁起良いポスト駅まで入れに行く

厄介なジンクス僕の前にある

厄年の妻はお酒を断っている

せつちが縁起かついだ遠回り

ジンクスを破る呪文をちよつとかけ

ジンクスが去るまで夢のつづき待つ

ジンクスを変えるお守り身につける

ジンクスも信じなくなる厄続き

歯の抜けた夢が気になる二三日

パソコンに俺のジンクス叩き込む

雨男時々艶つばい噂

螢

順子

澄子

典子

寿美

たず子

天笑

重人

雅文

舞夢

かりん

三喜夫

洞庵

正雄

扶美代

鹿太

恭昌

順子

弥生

能子

メ女

朱夏

公誠

真理子

朝の蜘蛛そつと逃がしてやることに

ジンクスを担いだ僕は潰される

バトカーも隅には成田山の護符

ジンクスは鴉の方が知っている

ジンクスにもたれていたら負けがこみ

ジンクスを持たぬ男で顔がない

ジンクスに封印をして向く明日

大臣のジンクス赤い服を着る

佳

ジンクスにがんじがらめの設計図

茶柱が立つた日少し臆病に

花びらは奇数ジンクスまだ続く

ポケットの中でジンクス遊ばせる

ジンクスに縋る私を許せない

人

ジンクスが多くてどれが効いたやら

地

ジンクスに気付かぬ振りをしてるだけ

天

ジンクスの手垢で光るおびんずる

軸

母が寝てからこつそりと爪を切る

兼題「字」

高田美代子選

大い

活字になると一人歩きをする言葉

愛の字が欲しいひとりを生きている

読める字はみんなが読める書道展

玄也

金太

あやめ

扶美代

天笑

全彦

金太

桃花

俣子

全彦

留美子

柳弘

西

利昭

篤子

鹿太

天

天笑

楓楽

朝子

隆盛

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

お手本のそのままらしい年賀状

人という象形文字にある尻尾

書道展すごいなうまいな読めないな

パソコンの文字で正体伏せておく

引き出しの女文字から採めはじめ

達筆な人だ悪人には見えぬ

決断を迫る尖った文字である

鉛筆を代えても分かるボクの文字

記憶力格闘してる電子辞書

遺言の文字に迷いが透けて見え

骨太の字がブライドを捨ててない

古稀すぎて少し重たい広辞苑

小さい字を無骨な人が書いている

掛軸の字も読めぬのに家宝です

下手な字も読み慣れてきて好きになる

大文字地球の鬱を焼きつくす

半生を忍の一字で来た背中

リハビリの一字一句の命がけ

キムチ買うのにハンゲル文字の店探す

悪筆は直らぬ医者診断書

字足らずのままでも錯覚してしまう

親譲り活字のような子が一人

字画まで考えている子の名前

銀行の金庫で瘦せてゆく数字

割り切れぬ数字ばかりが胸にある

金賞の文字が読めない書道展

横書きが苦手です少しく頑固です

佳

真理子

保州

柳宏子

とし子

重人

金太

典子

正坊

きりり

充子

澄子

桂作

能子

小雪

月子

澄子

朱夏

武庫坊

哲男

能子

恭昌

比ろ志

朱夏

楓楽

昭子

全彦

全彦

房子

真筆の手紙に浮かぶ顔がある
幸うすき生涯 たった女文字
悪筆の家系子供を叱れない
弱い者いじめばかりする数字

人
癖のある文字がほこする便り

地
字余りの唸りさみしくなってくる

天
何回も字引の世話になった薔薇

軸
のびのびと育つたらしい大きな字

兼題「占める」

河内

月子選

妻の席だんだん広くなり定年
朝ドラは達者な脇が占めている

妻の服大半占める洋ダンス
下駄箱が靴に占領されている

同居して家事に時間を占められる
母さんをひとり占めする風邪の熱

僕の胸あなたにずっと居座られ
家計簿に占めるわたしの稀少価値

老人が八割占める診療所
もう占めたものだ誘いに乗って来た

淋しいね ころを占めるひとがない
献立は育ち盛りの子が占める

コスモスが休耕田をひとり占め
一人占めトイレで今日の案を練る

独占力つよ過ぎ友は近寄らず

ダン吉
正坊
順子
扶美代

朝子

ダン吉

かすみ

金太

西茜

洋子

篤子

桃花

天笑

鹿太

伽羅

つづや

瑠美子

柳伸

西茜

欣子

昭昭

味占めてから奥の手を小出しする
にがりくさや味を占めたらやめられぬ
ひと言がころを占めて眠れない
かあさんが占めてる温い台所

一隅を占める一人の珈琲館
酒煙草やめた男が家に居る

花花花ひとりの部屋を占めている
独占が出来れば嫉妬などしない

バーゲンセールおばさま族に占められる
深呼吸大きな秋をひとり占め

家中が一日孫に手をとりられ
絶景を一人占める登山靴

八九分は女性占めるバスツアー
おやすみと笑顔で今日を占めくる

十階の窓から月をひとり占め
フアッショと食費が占める秋の乱

味占めた競馬の末路青テント
佳

妻の友達ばかりがいつもいる茶の間
ケータイに占領された夫婦仲

ひっそりと盲導犬の占める位置
優先席占領してる鼻ピアス

ハローワークに働き盛り溢れてる
人

うちの子もずっとビリの座占めている
地

独り占めにされて淋しい籠の鳥
天

人間が地球を占めて軋む音

英子
利昭
能子
千枝子

正坊

典子

三男

文

柳安子

正坊

三男

美代子

昭子

高栄

希久子

かすみ

真理子

玄也

保州

尚士

朱夏

公誠

庭に出て虫の音星座ひとり占め
軸
兼題「自信」
福本 英子選

健康の素顔が自信持つっている
ネクタイを少しゆるめている自信

スツピンでこめん自信ある女
自信喪失木から落ちて来た天狗

美容整形恋の自信が付きました
骨太の文字に自信があふれる

トップではないがビリでもない自信
自信などないので髭を生やしてる

ノーベル賞作業服には自信ある
老いてなお自信過剰の火の女

妻にまだ愛されているという過信
五十年自信はないが主婦してる

八時間ぐっしょりと寝たぞという自信
自信などないが生れてきた自信

矢面に立つて自信がつけました
手を上げる自信ないので目を伏せる

カルチャーで学び自信をつけていく
一太刀は切らせてもよい自信持つ

健康自信喫煙歴も七十年
鏡見るたびに自信無くしてる

エステティックサロンで自信つけてくる
自信などないが唸りを切っておく

パン食い競争にはいつも手を挙げる
いい顔だ自信がついてきたらしい

山ひとつ越えた自信が宝物

満津子
義
倫子
大八
かすみ

理恵

倫子

篤子

東雲

柳宏子

尚士

千枝子

五月

三男

瑠美子

順子

洞庵

太茂津

伽羅

朱夏

三喜夫

重人

能子

朝子

玉子焼だけはバッチリ娘の自信
一歩ずつ自信を戻す回復期
自信ない時に限って当てられる

飄飄と自信もないが金もない

自信過剰の帽子が風に飛ばされる

謙遜の裏で自信が見え隠れ

子育ての自信が皿に盛ってある

住

目は自信あるのに耳が遠くなる

ワインクで魂抜いている自信

百点が自信もたせたランドセル

口論は妻に言い勝つ自信ない

風邪ひとつ引かぬ自信が命とり

人

一円玉自信がついた消費税

地

わたくしは母親ですという自信

天

風を読み過ぎて揺らいで来た自信

軸

天狗鼻折れて鞍馬へ逃げて行く

兼題「つくる」

河内

天笑選

木を切って草刈りをして道つくる

Aクラス目指すユニホームをつくる

メモ通り作って出ない母の味

郷愁は母の手になるオムライス

つくられた美人に弱い夫の酒

柳伸 小 雪 玄 也 房 子 寿 美 正 雄 柳 弘 章 久 隆 盛 欣 子 玄 也 保 州 とし子 真理子 萬 的

英 子 満 津 子 つ づ や

四十歳自分の顔をつくらねば
お互いの器量でつくる夫婦像
父さんのつくったチャールズはうまい
明日の顔つくる腹式呼吸して
手づくりの安心の味食べている
編んだけど渡せなかったベレー帽
自叙伝へつくり話のかかし味
しょうが湯を作ってくれる母が居る
メイドインチャイナのマーク氾濫す
若づくり町内会の小旅行
ロボットがつくる冷凍にぎり寿司
まだ核を造りたがっている国よ
残り火でつくる句集の温かみ
面会へ精いっぱい顔つくる
買った方が安い野菜をまだつくり
言い訳の作り話が面白い
泣き笑いがつくつてくれた太い芯
美しいつくり笑いに騙される
おいしいという子へ今日は腕あろう
神様がつくつてくれたひと休み
中国へどんな移る物づくり
妻がつくった弁当にしばらくは
ラブラブの影絵をつくる石畳
同じ手が義足と地雷までつくる
つくり手の名前さきいで買う野菜
土有情汗に答えている実り
やさしささが時に思わぬ罪つくる
作られた微笑みらしいきこえない

昭子 あやめ シマリ 楓 子 能 子 小 雪 文 紫 香 桂 作 正 雄 柳 伸 保 州 希 久 子 典 子 度 恭 昌 楓 子 順 子 かりん 桃花 正 坊 希 久 子 かすみ ダン 吉 瑠 美 子 隆 盛 房 子 修

亡き母を偲んでつくる味噌の味
咳に背を丸めてつくる卵酒

達 子 真理子

住

レシビ一パイためて結局煮ころがし

戦いを終えた男の菊づくり

職人のいのちがつくる火の器

手料理をつくる娘は母の顔

三食を作りつけて喜寿迎う

人

また敵を作り自分の道進む

また敵を作り自分の道進む

つくれたロボットに首刎ねられる

大工さんの作った家に住んでいる

天

父ちゃんのつくり笑いは見たくない

軸

11月までの本社句会皆出席者は次の通りで
す。間違ひがありましたら、事務所まで申し
出て下さい。

阿萬萬的 稲葉冬寒 石森利昭 安達はじめ

岩崎公誠 榎本舞夢 江口 度 太田扶美代

大内朝子 大谷篤子 川原章久 神夏磯典子

河内天笑 田辺鹿太 寺井東雲 高田美代子

中澤加羅 長浜澄子 坊農柳弘 高須賀金太

板東倫子 藤井正雄 松尾和香 西田柳宏子

前たもつ 森下愛論 初山隆盛 長谷川春蘭

森本弘風 吉村雅文 安永 春 吉岡 修

計32名



天国の小林一夫さんへ

奥田 みつ子

一夫さん！貴方と初めてお会いしたのは昭和五十六年の夏でした。確かまだ大学生でした。朝日カルチャーセンターのロビーでお話したのを覚えています。カルチャーの生徒の作品が「ラウンジ」という広報紙に掲載され、一夫さんの川柳がとても斬新な感覚で、やはり若い人は違うなと感心したものです。歳は親子ほど違いますが一夫さんとはカルチャーの同級生ということになりますね。

その年の暮れに橋高薫風先生から『渋し』と題したハガキの句報一号を頂き、その片隅に「若い人とこんなものを始めました」とのペン字が嬉しそうに躍っていました。

「一夫君を誘うと、彼の友達も乗ってくれた。私は二十二歳の仲間から夢を沢山もらうつもりでいる」という薫風先生の前文があり、若い五人の川柳が載っていました。

翌五十七年四月発行の構造社「川柳」二十四号、「柳人登場」の見開き二ページには一

夫さんの大きなアップの写真や薫風先生に作品を見て頂いているスナップが掲載されていました。そして「川柳や俳句は映像や写真と似た面があると思うのです。と言うのは十七音字をきっかけとして、そこから自分のイメージネーションで広げていくことは同じなんです」と写真の好きな一夫さんらしい川柳に対する考え方や作品が紹介されていました。

日の丸はただ日の丸となりけり
被爆国雲の隙間に罪も持ち

酒を呑む大人の鎧脱ぎたくて

剥いでゆく仮面の下に顔が無い

能面の目で世の中を見たくなり

その後、就職、結婚をされて、お会いすることもありませんでしたが、平成五年四月に薫風先生が始められた「サークル檸檬」でまた御一緒することになりました。お勤めの忙しい中を縫って出席され、私たちに若い新しい風を入れてくださいました。時には写真を見

持参されて、イメージ吟などにも皆で挑戦しました。また、貴方は持ち前の几帳面さで自由吟の互選表を毎月作られ、出席できない時には神戸から西宮の私宅まで、わざわざ届けてくださいました。

平成六年三月にはお友達と「写真画四人展」を催され、数多くの素晴らしい写真を楽しませて頂きました。

平成六年の第十二回川柳乙賞に応募、見事入選されました。

光さしけり小さきものの足跡に

極月の父の秘かなし父かなし

少し猫背の母と二人で暮洗う

祝宴の酒ゆるゆると誰か死す

平成七年一月の阪神大震災の時には、勤めを終えてから夜遅く、寒い中を弟君と二人でガスボンベや水など、いろいろ持つて私宅を見舞ってくださいました。どんなに嬉しく有難かったことでしょう。

そして、その年の各地柳壇賞は一夫さんの

一月十七日 晴 街がつぶれた

に輝きました。

美丈夫という言葉がふさわしい立派な体格の一夫さんの好きな花が、かすみ草というのも、繊細でやさしい貴方らしいと頷けます。

天国で川柳と写真を楽しんでください！

みちのく

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ロース川柳会 (前月分) 山崎 君子報

朝は主婦午後は隠居で夜は子供
反省は実行するよりもつかしい
マネキンの裸も淋し店しまい
九ちゃんを上を向きなど笑つて
飢えた子の裸へ送る愛無限
忘れたい過去も今では郷愁に

哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義子 孝一

九月来るテロの恐怖はそのままに
曼珠沙華庭一杯の九月です
秋なすびまた一年が経ちました
裸ならなんにも怖いものはない
裸馬乗り手の程度心得える
終の日だあれも知らぬ曼珠沙華
彼岸花あなたと呼んだ秋の風
風九月口紅のいろ選っている
九十九折り踊り子赤い緒の草鞋

川柳塔みちのく

小寺

花菱報

しなやかに男の芯を抜く小指
しなやかに耐えるおんなの細い首

謙一 きよし

日曜も祭日もない年金者
日曜日男は顔の骨を抜く
いつの間にこぼれた種か九輪草
折れそうで折れない妻のしなやかさ
しなやかに生きて極の薄化粧
日曜日ノルマがきつい洗濯機
左遷地の日曜淋しく月と酌む
雨降りも洗たくをする日曜日
愛は深まりしなやかな手話の指
日曜の空地で拾うわが噂
肝臓が笑つて明日は日曜日
しなやかな腰が魅力のフラダンス
しなやかな遺伝子を継いでいる小指
しなやかな妻の笑顔に逆らえぬ

川柳塔みちのく

小西

雄々報

古着させ人の匂いの案山子でさ
大好きな服を案山子に着せてやる
役おえた案山子は納屋のすみに置く
載すずめ案山子を睨み動じない
減反を横目に案山子つるの鬱
畔に立つ案山子地主の主婦に似る
背伸びなどしない案山子を見習おう
疲れ切った案山子点滴でも打つか
豊作へ笑みをたたえて案山子佇つ
夕焼けを案山子もながめ独り言

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

舞台裏ソーマン食べているお岩

太一

妙子 ヒサ子 てる 順風 慕情 ふさゑ 花匠 愁女 黙人 千加子 花峯 一花 五楽庵

陽も射さぬ空気が淀む舞台裏
裏方の汗が飛び散る舞台裏
早よ死んだのが飯を炊いている舞台裏
彼女の手軽く握つた夏まつり
遠さかる尾灯祭りを積み残す
嫁さんが来たとき賑わう村まつり
恋褪せず遠かに炎える西雲
夕西遥か遠くに亡母の声
遠花火遙かな愛を引き寄せる
廃校の隅に記念樹残つてた
親も子も必死宿題残つてる
残雪の山は貫禄もつている
駅の屋根鳩の夫婦は巣を造る
流されて河内音頭の駅に着く
寂聴の風がやさしい山の駅
旗巻いた男に帰る駅がある
西日射す駅でさまよう風を抱き

翠洋会 (前月分) 六吹 尚士報

名案を骨抜きにする会議室
反骨に生きた証の向う疵
孫娘骨のあること言い出した
母さんの小言骨身に沁みている
散骨の日風は故郷に向いて吹き
またおて節くれた手があたたかい
星空がいよいよ狭くなるわが家
いよいよも延命だけはお断り
いよいよと思つてからが長かった
出陣の命いよいよと今日は出た

良子 美弥子 柳宏子 秀夫 定男 ダン吉 章久 朝子 萬緑 あや子 太郎 東雲 シマ子 弥生 湖風 愛論 正坊 尚士 春 志華子 澄子 日の出 絹子 義 東雲

神さまが授けてくれた好意かも陣中見舞好意だけではない探りはじまりはただの行為であつたはず押し売りの好意もうれし裏通りおいしと重いじゃがも持たされる裏表 好意と憎悪が住んでいるライバルからつらい好意の招待状この際だ姑の好意に甘えとこ人間に困つていふと言う地球

虫の音を聞きつつ遠い夫おもう鎮魂へ真つ赤に炎える曼珠沙華熱帯夜換気の音で寝不足に寝不足を癒してくれる秋の風いっしょだよとつと気楽に生きようか改革は取りよい庶民むしり取るささやかなドラマつないで秋となる地下街の花屋で萩を売る無残

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

カタログにそそのかされているサイフ通販で買ったドレスが似合わない思い出に少し未練のある残暑デパートの椅子で残暑をやり過ごす山は秋すさが揺れている残暑お供えのぶどうが熟れている残暑向日葵も人も残暑の色になる冷やかにはとほりさます妻の声ほとばしりをさましてくれる冷や奴自信喪失つづくほとばしり冷めてから

千梢 正雄 理恵 桃羅 伽羅 蕉子 孝一 恭昌 石舟 照子 富子 会美 舞夢 蛙 叡子 千歩 真理子 スミ子 あやめ 無緑 千枝子 庸佑 重人 比ろ志 満寿蔵 泰雄 澄子

ヒロインのほとばしりに酔うロードショーひまわりのほとばしり月日掛かりそうコピイして恋の焰を撒き散らす純情の焰もやして甲子園今一度虎よ焰と燃えてみる仏にも鬼にもなっている焰この男の焰について行くつもり

魔女の抱く焰赤いと限らない中身とはマークが違ふ包装紙丁寧に義理を包んだ包装紙焼芋を包むにや新聞紙が似合う地方紙でくるみ手渡す故郷みやげ大切な血液採られ金取られ活発な老妻で町内生き字引良い方の予感信じて待つことにこつそりと妻も浅蜷も愚痴を吐くまた今夜怒られそうな仏の灯人生でうれしいですな老い二人風吹けば風になり切る芒の穂リズム狂つて腹の底から笑えない

岸和田川柳会

長谷川呂万報

タイガース勝てば朝刊よく売れる朝刊でその日の朝が明けてゆくまっ先に柳壇欄を見る朝刊朝刊が折り込み重いと泣いている粋人が読む朝刊はコラムから戦禍の苦悩が続く八月忌筆跡の乱れが伝える揺れ心

求芽 孝一 紫香 義一 茂 磯 萬的 克治 克恵 武史 尚士 治三郎 柳宏子 稲穂 光穂 晴美 秀夫 高栄 諷云児 照女 盛之 東吉 路子 蛙城 洋脩 一脩

佳句地十選 (11月号から)

宗

水笑

朝からの迷いが晴れるレモンティー回避せぬ戦争責任元兵士脱線をしたところで会う酒仲間節くれた指にリストライ言ひ聞かす今日生きた証タオルの汗の量母さんの心はきつと海だろろう脇役で終わる男の目ではない糠床へ詰めた菜っ葉に亡母の味貯金通帳見ると涼しくなってくる人間のものさしだから伸び縮み

今日の無事窓のあかりが伝えている伝説の女性は何故かみな美人もう子は産めぬだけ句は産める万葉人情け伝える相聞歌しつかりと嫁に伝えたいうちの味お喋りがすぎて伝言忘れてる絵手紙に伝える旅のいい話生命線短いけれども生きてやる手相見の暮らし気遣う夜泣そば手相には出ない幸せ持っているよい手相期待するほど出世せず新年の誓いど忘れしてましたわが余命神よ度忘れして給れど忘れを小出しに使い呆けた振り大好きな女優ど忘れ妻に聞く

武 珠枝 房枝 弘子 みつ江 さよ子 狸村 守基 苑子 穰一 英雄 笑司 俣子 呂万 春蘭 正坊 紫香 洋々 晴翠 朝子 ダン吉 柳宏子 完司 かりん

条件が揃って納得する職場
納得がいかに困る嫁姑
納得をして両親と同居する
時価食べて納得いかぬ請求書
納得して帰って妻に叱られる
納得を胸のしこりが承知せず
ど忘れをしていたアハハまだ元氣
納得はしませんひとり手を上げる

三幸川柳教室

三宅

保州報

東雲 昭二 仁緑 甚一 柳宏子 初太郎 ダン吉

青春の絵には涙の跡がある
塩味の効いた涙をスパイスに
感涙は真珠のしずくかも知れぬ
すらすらと子供の方がよく覚え
葛藤もあろうすらすら喋る名コンビ
すらすらとバスしエリート味が
ちよつと酒あればすらすら言えるのに
告白はすらすらいかぬ星月夜
逢筆も下手もすらすら読みにくい
表向きはスラスラと多数決
閑魔さま身辺整理まだ途中

川柳塔おつぱこ吟社

伸二 朱夏 美子 美枝子 純子 起世子 桂香 さち子 保州 登美代

木村あきら報

あきら

ふり洗い押し洗いでも落ちぬ過去
カラオケにはまってるしまったおばあさん
亡母憶う山路に萩の咲きこぼれ
うっかりと洗われていた免許証
そのままの家が残っただけの里
そのままのいい誘いのうまいこと
有事法制洗い直して陽に干そう
耳ふさぐ音痴マイクを離さない
ともかくも流されて行くより外になし

打吹川柳会

大森

孝恵報

恵美子 好栄 民子 ちよえ はるみ かつ子 博利 清泉 白汀

振り向けば途中で消えていく味方
口裂けても弱音は吐けぬ役半ば
盛り上がる宴の途中に出た波紋
追い風も途中までとは天仰ぐ
終焉へまだ途中なり風の旅
途中下車すれば方向見失う
風向きを途中で変える咳払い
途中から送り狼猫になる
森の中白馬に乗って来るナイト
夕焼け小焼けカラスに帰る森がない
西向きの森は夕日に笑顔みせ
妻子待つ森があるから働ける
森も鳥もやがて無口になっていく
消えてゆく森から進む温暖化
青白い男は森を出られない
病院の深夜は深い森になる
合格の涙が虹を立ち上げる
広島は涙は黒い雨になる
お多福の面でかくしている涙

三千子 みね 敏子 正一 当代 和代 和子 昇 豊太郎 嘉平 マリ子 義雄 章子 千秀 公子 かず子 栄之進 町子 鉄治

万歩計ホットなニュースが待っていた
すくすくと元気に育つコボレ種
鉢巻が己が会社タテをつく
レントゲン胸の悩みは写らない
珍客が部屋の掃除をかき立てる
よく喋る軍団が居るバスツアー
浮いて来た釘は一度打って置く
一筋の絆が拓く四面楚歌
正義感上司の頭下げさせる
真剣な顔して騙す素寒貧
おめかしのカラオケ大会興に乗る
頭一つ下げて心が通じ合う
やっと来た夫が手を取り徒歩遍路
わかあゆ川柳会 松本はるみ報

ひかり 吟笑 治延 放任 八重子 賢 勝 かおり 輝夫 寿々女 いさむ 貞月

けもの道一人で迷い戻らない
カラアゲが刺身が焼くか地どれ鱈
夜の街きらくめくネオン迷い込み
煩惱に迷い続けて今日も暮れ
迷ったら三日ねむって返事する
これも好きあれも好きすき迷い箸
凝り性と三日坊主と両天秤
信仰に凝って裸になりました
カラオケに凝って寝言に歌が出る
趣味に凝り会社休んで餓になる
オゾン層怪我して地球温暖化
浅知恵の知ったかぶりで怪我をする
ウイニングが上手に出来た怪我をした
深入りおそれ転ばぬ先のだよ恋の道
怪我おそれ転ばぬ先の押し車
この夏はえつともらったなすきゅうり
えつとある皿で使うのは同じ物
極楽は御布施をえつと待っている

よしえ 完司 しろろ 睦子 和歌子 和枝 玲子 かつみ 幸子 友楽 久井代 美姜子 清 順子 龍枝 京子 禎元

寺の寄付えつとで首がまわらない
水もれの分も払った水道代
えつとのもの両手にあつた幼き日
竹藪に入り方角見失う

鳩尾に死んでも言えぬ怪我がある
子育ての道で迷子になつてゐる
アルコール飲めぬ男が酒に凝り
金ペンの万年筆に凝つてゐる

敵の怪我たつぷり塩をなすり込む
酒やめて洋酒に凝つた喉が泣く
川柳で凝つた心をもみほぐす

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

鯉に魅をやると笑つた顔をする
お互いを褒めてあるい夫婦仲
叱るより褒めてやる気にさせる知恵
仲秋の名月見れば故郷こいし
やすらぎの笑顔広がる老人会
笑い泣き極楽とんぼ日が暮れる
ビッピーとチンで夕餉が出来あがり
美人ではないが笑顔でよくもてる
落ちこぼれ種から咲いた花を褒め
巢立つ日にまだ揺れている父こころ
咳払いやつとおやじが金を出す
咲きはこるコスモス迷う温暖化
目の高さ変えると苦笑の顔が見え
褒め言葉調子に乗つて踏み外し
褒められてまた惜しまれて書く辞表

美知江 善江 克枝 芳光 玲坊 石花菜 節子 一夫 季芳 博丈 孝恵 鹿太 玉枝 信子 秋子 耕治 まさ 龜与子 イサミ 孝一 十四郎 比ろ志 満寿蔵 正治

幾つもの角を曲つて来た背骨
咳一つまた一番に風邪を引き
褒められた絵が張つてある子供部屋
川柳塔唐津支部 久保 正刻報

眉につばつけてから読む立志伝
東京駅辰野金吾の出は唐津
世話させる方が元氣な敬老会
フルムーンメモと薬と保険証
絶筆の句はほど遠い寝込まれぬ
淑女とか言われた嫁の大欠伸
頭数今年も減つた戦友会
二代目のメドで病院増築す
ぬるま湯がじわり反省押し上げる
千秋楽ハワイモンゴル睨み合う

川柳大阪

高木

信醉報

ベテランを隅に追いやるコンピュータ
削除して住基ネットノースンキュー
目立たずに隅にいるけど大物だ
いてまゑと言つたからには善処して
誘惑の二字に正確狂わされ
風向きで隅に片寄る反対派
気まじめが表に出てる正確さ
付き合つて山より高い人と知る
隅の雑魚いつか大海夢見てる
妻が出たあと実印が見当たたらぬ
逃げ腰でいてまゑいてまゑ言つてゐる
正確さ期すところずだと叱られる

澄子 柳宏子 紫香 兵八郎 實 晴翠 水笑 勝規 輝夫 高明 四郎 虹汀 正剣 和子 かよこ 美花 柳昌 鉄心 功 照月 一步 青道 元紀 利昭 柳宏子

出るとこへ出る妻の反乱には弱い
生涯の連鎖へ妻と五十年
清め塩かけてやりたい午前様
若者のセンス団扇にスニーカー
君の顔見るといついグチが出る
つまづきの数を増やして愛確か
いてまゑの情けを知つてゐる河内

かき捨ての恥は宿屋の部屋の隅
やすらぎの余生を灯す遠花火
想い出を小出しに生きる老い二人
薬漬けでも達者と言つておく
法善寺善男善女集つとこ
七夕の笹を叩いて通り雨
よど号のワルも人の子里こころ
星取表やの字やの字の名古屋場所
隅つこで謀反の明日を墓にみる
正確をときどき欠いて世を渡る
機関車のごとく生きぬき悔いもなく

竹原川柳会

時広

一路報

川向こへ嫁ぐ淋しいことはない
嫁ぐ子に父うどん屋へさそわれる
嫁ぐ日の白は白よりなお白し
女偏に家の字のつく重たさよ
阿波踊り見たくてやつて来た広場
あの広場孫の外車に化けました
広場消え少年の心が荒れる
平成の広場で子供遊ばない
温い広場だったなビルが建ちました

金太 洛醉 重弘 柳お 楽子 笑風 章久 春蘭 喜楽 三十四 兵庫 民子 本藤 隆吉 朝子 信醉 蘭幸 不朽 半覚 民恵 正宏 敬子 節子 輝夫 輝恵

寄り添える椅子が広場に置いてある

孫と来た広場お伽の国になる

満月を見ている勇氣わいてくる

毎日が勉強頭につめこんで

生きざまを時どき自問自答する

八十年生き学びたいことばかり

がんばって生きた証の家計簿だ

美しくたのしく生きて天に舞う

新世紀どうして生きる思索する

生きているおかげ恋にもめぐり合い

死に様へ向かつて今日を生きている

二人して生きた証に孫の声

山越えたいのちに朝日降りそそぐ

堂々と海の度量を持つて生き

たんぽぽのふわふわ風と生きるのか

生き方の反面教師の母である

生きてあれば火の海呻る日もありぬ

雑魚大魚おんなじ海の水で生き

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

ゆつくりと動く時計を買いにゆく

空腹はあれもこれもと買いたがる

バーゲンで目も満足を買ってくる

いくさ場から命つないで五十年

抱われる金魚の命ふーわふわ

ながらえた命金木屋にあう

剪定へ花の命と対峙する

灯りみな灯して命たしかめる

補育器に欠伸しているああ命

力

汎美

史子

千枝

房子

栄恵

万年

孝枝

夏喜

笹舟

厚子

慶子

一枝

菁居

笑子

淑子

静風

一路

軽い命重い命の蟻の列

川柳塔なら

坊農

柳弘報

能子

蘭香

敏子

積子

博一

登美子

むつみ

春雄

春蘭

秋泉

定男

とし子

佳子

章久

直子

恵美子

良一

太一

きらり

真理子

道子

一風

朝子

長生

洋子

茂雄

秋雄

時価のすし味より銭が胃にもたれ

アメリカよわかるか核の深い傷

口笛は淋しい男のためにある

これ以上待つと哀しくなる喜劇

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

隆盛

和夫

理恵

弥生

稚代

三男

美子

保州

和子

さち子

佐一

英子

大輪

三喜夫

裕美

呑天

克子

順子

佐代子

正博

泰子

鉄治

幸

豊太

結実

利治

あき子

百点をつけてあげたい夫です
百パーセント夫に賭けた幸せ度
百万ポルト不況の中のノーベル賞
百点の評価で決めぬ人間味
百枚目書いて感謝の筆洗う
百分の一からしよう恩返し
人間の弱さ知ってる百度石

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

酒好きが酒に飲まれて道はずす
呑むほどに遠慮を消して無礼講
郷愁や見せ物小屋と啖阿売り
郷愁もちよびり甘藷のはの甘さ
郷愁の森傷口にふと触れる
幼い頃草笛うまく吹けたのに
草笛が遠い古里呼び戻し
口笛を吹いて独りの輪をつくる
夕日みて青い遠景風がふく
退院すその日娘の管理下に
湯豆腐が目当て紅葉を観るツアー
とびつきの笑顔で並ぶ同窓会
秋空に運動会の母の声
浮き雲のひとつと長い旅に出る
携帯に一方通行メール来る
山のあなたの幸を信じていたカッパ
太陽の七色プリズムがあはく
笑わないバラが美と嘘創りだす
十三夜の雲が隠した月の恥部
耳垢取って今年の秋の風を聴く

優子 輝子 和子 富美子 和香 寿子 射月芳 千恵 満寿蔵 里江 しづ子 歌子 糸子 純 比ろ志 正子 昭三 勝巳 東園 節子 芳子 幸子 年代 久子 孝一 定男 武庫坊

余命いくばく止った時計は止ったまま
やつと暇見つけて切った足の爪
仕事のない指が耳のうしろ掻いている

岬川柳会(前月分) 八十田洞庵報

帰ろうね夕陽あかあか影ふたつ
信じ合う心がつなぐ今日の風
思い出の数も宝の玉手箱
アルバムにこんな素敵な彼だった
上着まで汗のしほれるボランティア
ほどほどにつなぐ世渡り角がない
流れゆく亡夫の思い出遠火花
隠してもベルトの穴が知っている
訥弁で隅におけないこと喋り
秋の風名山赤く染め上げる
ついた嘘自分の顔がばらして
アルバムに思い出めぐり偲ぶ秋
時を経て褪せずに芽える草木染
義姉さんの形見を染める訪問着
職なくて何の施設と青テント
体力をためすためにも大胆に
露の灰汁手指を染めてお物業
大胆に相手のツボへ誘い球
母の留守父大胆にカレー盛る
大胆な化粧でかくす裏の顔

光穂 紫香 薫 和美 みやこ 淑子 とみ 桜琴 みつこ 和香 富美子 里子 洞庵 茂平 昌夫 令子 蛙城 東雲 よし子 勇 悦子 年子 川柳ささやま 遠山 可住報 多美子 恵美 多美子

金の要る話まとまる丸い村
茄子漬けがうまい話がよく弾む
土壇場で妻のヒントが生きて来る
ライバルにヒントを貰う言葉尻
握手した手からこぼれたいいヒント
種尽きたヒント求めて旅に出る
比較してもがいています井の蛙
孫入れて寝る川の字も久しぶり
稲の出来隣の田と比較したくなる
久しぶり検診受けて安堵する
比較などしないで行こう友だから
懐かしい一句が添えてある便り
五十年振りへ童顔探り合う

京都塔の会 都倉 求芽報

埒もない事に腹が立つ日暮れ
ソフトクリーム舐めて較べる姉弟
ラムネには少年の日の味がする
酷暑に負けた郵便受けも空っぽ
少雨でも淀川の水とうとうと
みちのくの秋とサンマを食べている
花街もさんまが匂う夕餉時
この頃は魔女も箒に不自由する
善行を積んで閻魔の前に立つ
戻り橋魔性の風が吹いて来る
三面記事 閻魔の度肝を抜く時代
マンネリにつけ込む街にいた悪魔
魔がさしてえんまにわびることはかり
魔の淵をのぞいてみたい好奇心

美智子 八重子 とみ子 靖子 つや子 かほる 君代 開子 富子 康子 朝子 寿子 可住 てる 春蘭 武庫坊 年代 達子 百合子 克治 高栄 ルイ子 篤子 良子 萬的 宏子 輝美

大魔術カード一枚から始め

幼い日の魔法の杖がほしくなる

白寿とか魔法使いのように見え

鉛玉のところどころに入れる鞭

老い二人あやしあやされ冥土まで

子育てのあやし上手は母の武器

赤とんぼの歌を唄ってあげている

じいちゃんのペロペロバーで泣き出す子

お日さまがあやしと花はみな笑顔

安心をさせる嘘だと見抜く母

信用と安心を買う包装紙

へそくりをタンスにしまいホツとする

台風が安心出来ぬ位置に居る

母の胸にすがって安心する寢息

安心は我が家がいやす旅疲れ

西宮北口柳會

亀岡

哲子報

空の青神は自分の中にいる

頼りにしてます神さまの記憶力

神頼みこんな小さな祠にも

天高く神も旅する神無月

お賽銭ちよつとけちった神無月

生きたる欲に促されて折る神

落人の里にひっそりある祠

絵馬の山無理難題を押しつける

疑いは生返事から始まった

疑いもせずカッコウの子を育て

新妻に疑いかけてもつれ糸

柳安子

葉子

幸代

欣之

弘之

友照

磯

満子

求芽

庸佑

典子

英一

益子

紫香

英旺

芳子

電卓の数値疑い御破算で
定退後疑い深くなった妻
疑いを逃らす小細工統べる
疑いを持たず蛇口の水を飲む
バランスをくずさぬように生きている
神話崩れて素足で立つた現在地
聖人のくずれた文字は読みにくい
一瞬にくずれてしまう生命線
運勢の星中年が身をくずす
煮くずれの肉ジヤガ得意です私
砂糖壺の中でくずれてゆく蟻か
ひとめ惚れ恋の手順を組み立てる
鉛色に煮込む大根母の味
気をつけてしゃぶるのど鉛古稀の秋
ノーベル賞受けて人事課慌てさせ
コーヒーの匂いで私の朝となる
可愛いテロか妻が黙ったまま三日
逆光で見るとわが家も美しい
おいしさを頒けあう人と秋の酒

かわはら川柳會

上田

俊路報

お喋りは焦る心を見抜かれる

ストレスを誰かと喋り解消し

親子ツバメせまい巢の中何喋る

喋るだけしゃべらせ王手駒を打つ

さんまさん喋る楽しさ受けている

五つ子を育てりやつばめよく喋る

好きだから煙くゆらし喜寿にらむ

豆腐屋の煙で今日の朝が立つ

孝一

柳安子

庸佑

みつ子

正坊

富喜子

奮水

昭三

能子

義子

哲子

遠野

江美

いたる

曙蝶

メ女

陽子

鹿太

たず子

一薫

道子

登生

泰良

雅子

寿子

悦子

聴

窓際でけむたい奴の目が光る
煙たたくも矢張り頼りにしてる父

はびきの市民川柳會 徳山みつこ報

一時の心をいやす煙草の火
今年また灯籠流す側にいる

火の玉になつて土俵の貴乃花
戦後史の火種が残る拉致被害

ほんのりと心に灯る善意の火
天高し一寸ハッスル一人旅

おだてたらでつかい豚も木にのぼる
ハッスルをして血圧に叱られる

ハッスルをしても越せない父の影
休日と知ってハッスル駆ける犬

ハッスルの傷をあちこち持っている
窓きわがハッスルしてる酒の宴

うんざりだ張替えられた肉野菜
うやむやにうんざりしてる正義感

うんざりの肩にも明日が待っている
うんざりが渋滞してる行楽地

アメリカの高い鼻にはうんざりし
うんざりと話聞いている馬の耳

うんざりを脱出話聞いている馬の耳
出る杭の方へ狂った豆のつる

温暖化だろうか桜の狂い咲き
喋飲んで狂うリズムの二三日

子の育ち親の希望が狂い出す
ムード曲ほんの少しずつ狂う

狂わずに綺麗な花で終りたい

余吏子

俊路

真一

かつみ

章司

忠宏

フジ

昇

六点

重人

志洋

柳宏子

ダン吉

満寿蔵

桂子

たけし

吐来

遠野

専平

りつこ

みつこ

敦子

敏

一知

泰子

扶美代

さこみ

少し狂ってひらひらと飛んでいる
月初から予算狂わず子の手紙
スナックに悩みを癒す椅子がある
スナックに別の私の顔があり
スナックのママも帰れば母の顔

富柳会 池

森子報

ふる里の原風景にあるトンボ
ロボットが自分で螺子を巻いている
しおらしい女にもある噴火口
日本の調べ高めた赤とんぼ

人間の螺子を緩めてくれる酒

五感みな螺子がゆるんで好好爺
ネジしめた顔って何と魅力的

庭先にトンボ見た日の処暑だより
史書の里訪えば碑を舞う赤とんぼ

十七文字神の宇宙を掬い盗る

貼ってから気付く中身の入れ忘れ
偽装して貼ったラベルが命とり

和紙貼ると好きな童謡聞こえそう
汗ばんだ野良着夕陽へ背を向ける

屈折のリズムのまんま流される
貼り替える出来ない過去を背に負う

深まった愛へ無口な風が吹く

闘病記に優しく群れる赤トンボ
青春のネジはキリキリキリ一途

トンボの目俺とおんなじ目をしてる
それとなく玩具のように螺子巻かれ
貼りついた貧乏神が離れない

美代子 耕策 庸佑 一壺 久仁子 浩子 扶美代 花梢 勇 和代 冬虹 深雪 和喜子 紅紫明 亮美 鐘造 キミエ 恵勇 アキ 一慧 和子 初太郎 欣之 たかし 一夫 誠

お日様に私を貼って子を育て
仲間うち意識に揺れる二面石
しばらくは冷風の座を上げとす
風媒花君の軽さが気になる
デパートで駅弁買った住居
貼る紙の箇所ドラマが裏返る
一からの出直し確と螺子を巻く
愛と言う螺子一本で生きている

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

私が実るあなたのひらで
よう実る田圃案山子にレイをかけ
特訓は実りトツプのテーパー切る
メルヘンの国をさまよう母を見る
メルヘンに貴方の席がおいである
メルヘンの世界はいつも澄んでいる
何時でもお出でメルヘンの自動ドア
切り株に座ると童話しゃべり出す
スコールのような浪費をしてみたい
失敗と無駄の中からノーベル賞
手の動き無駄一つない茶の作法
無駄金を使った後の口惜しさ
バーゲンのピラを片手に無駄を買い
ためらいが大きい魚逃がす破目
ためらいが速答できぬ間の悪さ
ためらいの傷あちこちに青春諸
ためらいを捨て黙々と往く通路
水澄んで過去のためらいから抜ける
ためらいの秋をゆつくりほぐす酒

夕子 巳代一 春蘭 萩乃 喜代子 ひろこ 信子 森子 森子 柳安子 加津子 きよみ 柳伸 肇 定男 一風 光雄 半蔵門 宏至 弘直 ひさ乃 せつ子 民 丹吉 巳代一 弥生 欣之

肩書きを捨てると丸くなる妥協
妥協点まさぐり合って居る二人
この辺で折れたらという天の声
お互いの面々が立って妥協する
大物に妥協はしない雑魚の群
妥協しておやおや自分の貌がない
じゃんけんはんそこは妥協のない世界

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

杖になりとうていどう伸びた藁かな
人の世は定めめの運が纏いつく
こころ広げて姉に繰り言聞いてやり
へアカラして明るく生きるパスに乗り
終りの蚊アガキの針を刺して去に
温度計故障したかと振ってみる
隣ヒアス雷様も逃げ出した
彼岸そこはさき洪茶で秋を呼ぶ
吾亦紅 愛せし甥も七回忌
干からびて夕立待つたカタツムリ
盆踊り真夏の夜の暑気ばらい
大までもつられ人だからへ走る
懸命に泳ぎ切りたれ其の日まで
まだ耳は確か悪口聞こえます
たましいがはじける栗がばらばらと
風の盆テレビで見れば楽でいい
自尊心だけはつぶさず群れにいる

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

昌子 頂留子 春蘭 庸佑 シマ子 幸生 ますみ やえ 初枝 玲子 瑞枝 八重子 すみゑ 麗 てい子 春枝 恵子 蘭 なみ 富美子 天雀 ふみ 田鶴 日枝子 長一

寿司ねたも回り回ればくたびれる

生きてこそ喜怒哀楽の皿回し

回らない資金で首も回らない

旅の宿土地の祭りの輪に入る

回転軸微妙にずれてきた夫婦

回転を軽くなすトウシューズ

半回転して新しい風を待つ

右肩へ回転軸がずれてゆく

観覧車秋の夕日に追いつけず

密談へ女三人やかまし

ばあちゃんとは密談してもすぐばれる

料亭の猫は秘密を知っている

年老いて密談の要なくなりぬ

臭いほど美味しいものの存在感

きな臭い風が漂う日本海

ババはまたお酒臭いと逃げ回る

青臭い意見それでも一理ある

犯人をさぐり合ってるすかしっ屁

じやまくさいから貰うてある おーいお茶

生臭を法衣に包む教祖さま

バラ色のサングラスか待ってみる

祭り笛久しく聞いているかない秋

川柳塔まつえ吟社

津川

紫晃報

手料理で育ち妥協をしない舌

新メニュー聞けば挑戦したくなる

手料理に惚れて一緒になつたはず

大根の煮付けが美味い旅帰り

エプロンも様になってる夫の背な

見清

勝

緑骨

よろう

久子

まみ子

昭子

保子

敏子

ヤギエ

雪子

正三郎

吉太郎

契子

黒兎

いさむ

千里志

柳童

実

祥風

信男

桂子

澄子

きみ子

幸子

たけし

治代

ダイエツト言うては料理のつまみ食い

棘だけは見せないままで生きている

棘一本刺したまんまの太い骨

刺さった棘抜けないままに暮らす日々

表面を飾る女の深い棘

棘を抜く一升瓶を提げていく

合掌の手からぼとりと抜ける棘

終電車揺れるリズムは子守唄

借りて来た言葉どこかが揺れている

イヤリング女こころも揺れている

乗り物を降りて感覚揺れている

少子化の町のブランコ風に揺れ

踊いた時から心揺れている

随筆の代り川柳書いている

随筆の中にときどき出る女性

随筆の余白に止まる赤トンボ

随筆の隅で本音が見え隠れ

随筆にするよるこびとかなしみを

随筆のペン先にある涙跡

松茸の話にせめて乗ってみる

松茸のその後の話気に掛かる

風に揺れ茸はここよと揺れてくる

一本の茸の切りよに思案する

松茸のむかし話を聞いてやる

松茸は嫌いで通す負け惜しみ

川柳さんだ

北野

哲男報

くり餅よ私だ今ダイエツト

身支度はまわし二丁いざ土俵

早苗

保子

玲子

注湖

房子

多賀子

桂子

俊一

ちえこ

知恵子

静恵

昭二

浜丘

秀子

茂美

畔

ちかし

螢

町紅

民子

宏

日出子

政子

与根一

紫晃

開子

サクラ

葛の蔓勢力伸ばし通せんば

隠し事さくろも割れて毒を吐く

止った蚊叩かず少し生をやる

新米のお寿司で祭り盛り上げる

たつぷりの手から釣銭受けとりぬ

一房のぶどうのような家族愛

不揃いの握り飯に母の愛

コスモスはあなたまかせに首を振る

新ソバが日本列島南下する

出来たに飯はいらんと来る電話

親心食い逃げ持ち逃げさす支度

胃カメラが毎度毎度と喉を行き

川柳高知

川竹

松風報

烙印を押されたあげく消えるハム

リヤカーを押した昔の米の味

後押し顔ぶれを見て腰を上げ

押さは押せ恋はやつぱりこの一手

借りに行く背中を妻がそと押す

居心地がよいのか皮肉通じない

よく噛めば友の皮肉にあつた味

示談書の判が斜めに押してある

健康に感謝している誕生日

青春を踊りて残す炎天下

炎天に若さ弾ける土佐鳴子

ひまわりの吐息を聞いた炎天下

炎天の暑さ忘れた踊りの輪

炎天下働く人の皆無口

炎天に己の影をふむへんろ

歳子

ちあき

菊子

久恵

昌子

婦美子

敦子

章子

正和

朋月

哲男

藤朗

圭二

幸功

孝雄

快風

さき子

愛宏

圭風

悦子

京子

典雄

てるみ

栄珍

和江

美々

大木になるまで応援続けよう
声援にいつか応える亀の足
ガラガラの応援席に居る身内

岩美川柳会

石谷美恵子報

逢うたびに耳のリングが増えている
かけられた期待重荷で芽が出ない
やせ腕に五人家族がぶら下がる

重荷担ぐと信頼されそうだと
生きている証拠にフケという埃
スタートで肩の重荷が笑つて居る

堂々と逢えば逢つたで物足りぬ
重荷にはならぬ名句を書きとめる
キヤラクター葱には葱の花が咲く

貸し金庫たまに虎の子逢いに行く
出逢いから十年今も片思い
キヤラクターの漫画の好きなおばあさん

月見草に逢つて夢二の絵になった
隅々の埃払つて寒い部屋
歳時記をよく知っているキヤラクター

髭面が似合う男のキヤラクター
沢庵の石より重いお年寄り
ひと吹きに埃のような男消す

太陽の見ているところで逢わぬ仲
鶴のみした嘘の重荷がのしかかる
キヤラクター女に化ける化粧する

キヤラクター関係ないが腹は出た
美しい嘘で介護をする重荷
重荷などないはずなのに肩が凝る

哲史
佳風
暖

蟹郎
たぬ
季芳

はるお
完司
一夫

孝男
一瑤
重忠

公乃
睦子
よしえ

一京
螢
静生

石花菜
和歌子
芳光

一粋
かつみ
修

さみ子
和枝

キヤラクター生れつきたと強情だ
埃だらけの過去などは振り向かぬ
もひとりの家族のように住むほこり
この顔もキヤラクターです温かい
生き抜いた証の埃かも知れぬ
夢フェスタ羽が欲しいとキヤラクター

むらこ川柳会

毛利

職立つ祭りだ鳥居おごそかに
見えそうで見えない窓の月明り
わざわざに寄つた友が笑顔見せ

栗拾いわざわざ行つたがイガばかり
名月へババはお酒でママだんご
いちだんと口紅こゆく宮参り

のびのびと祭り楽しむ笑顔の子
敬老会案内受けて元氣湧く
にこにこ朝から家族和ませる

愛子さまにこにこ笑顔手をふられ
主なき店に置かれた招き猫
豆播いて家内安全福招く

遠くから手招きして居る友がいる
朝夕に初秋思わす虫の声
百日草初秋の名残り惜しむよう

これからが本番ですと受験の子
少子化へこれから先が気にかかる
心地よい青葉若葉の薫るころ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

救急車よりもあつさり霊板車

喬水
雅女
克枝

節子
裕子
美恵子

幸報
仲子
信夫

定子
明朗
彰

安男
島子
節江

八重子
昭子
ふさえ

美喜子
まさ子
ます美

恵美子
ツル子

石花菜

孫の笑い救ってくれた夫婦仲
強情なミミズが家を出てしまふ
しなやかな女に向かぬ主婦が居る
夢の中スロークイック赤い靴
ダイエツトしよう胃袋少し閉じ
鳩尾に喜怒哀楽を閉じ込める
目を閉じて夢の続きを織り上げる
そろそろと俺の人生閉じようか
親を捨て子を捨て誰を救うんだ
男を救つて未だ貧乏なり
よく見ればミミズの顔はのつぱらぼう
しなやかに目隠された風の中
うしろから押されて秋の扉を開める
北鮮も天の岩戸も閉じるなよ
聞き役にまわり柳の枝になる
地上の声みんな聞いているみみずです
自分史を閉じる量を試している
しなやかに踊つています花の精
しなやかに手早く着物たれたお母
台風が弱つてボロ家救われた
しなやかな竿で大物釣り上げる
閉じていた心開いた子に拍手
我こそは救い主だと大根飯
川柳でボケの速度が遅くなり
仕舞風呂ゆつくり伸びて今日を閉す
愚妻でもいつも救ってくれている
口だけはみんなが地球救う会
魚の餌にされたミミズの私語を聞く
命乞いなどほししないと鳴く鴉

重忠
季芳
龍枝

和子
玲子
幸子

芳光
一夫
修

和歌子
きみ子
睦子

螢
玲坊
登美枝

克枝
ひろこ
秋草

ゆり子
よしえ
日出子

賀寿恵
悠子
和枝

泰輔
次男
かつみ

照彦

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男

振り向くな辞書に未練の文字はない
ジェラシーを感じる私まだ若い
ジェラシーは見えぬが火種抱いている
ジェラシーをむき出しにされ怖くなり
前だけを見てりやいんだ振り向くな
ジェラシーの怖さ男は知っている
山肌が裂けて牙むくくもの道
八つ裂きにしようか恋が夜叉にする
欲捨てた仲間つまじい雑魚でいる
しょぼけるな捲土重来明日がある
痛告知生きる望みの夢を裂き
風で飛ぶ種はさだめを知っている
妹を褒めれば兄の眉くもり
振り向くな後の太鼓は任せとき
潔白を裂いて見せてよ胸の内
自爆テロ知るたび生木裂けてます
振り向くな過去は二度とは戻らない
振り向くな青い鳥なら前にいる
嫁姑ジェラシー秘めて芝居する
ジェラシーは灰になるまで角を出す
明日という未来あるから振り向くな
悲しみの裂ける楯に点火する
リストラに温い家族の輪を裂かれ
最善を尽くしたことに振り向くな
振り向くな過去の評価は人がする
振り向くなブラス思考で前を向き
真つすぐに生きた足跡振り向くな

洋々 節子 裕子 幸子 保子 一京 益子 一瑤 昌鼓 志緒 喬水 一粹 春名 金祥 是るみ 修 茂登子 あけみ 穀 重忠 雅女 美雪 三津子 螢 彰夫 宗明 初江

逆さまに穿いたパンツが修羅を呼ぶ
交渉が裂けて本音が聞こえてくる
ひとり酒秋の夜長にするめ裂く

城北川柳会

川久保睦子

無意識にふとんを探す処暑の朝
信頼の友は冥土へはかなき夜
肩車安心をして見渡せる
健やかな目覚めとなるこぶ花の彩
ボーリング負けでなるかと老いに鞭
難聴はお歳ですと医師からくる
バクバクと金魚のようにあえぐ夏
花に会いしふきにぬれて夏が逝き
人情をたつぷりもろた里の盆
夫にはハイハイハイと合わせとく
温暖化四季の移りも薄れゆき
今朝の夢大枚つかんだとこで覚め
金婚を過ぎて熟成したワイン
八十歳私まだまだ夢を追う
飛び入りがリズムにのれ阿波おどり
続編を見る気にはさせるラストシーン
妙法の送り火はるか父や母
秋の野を渡る風さえ人を恋う
暑くても心やわらぐ川の幅
早魃と豪雨地球の裏表
気心の紐をはいた里の酒
ひと時の夢に浸った遠花火
年金に合わず不義理を溜めている
真実を隠す化粧がすぐ剥ける

良雄 無限 孝男 静枝 春蘭 東雲 とし子 柳一 あい子 美代子 綏子 トヨ子 照子 久留美 達子 昭子 はじめ 史風 修 高栄 千里 求芽 あやめ 順三 志華子 千歩 朝子

改革の支柱ゆさぶる族議員
求婚へ計算で決める現代つ子
巧言の裏に打算が見えかくれ
信じ合う歩幅が揃う夫婦坂
沢山の未来を持ったゼロが好き
雨だれのリズムきれいな穴をあけ

くらぼ三川柳会

前坂なお美

つんつんとするから俺に気があるぞ
まねき猫金の座ぶとん敷いている
腹が減るつんつんばかりしておれぬ
今日はなんの用かね仏頂面
居候三度の飯に身が縮む
身の縮む思い何度くり返す
酔うほどに他人の妻に惚れそうだ
上座にはいつも他人を座らせる
貧血だ鉄の棒でもしゃぶろうか
人生の鉄路歩幅をくずさない
こちよよい座ぶとんだから離せない
友情もこじれつんつん背中向け
恐ろしいもの見た亀が首縮め
人は皆伸び縮みして黄昏れる
他人には解らぬ虫を飼っている
風向きに合わせ他人になるもよし
鉄のような包容力に惚れました
座ぶとんは尻の大きさ等問わぬ
重圧を知った座ぶとん薄くなる
簡単に命縮めてなるものか
他人には笑われそうなただの石

公一 ひさ乃 倫子 重人 典子 一枝 重忠 涼子 幸子 春名 ふみ子 なお美 喬水 是るお みち子 美智子 富子 小生 帆雀 和代 一揆 螢 克枝 遊子 あらた 美智代

さびついた鉄が睨みをきかして
つんつんとする自分に腹が立つ
縮んでるゴムは飛躍を溜めて
いい水と出逢った鉄は強くなる
困ったら他人の顔に切り替える

いずも川柳会

佐藤

治代報

くるくると地球が丸く見える丘
くるくると安月給で夜バイト
くるくると迷ったコマが回り出す
くるくると山が団地に早がわり
ろくろくるくる大きな空を持っている
くるくると人の心を追う愚か
だまし絵の船をスイスイ漕いでいる
神さまも歴史があった船神事
船はもう錨を上げた柿の赤
一本の絆を断って船が出る
船は他人で見て来たことは喋らない
大の字になれるわたしの船がある
偶然に隣合わせになった縁
これも縁重荷を背負うカタツムリ
ちよつとした縁で夫婦をして居ます
縁あつて五十五年の手をつなぐ
縁あつて二人三脚しています
縁があるからおれの後についてくる
縁あつて片目の金魚飼っている
縁遠い家系で秋が深くなる
不器用な指で生活支えてる
裏切りを許してくれた白い指

菜美 悦子 静生 小鹿 公弘 多輝子 夢酔 歌子 蘭水 治代 文子 多喜 与根一 満江 きみ江 章峰 寿美 美佐子 浜丘 ちかし 房子 茂美 竹夫 芳枝 榮子 篤子 昭二

幸せな時期もあつたと泣く指輪
点字読む指の先から温かさ
まな板の音から秋の味届く
亡天遺影私の目線の中に描く
この想い届けてほしいきざれ雲
目の届く位置に梯子がおいてある
届くまで祈り続けて澄んでくる
別離した女から届く鬼の面

岬川柳会

八十田洞庵報

埋もれ火に花を咲かせる人の愛
無駄でいいはずでいたい胸の秘
理性にも酒を吞まして大胆に
苦も楽も濾して受取る歳となり
気がかりな友から届く花便り
まつたりと熟成味噌も熟年も
よい汗で四季染め変える花のいろ
朝顔も残りの命燃やしてる
憧れの人がいるからおしやれする
月浴びて駱駝の背でハーモニカ
酔ったふり甘い誘いを待っている
ペアルック似合う二人も夢は別
年月が似合いの夫婦つくり出し
大胆で緻密な母に知恵を聞く
菊はめるおだて上手にお茶を出し
救われた孤独柳燃えている
グランドに燃える命の青春譜
赤とんぼ茜の空へ憧れる
ボケツトのマツチがばれる事になり

まこと 玲子 紫見 多賀子 久子 桂子 昌枝 れいじ 富美子 令子 茂平 孝子 俣子 みやこ 桜琴 年子 昌夫 勝 里子 とみ よし子 悦子 みつこ 和香 洞庵 東雲

川柳塔おとと

原みさを報

灯台は頑固なほどに沖を見る
赤い灯の海で明かりの癖がある
新築の隣家照明がしり付けた
国連が核軍縮の灯をつけた
無重力わが身の位置が定まらず
今今を重ねて終がきつと来る
雑学を詰めた靴が重くなる
少子化で老いの命が重くなる
重い口愚痴がいつぱい詰つて
体重が減れば減つたでまた悩み
重箱に母が詰つて秋まつり
物事にくよくよしない肥満体
重々に託して故郷の墓に座す
敬老会死線を越えて来た重み
説得が実つて重い腰上げる
十匹の羊にならぬうちに寝る
十本の指に甲乙丙はない
十かぞえ幼いころの鬼こつこ
十歳も若い貴方に惚れました
無花果は十字背負つて熟れてゆく
新妻も十年経てばそれこそよ
十分と言えぬ年金のち綱
神様も多忙で時によそ見する
時という葉悲しみ忘れさせ
知らぬ顔したい時ある胸のうち
時という名医のメスにまかせざる

芳光 宏章 せつ子 芙美 小生 大鯨 艶子 雄々 登美 義弘 由多香 邦昭 舍人 天涯 黙光 庸二 真一 彰雄 仁子 道子 富貴子 清子 一弘 風花 孝子 和子 みさを

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

ためらったマイクも持てば離さない
亡き人の植えた棚田に秋実る

川柳藤井寺 高田美代子報

美しきりボンすんなり受けとれぬ
地獄への資金すんなり貸してくれ

思い出にいつも母あり栗ごはん
負の心ベンがすんなり進まない

猫ならばすんなり通る穴がある
うちのエンジンビル注いで快調だ

エンジンが切つて素顔をとり返す
エンジンが良さそう右脳芽えている

息子のエンジン親が寝る頃から出す
エンジンがまだかからぬ四番打者

秋風に私のエンジンかかり出す
渋滞へエンストしそうこの酷暑

エンジンも調子がいいな里帰り
来客があればエンジン上機嫌

秋祭り男のエンジン唸り出す
秋天の農作嬉しコンバイン

低気圧今日はエンジンかららない
月静か鶴はたたいまも仕事

スツピンにびつくりしてける昼の月
長生をしよう月まで行けそうだ

名月に覗かしている露天風呂
運命は月の悪戯かも知れぬ

うぬばれを月に静かに諭される
ボーナスが花火のように消える月

星月夜父の記憶は風ばかり

点滴のしずくが光る窓の月
深呼吸お月さままで吸い込んだ

ペランダの煙を月に笑われる
屋上の月に聞かせるだけの唄

ダイエットやめとけ満月の方がええ
豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

古池にばかばか何か浮いている
ばかばかと木魚が響く寺の庭

ボカボカの肉饅二つ母訪ね
ばかばかと香りたどった散歩道

口止めをされた噂が風にのり
止まっていけないが人は抜いていく

滅亡の核の時計が止まらない
古時計ときどき止まる寿命かな

車椅子止めて野菊をてのひらに
列車が止まる風だけ降りた無人駅

化粧室 女の背は隙だらけ
居眠りはしても祖父ちゃん隙がない

隙間風入る余地などない二人
隙間には人物 金がせめぎ合い

隙がありそこがなくていいあなた
ライバルには小さな隙を見せたく

一瞬のためらい隙を突かされたな
隙間からSOSの音がする

穏やかな菩薩の顔に隙はない
食べ盛りの子が二人いる秋の天

逆さでも困らなかつた抽象画
竜宮の酒がうまくて帰れない

千里 扶美代 かつみ 瑠美子 一筒

寿美子 満寿蔵 巴子 知香子 慶子 英子 啓生 和子 つえ子 ことぎき 重人 柳宏子 庸佑 郁子 見清 萬の 千里志 春

石舟 実 かげお

妥協の幅少し広げて様子見る
脇役も主役も母は名演技
年ごとにふるさとの駅さまがわり
秘密だと言えど広がる隠しごと
農作へ雀もおこぼれをもらう
シンブルな白めし大好き戦中派
夏休みひととき高いママの声
生きざまを隠すおかめの面を買
風鈴のひとり遊びが耳ざわり
哲学の風に晒した裏表
核心つかれたためらいながら答えてる
新妻はためらいながら名前呼ぶ
脇役が主役を食つてうとまれる
比較してきめた夫がこの程度
母でさえ炎えてる娘には近寄れず
軍事基地すみか追われる人魚姫
雀追う案山子独りで淋しから
一目惚れたためらい見限りません
今時のカカシ茶髪で張りり番
ぐうたら男でチャンスには強い
ふるさとこの空気を奪い汽車に乗る
父さんの釣りのみやげは雑魚ばかり
奮まだためらい迷う花鉢
病室で無粋な人の長話
手土産の松茸焼いて座のはずみ
脇役は人目にふれず除で咲く
十五夜のうさぎも見てる二ニューヨーク

八寿子 明 彌道子 宏至 ミツ子 君江 一風 幸枝 隆盛 晴美 俊子 恭一 奈良司 友甫 正純 一道 (本)たえこ (赤)妙子 ますみ トシエ まさと いっふみ 義明 春江 順生 知佐子

幸せの真ん中において淋しそう
恙無くうまい新米 秋の膳

港町タンタンと朝が来る
本物が少しも氣とらない人気

長柳会

加島 由一報

首かしげねたる仕草に弱い僕
秋深み神も旅する神無月

チョットした仕草可愛いランドセル

仕草から蛙はやはり蛙の子

秋の夜に筆とる仕草つれづれに

寂しさを集めるように暮れる秋

オリンピック無限に続く記録追う

餌付けして野鳥集める僕の庭

愛子様の仕草で笑みの輪ができる

餓鬼大将仲間集めて悪巧み

限られた時空の中で夢を追う

初孫の可愛い仕草についてほろり

賞味期限過ぎた夫婦に味がある

左手の仕草で決まる縄のれん

愛らしい仕草の蔭で金勘定

名優の仕草拍手がまだ続く

肉疑惑長蛇の列の薄笑い

怒ってる仕草で分る妻の乱

ノーベル賞視線集まる時の人

うちの子に限ってという落し穴

辞書を手で賞味期限を延ばしてる

歌手逝って仕草今でも目交いに

書いて消す鉛筆が生む無限大

蛙

都代子

正坊

求芽

一慧

敬二

良男

和代

英美

芳野

千太郎

たけし

正美

武男

史

輝治

三和子

潤子

てるこ

靖子

和子

けい子

正一

幸雄

富美子

正子

直樹

南大阪川柳会

吉川

寿美報

落書がくつきり浮いてる夜の街

板塀に落書無用と書いてある

落書の中で拾った天の声

落書とイタチごっここのガード下

うつつ憤を晴らす落書少年A

綺麗な塀なんでアートで汚すのか

落書と言つてはいるが筆の冴え

外車ショーンが溢れている平和

街の路地鈴虫の声聞く平和

手話が動いて大きい大きい笑い声

真実の口へ自信の手を入れる

五百羅漢バラバラでいて和を保つ

天の邪鬼ひとり交じって和を乱す

紅一点混じり自と和を保つ

イタリア製ネクタイ少し気取ってる

ゴンドラに朗々美声カシツォーネ

元同盟イタリア人は日本好き

伊国の娘身ぶり身ぶりがオペラ風

イタリアは唱って食べて恋をする

ルネサンスに戻れぬ神と人の距離

凶日を上手にまたぐ肝つ玉

世界中凶日にした同時テロ

歴見てかえる旅行の出発日

石橋を叩いて渡る不吉な日

凶日の生れも福を掴んでる

あきらめずあせらなければあすがくる

塩焼の鯛がノリトを聞いている

凶日と言つておれない宮仕え
凶日を洗濯機に入れて回す
和菓子好きケーキも好きでやせられぬ

翠洋会

六吹 尚士報

夫婦でも歳の差哀し老いの坂

実力の差は追従でカバーする

歳の差が何だ宇宙へ行く時代

偏差値で息子を縛った日を悔む

人思う情に差はなし雲流る

迷惑を無視ケイタイのでかい声

うそ泣きは母見抜いてる無視してる

出世した仲間が知らん顔をする

長男の嫁の疲勞は無視される

常識を無視して挑みノーベル賞

久しぶりショートカットで会いに来る

しばらくにはらみ合ったが妻が勝ち

あんばんでしばらく腹の虫おさえ

コーヒークップお久し振りと言交わす眼

なる様になるすましてる横座り

マスケットご先祖さまが食べてから

里ごころ祭太鼓が掻きたてる

限りある命と思う友の通夜

値切るのは大阪弁にかぎるらし

逝く人へ産まれる人へのし袋

消しゴムで消せる自画像かいてる

拉致の人歓迎してる虹の橋

作業衣の道一筋にノーベル賞

平均寿命のびた分だけ欲を捨て

庸佑
ひさ乃
朝代

尚士

義

蕉子

澄子

正雄

桃花

正坊

真理子

富子

舞夢

さよ美

伽羅

孝一

蛙

照子

志華子

久峰

東雲

日の出

千梢

春

恭昌

昭

柳界展望

十戒とゲーム続けてきた
命 山本 玉恵

開催された。

〈天位〉
省略をしたら私が消えて
いた 田中 正坊

新同人紹介

軸丸勝巳
紫香・武庫坊・年代推薦

●吹田市民川柳大会は、10月27日吹田メイシアターで、182名の出席を得て開催された。当日の天位は次の通り。

歳月よやがて憎しみ透き
通る 山本希久子

●第49回八尾市民川柳大会は、11月3日106名の参加を得て八尾商工会議所で開催された。本社関係者秀句は次のとおり。

魂の渴き仏を見失う
森下 愛論

●第52回富田林市民川柳大会は、89名の出席を得て10月19日富田林中央公民館で開催された。当日の本社関係者天位は次のとおり。

地車が来るので窓は開けてある 太田扶美代

●第52回岸和田市民川柳大会は、10月20日68名の参加を得て開催され、当日の本社関係者秀句は次のとおり。

ひよつとことおかめで調子合う夫婦 桜井 千秀

い日だつた茶漬けゆつくり胃に落ちる 徳山みつこ

●第10回相生もみじまつりは、10月20日相生市総合福祉会館で136名の参加により開催された。当日の本社関係者天位は次のとおり。

柏市文化祭川柳大会併せて東葛川柳会発足十五周年記念大会（11月2日）で、播本充子さん（東京都）が次の賞を受けた。

〈千葉県川柳作家連盟賞〉
老兵の美学 自ら幕を引く

●第26回寝屋川市民川柳大会は、11月3日市立総合センターで93名の参加を得て

青森県川柳社では次の通り各受賞者を発表した。

〈不浪人賞〉
人間の顔になるまで石を彫る 西谷 大吾

〈一路大賞〉
戦争の話は長い だけど聴く 高瀬 霜石

〈年間賞〉
歩いてても歩いてても雪村 眠る 他4句 西谷 大吾

●第10回風のまち川柳大賞が決定。青森県蟹田町で句

天笑・蘭幸・青居・不朽推薦

沖浜正宏

福島万年

天笑・蘭幸・青居・静風推薦

正畑半覚

天笑・蘭幸・青居・英子推薦

宮本三喜夫

緑良・大輪・英子推薦

碑が建立される。

はじまりは風がめくった

一ページ 住友 泰子

▼出版▲

□大阪府能勢公民館川柳講座(出口セツ子講師)では、五周年を記念して合同句集『川柳ささ百合』を刊行。

A5判・40頁

▼人事往来▲

□第17回国民文化祭川柳大会に、薫風名誉主幹は二次選者、天笑主幹は事前投句選者として鳥取県鹿野町行。岳人理事長、紫香相談役、みつ子副主幹、蘭幸・楓楽・たもつ副理事長他多数10月25、26日、チャータバスで参加。

☆薫風名誉主幹、岳人理事長、みつ子副主幹ほか13名は、川柳塔唐津支部20周年記念句会に出席のため、11月1日、3日唐津市行(詳細は1月号に記載予定)

▽句会名称変更△

○川柳塔打吹を、このほど打吹川柳会と変更

▼計報▲

■永田曉風氏(誌友・宝塚市)は10月16日逝去。平成6年川柳塔賞受賞者 92歳
■奥谷富士郎氏(同人奥谷彩子さん夫君・鳥取県)病気のため11月8日逝去。11月10日葬儀。行年70歳

□常任理事会11月21日

出席16名 ①各担当部署からまつりの反省 ②14年度常任理事役割分担 ③特別常任理事会・総会の課題 ④同人1名承認 ⑤26日の国文祭参加の詰め

お知らせ

10月21日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたので、お知らせします。(太字は部長です)

総務部	企画事業部	編集部	句会部	同人部	渉外部	会計部	発送部
前 たもつ	坊農 柳弘	西出 楓楽	大内 朝子	長浜 澄子	松原 寿子	鶴田 遠野	米田 恭昌
藤田 泰子	河内 月子	木本 朱夏	山本 義子	山本 希久子	籠島 恵子	高田 美代子	

□常任理事会11月5日出席者13名 ①総会文書提案事項について各々検討のみとする ③国文祭バス旅行会計報告 大阪文化祭の件 ④同人6名承認
▽次回常任理事会 12月2日(月) 会場・時間は例月通り

松まつ
尾お
和わ
香か

堂どう
上うえ
泰やす
子こ
— 緑良・大輪・英子推薦

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	14日(土)午後4時から 宴・始める・女盛り	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 磁石・残る・和服・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	15日(日)午後2時から 用心・幕・友情・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から さっぱり・始末・柱・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	18日(水)午後6時から 漬物・濡れる・ブック・水車	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から 強気・やけくそ・暦・句読点 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川 柳 会 梨 花	21日(土)午後1時から 非・暮らす・領収書 もうすぐ・雑詠	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	21日(土)午後1時半から 強い・手伝い・どぎつい・涙	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
はびきの 市 民 会 川 柳	22日(日)午後1時から びくびく・崩す・師走・シート	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	23日(月)午後1時から 巷・あかんべ・用事	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から ストーブ・今年の出来事 雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 盛・仰ぐ・氣迫・詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	28日(土)午後6時から 人気・別れ・ゴール・無	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
城 北 川 柳 会	12月に限り休みます。	〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

12 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5 日(木)午後 1 時から 折り紙・コーヒー・寄付	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	6 日(金)午後 1 時から 来年・視線・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 唐津支部	6 日(金)午後 1 時半から 短・段・次	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
富 柳 会	7 日(土)午後 1 時から 終点・告げる・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土)午後 1 時から 鐘・写真・喋む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8 日(日)午後 1 時から マスコット・逃げる ちょっぴり・帳尻	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	8 日(日)午後 1 時から 千・継続・まごころ さっぱり	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ふうもん 吟 社	8 日(日)午前 9 時から 没 句 供 養 川 柳 大 会	全労災ビル (11月号P.82参照) 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
西宮北口 川 柳 会	9 日(月)午後 1 時から 宗教・渡る・のどか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火)午後 1 時から 伝統・突然・越える	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10日(火)午後 1 時半から 命・飯・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	12日(木)午後 1 時から 熱い(共選)・うどん さかな(折り句)	堺市民会館 4 F 小集會室 (例月と変更) 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
打 吹 川 柳 会	14日(土)午後 1 時から えらい(だるい)・効果・曲	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川 柳 塔 ま つ え	14日(土)午後 1 時半から 運・故郷・絆	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘

編集後記

☆11月号柳界展望でお知らせした通り、初歩教室の担当者

が交代になる。今月号

まで担当して下さった吐田

公一氏には、丸6年半の長

きに亘り添削指導をいただいた。その中からは大きく

成長された方も数多い。

☆毎月15日に本社で締め切

った投句を、17・18日頃受

け取り、必ず24日までに原

稿を送って下さった。氏は

仕事をもっておられる他、

貴石画は既に趣味の域を出

ている腕前で、名が通った

存在である。担当中は時間

繰りや体のきついこともあ

っただろうと、改めて感謝

しお礼申し上げます。

☆新年号からの担当は、和

歌山の三宅保州氏。『川柳入

門Q&A』一たかが川柳さ

れど川柳—という冊子を刊

行しておられる実力者。川

柳に対する情熱は、公一氏

に勝るとも劣らないので、

誌友の方はどしどし応募し

て下さい。

☆退屈の味を忘れてしまい

そう—以前に作った私の句

現代人の大半がそうである

ように「忙し症候群」の一

人の私は、重い病状がある

人に愚痴った。すると曰く

「忙しさを楽しまないと損で

しょ」。その一言にばろりと

目の鱗が落ちた。そう、楽

しまなくちゃ。以来「忙

しい?」と聞かれたら「お

薩様で」と答えることにし

ている。

☆がしかし、いよいよ師

走。光陰矢の如しの格言が

身にじんじん沁みわたる月

である。あれもこれも片づ

け、大掃除もきっちりすま

せ、新しい年を迎えたいの

だけど、また今年も見切り

発車になる可能性大。(ふ)

ひとこと

ピリケンさん

今年七月二十四日、南大阪川柳

会へ出席させていただいた。毎月

東京から投句して一年以上になる

のに、会の皆さんのお顔を拝見し

たことがないので思い切って出か

けてみた。新大阪駅へ着いたのは

昼頃。荷をホテルへ置いて直行し

たのは通天閣タワーだ。

ピリケン像へどうしてもお参り

したかった。学生時代に一度行っ

た折には何をお願いしたのか全く

覚えていない。でも今回は足の裏

をガリガリ掻いてこうお願いし

た。「大阪の皆さんに川柳を通じ

てお仲間に加えていただけますよ

うに。自分の川柳が吐けますよう

に。」

最初の願いは叶えて下さったが

二つめは…。今も心の中でピリケ

ンさんの足の裏を私は掻いてい

る。

やまぐち珠美

○ビデオとFAXを退職記

念に子供たちが贈ってくれ

た。中年の恋が切ない「旅

愁」西洋チャンバラの「三

銃士」とビデオを楽しんだ

が、ながら族の私には向か

ぬ。子供がおもちゃに飽き

るように私もすぐに飽き

た。

○FAXは便利だ。郵便の

ように時間がかからない。

原稿でもなんでもすぐに送

れる。こんな便利なものを

何故いままで使わなかった

のか不思議だ、と喜んでい

火急の用件以外はメールを

たのも束の間。鬼のおっと

失礼、仏の編集長から校正

用の原稿がシウルシウル送

られてくる。居ようが居ま

いがお構いなしである。

○ついに携帯電話も持つ

た。当座は持つて出るのを

しばしば忘れ皆に叱られ

た。嫁いだ娘にメールを教

えて貰ってから、こんな楽

しい物はないと大いに気に

入った。

○電話は相手の時間帯や状

況を考えねばならないが、

火急の用件以外はメールを

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（2月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

2月号発表(12月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	奥田みつ子選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	政岡日枝子選
吟題(3句)	石尾かつ乃選
「次」	北川竹萌選
「段」	吉村さち子選
「短」	

初歩教室「漬ける」(3句) 三宅保州担当

3月号
課題吟「止める」「極める」
「除く」
初歩教室「座る」

本社12月句会

とき 12月6日(金) 午後1時・2時半締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
―開会時間変更にご注意下さい。―
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

兼題 「アリバイ」
「他人」
「つかむ」
「明日」
「築く」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

村上玄也選
板東倫子選
米田恭昌選
宮口笛生選
河内天笑選

本社1月句会 1月7日(火)

兼題 「テロ」「鍵」「大切」
「思う」「三が日」

夜市川柳募集

第7回「痛い」 板野美子選
ハガキに3句 12月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページに投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇一三年(平成二十四年)十一月一日発行

編集 河内権治

発行人 美研アイト

印刷所 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691

振替 〇〇九八〇一五―三三三六八番

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178